赤松中学

緋弾のアリアIX

Aria the Scarlet Ammo

蒼き閃光（スパーク・アウト）

MF文庫 J

緋弾のアリアIX

赤松中学

580

MF文庫 J あ-05-12

ISBN978-4-8401-3859-8
C0193 ¥580E

9784840138598

1920193005806

定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー

緋弾のアリアIX　蒼き閃光（スパーク・アウト）

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称『武偵』を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジ。犯罪組織『イ・ウー』の崩壊により始まった二つの連盟――『師団（ディーン）』と『眷属（グレナダ）』の争いに巻き込まれたアリアとキンジ。ワトソンとの戦いを終えたキンジの前に現れたのは、ヒルダ側に寝返った理子だった。ヒルダにもてあそばれる理子の心にキンジの呼びかけは届くのか!?　穏やかに進む文化祭、そして迫り来る大いなる恐怖――。大スケールアクション＆ラブコメディー第９弾!!

【著者】

赤松中学
あかまつ・ちゅうがく

生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。『アストロノト！』で第3回MF文庫Jライトノベル新人賞優秀賞を受賞。本作・武装学園小説『緋弾のアリア』は、同作家の2シリーズ目となる。

【イラストレーター】

こぶいち

ゆずソフト所属の原画担当。
代表作は『ぶらばん！』『E×E』『夏空カナタ』『天神乱漫』『のーぶる☆わーくす』。
小説では『これはゾンビですか？』（富士見書房）の挿絵を担当。
趣味はゲーム、読書。
ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。
http://tyatsune.blog87.fc2.com/

カバーイラスト／こぶいち　装丁／百足屋ユウコ（ムシカゴグラフィクス）

赤松中学

緋弾のアリアIX

Aria the Scarlet Ammo.

蒼き閃光（スパーク・アウト）

MF文庫 J
あ-05-12

緋弾のアリアIX
赤松中学

MEDIA FACTORY
580

9784840138598

ISBN978-4-8401-3859-8
C0193 ¥580E

1920193005806

定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー
MEDIA FACTORY

緋弾のアリアIX　蒼き閃光（スパーク・アウト）

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称『武偵』を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジ。犯罪組織『イ・ウー』の崩壊により始まった二つの連盟――『師団（ディーン）』と『眷属（グレナダ）』の争いに巻き込まれたアリアとキンジ。ワトソンとの戦いを終えたキンジの前に現れたのは、ヒルダ側に寝返った理子だった。ヒルダにもてあそばれる理子の心にキンジの呼びかけは届くのか!?　穏やかに進む文化祭、そして迫り来る大いなる恐怖――。大スケールアクション＆ラブコメディー第９弾!!

MF文庫J 赤松中学の本

アストロノト！ 1～3 [イラスト：bomi]

緋弾のアリア [イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアII 燃える銀氷
[イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアIII 蜂蜜色の罠
[イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアIV 堕ちた緋弾
[イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアV 序曲の終止線
[イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアVI 絶対半径2051
[イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアVII 火と風の円舞
[イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアVIII 螺旋の天空樹
[イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアIX 蒼き閃光
[イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアIX

Aria the Scarlet Ammo

蒼き閃光（スパーク・アウト）

赤松中学

P11 1弾 紫電の魔女（ドラキュリア・ヒルダ）

P66 2弾 素晴らしき、理子（フィー・ブツコロス・リコ）

P104 3弾 秘密のリハビリ（ボーイ・ミーツ・ガール）

P151 4弾 文化祭・1日目（カルナバル ヴィーア）

P206 5弾 文化祭・2日目（カルナバル フィナーレ）

P265 Go For The NEXT! Gの血族

Contents

赤松中学

緋弾のアリアIX

蒼き閃光（スパーク・アウト）

Aria the Scarlet Ammo

MF文庫J

あ-05-12

緋弾のアリアIX

赤松中学

9784840138598

ISBN978-4-8401-3859-8
C0193 ¥580E

1920193005806

定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー

緋弾のアリアIX　蒼き閃光（スパーク・アウト）

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称『武偵』を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジ。犯罪組織『イ・ウー』の崩壊により始まった二つの連盟――『師団（ディーン）』と『眷属（グレナダ）』の争いに巻き込まれたアリアとキンジ。ワトソンとの戦いを終えたキンジの前に現れたのは、ヒルダ側に寝返った理子だった。ヒルダにもてあそばれる理子の心にキンジの呼びかけは届くのか!?　穏やかに進む文化祭、そして迫り来る大いなる恐怖――。大スケールアクション＆ラブコメディー第9弾!!

TVアニメ放送開始!!

TBS:4/7（木）深夜1時25分から　MBS:4/11（月）深夜2時20分から
CBC:4/14（木）深夜から　BS−TBS:4/30（土）深夜1時から
＊放送日時は変更になる可能性がございます。

MF文庫J

TVアニメ化

TVアニメ化記念「緋弾のアリア」最新刊同時購入キャンペーン開催!

▶MF文庫J『緋弾のアリア』9巻（本書）▶アライブコミックス『緋弾のアリア』3巻
▶ヤングガンガンコミックス『緋弾のアリアAA』1巻（スクウェア・エニックス刊）

上記いずれか2冊をお買い上げの方の中から抽選で
50名に特製QUOカードをプレゼント!

特製QUOカードの抽選に漏れた方の中からさらに抽選で
500名の方に特製着せ替えクリアファイルが当たります!!

応募方法は折り返しをご覧ください▶▶▶

緋弾のアリアIX
スパーク・アウト
蒼き閃光

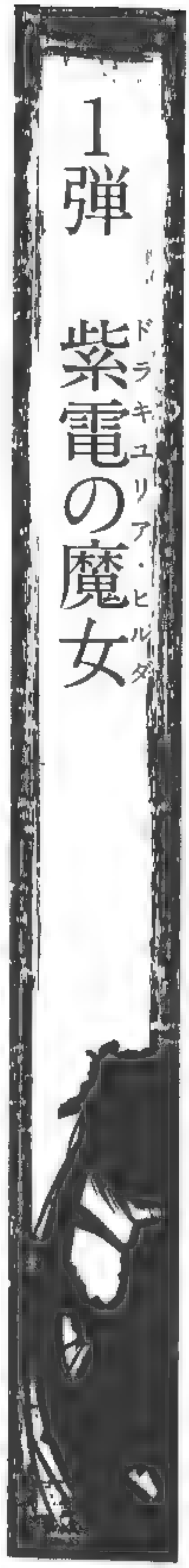
赤松中学

MF文庫J

イラスト●こぶいち

編集●笹尾明正

1弾　紫電の魔女（ドラキュリア・ヒルダ）



「――ワトソンっ！」

巻き上がる熱風に髪を暴れさせながら、放電音（スパークノイズ）の中、叫ぶ。

電光が収まってきたのを感じて、眩（くら）む目を擦（こす）ると……

「……ッ……」

上空から襲い来た球状の雷に打たれたワトソンは、第1展望台の床に伏せていた。

駆け寄って見れば、真っ黒な防弾コートを毛布のように広げ、フードで頭を覆（おお）い、甲羅（こうら）に隠れるカメのようになっている。

「大丈夫か……ワトソン！」

「……だ、大丈夫……では、ないな。あの魔女（ヒルダ）と関（かか）わった時から、そうしてきた、つもりだったけど……す、済まない、トオヤマ……しばらく……お、落ちる、よ……」

途切（とぎ）れ途切れにそう言ったワトソンは、それっきり微動だにしなくなる。

俺（おれ）はアリアを連れ去ったワトソンを追跡し、このスカイツリーまで来て――23分に及ぶ

死闘を繰り広げている。

超一流のエージェントを名乗るだけあって、彼……いや、彼女の戦闘能力は高かった。

ヒステリアモードの更に1・7倍の能力を誇る、ヒステリア・ベルセでも苦戦させられたほどに。

その、ワトソンが――

たった1撃、たった5秒で昏倒させられた。

見た事も聞いた事もない、直径2m弱のボール形をした雷……そうとしか表現しようのない物体を、上空から浴びせられて。

今のこの現象は、ヒルダによる攻撃と見て間違いないだろう。

あの『眷属』のコウモリ女は、半月前に俺たちを襲った時も高圧電流を使ったからな。

だが今の技は、あの時より遥かに強力だったな――

（あれを今、もう一発撃たれたら……！）

マズいぞ。

俺たちは、上――ヒルダが陣取っていると思われる第2展望台から丸見えのハズだ。

この第1展望台はまだ工事中で、鉄骨の柱以外に遮蔽物となる天井がないのだから。

（一旦、階下にワトソンを隠さないとッ……）

俺は気絶したワトソンを抱え、ここから退避しにかかる。

だが、エレベーターは停電したのか……仕方なしに駆け下りた工事用の階段の途中に、扉を見つけ――扉の奥は小部屋になっていて、配水用のパイプが乱雑に置かれていて、ここなら安全だろう。

ワトソンごと小部屋に入った俺は片膝(かたひざ)をつき、携帯をライト代わりにしようと広げた。

「……？」

その画面がおかしくなっている。

白地に黒文字で『Error code 961 電波障害が発生しています』とだけ表示されている。

通話ボタンを押しても『しばらくお待ちください』のポップアップが出るだけで、通話ができない。メールもダメだ。

「おい、ワトソン。しっかりしろ」

とりあえず画面は光るので顔を照らしてやりつつ、壁際に座らせた――朦朧(もうろう)としながらも、ワトソンはなんとか意識を取り戻してくれたか。

「……トオヤマ……こ、ここは……？」

「安心しろ。ここは第1展望台の下だ。コンクリートで囲まれてる」

「あ、ありがとう……それより、アリアは第2展望(えう)台だ。そこにはヒルダもいる……ボクにはアリアを連れてきてしまった、責任が……だから、頼む。同じ、アリア

を想う者として……頼む……！　救って
「――心配するな。俺は最初からアイツを取り戻すつもりで来てる。そ
ヒルダに変わっただけだ」
俺の言葉に安心したような目をしたワ
震える手で、自分のサーベルを渡して
「こ、この十字箔剣を、キミに、託す……使ってくれ。キミも見ただろ
これを、嫌う……」
喋る事すら辛そうなワトソンを前に、
こんな剣……俺は、初めて見るぞ？
どこかで見たような気もするが、記憶
「そ、そうか。この剣を覚えていない、
覚えているね？」
「ああ。お前が助けに来てくれて、ヒル
「……なるほど、すぐには見破られない
いいからこれを持っていけ。ヒルダには
「あ、ああ。分かった」
確かに――ヒルダはブラドの娘。同じ

こういうオカルト系の武器はニガテだが、四の五の言ってる場合じゃない。
俺は銀剣を受け取り、ワトソンが隠し持っていたスクラマ・サクスも下の下裾から出てしまうが……服の中に付けているシリコン製ホルダーのおかげで、落ちては来ないな。
十字箔剣は長く、柄が少しジャケットの
2振りの剣を受け取った俺に、ワトソンはガス圧式の小型注射器も渡してきた。
「ネビュラ……中枢神経刺激薬だよ。常態で打てば集中力が高まるし、ラッツォより強力な気付け薬になる。あと1回分ある」
「自分に使わなくていいのか。俺はあまり薬が効かない体質だぞ。さっき お前にやられた目の痺れ薬も――もう、解けてきてるぐらいだ」
「気休めには……なるだろう」
首を横に振ったワトソンは、天井の向こうを睨むように見上げた。
「ヒルダ……彼女は『紫電の魔女』。電気を操るが、それはジムナーカロレンチーニ細胞――生体的な発電器官を使って使う生理的な力だ。厄介なのは、ヤツが更に超能力も持ち合わせているコトだ。DNAを吸血で取り入れ、ハイブリッドってことか。
そいつは厄介そうだぜ。
「彼女の魔女性――能力は、その電力を使って素粒子を操る力だ。分かりやすく言うと、

周囲の物質を粒子にして、その粒を集めたり
応用範囲は狭く、効率も悪いようだが……今
雷球（らいきゅう）を作ったり……足元の地面を分解し、影
のようになって移動したり
正確には分からないが……
どうやらヒルダが影になって動き回るのは
溶かしてたって事らしいな。俺（おれ）なりの解釈で言うと。
「ヒルダは頭がいい女だ。それらの力に頼るだけでなく、暗示術（メスメリズム）――古
人間を自分の指示に従わせたり、何かを忘却させたり、かなり器用なこ
キミの外堀（そとぼり）通りでの戦いの記憶が曖昧（あいまい）になっているのも、そのためだ」
「吸血鬼・超能力・催眠術か。厄介（やっかい）の三暗刻（サンアンコウ）だな。もう一翻（イーフアン）乗ったりしないよう、俺は夏に理子（りこ）に無理（むり）強いされた麻雀（マージャン）の用語を出ねえだろうな」
気が滅（め）い人らの苦笑を見せた。
そんな俺の空気を察したのか、ワトソンは
「トオヤマ。確かにヒルダは難敵だ。だからボクはアリアごと『眷属（グレナダ）』にボクを信用させるためにヒルダと演技していただけなもう分かってるだろうけど――ボクは前々から
戦いも、アリアにボクを信用させるためにヒ
キミに渡した十字箔剣（クルス・エッジ）と法化銀弾（ホーリー）は、ヤツが本当に苦手とする物質だ。

渡す。キミが、『眷属』と戦うと宣言したから――」
「今の話を聞くまでは、だけどな……言ったのは。だがこのままじゃアカービルのリーダーとしてアリアだけ取られて、俺はバスカルまで男子として暮らしてきたから、女の子としてそういう言い方をされたことがなかったんだな。そりゃビックリもするか。
また冗談めかした事を言う俺に……ワトソンは立ち上がってみせようと足に力を入れたが、腰を浮かす事すらできない状態だ。
「トオヤマ……ボクも、た、戦う……！」
「お前はもう戦わなくていい。というか立てないだろ。可愛い女の子がさりげなく『可愛い』などという単語を交えたヒステリア俺に――ワトソンは、ビックリするっ。
「ぁ……かわ……って……言った……っ」
顔で、その場にオシリを落としてしまう。
何か……部分的に単語を復唱しつつ、俺をビビりまくりの目で見てくるぞ。
そんなに驚く事か？
ああ。
ワトソンは今まで男子として暮らしてきたから、女の子としてそういう言い方をされたことがなかったんだな。そりゃビックリもするか。

そして、今の遣り取りで分かったが――
俺はヒステリア・ベルセ状態でここに来たが、さっきワトソンを抱き上げた時に通常のヒステリア・ノルマーレも発動させたらしい。その2つを行き来しているような状態だ。
……いっぺん強引になって、抱きしめてからは優しくなるのか。
極めて悪どいな。ヒステリアモードのシステムは。
――他に何か、ヒルダについて知ってる事はないか」
ノルマーレのせいか、アリアが一層心配になってきた俺は――
そろそろ反撃に転じようと、銀剣を背に立ち上がる。
「1人で行くなら……1対2になるぞ、トオヤマ」
「1対2？」
「ボクはヒルダに完全には信用されていなかったから、会わせてもらえなかったけど……彼女には協力者がいるらしい。今夜も上で何か作業をさせていたようだ」
「敵がもう1人、か。厄介の役満だな」
溜息をついた俺を、ワトソンは……
「頑張れトオヤマ。勝てる可能性はある。ボクらリバティー・メイソンは、ああいう敵を相手にずっと戦ってきた。倒した事だってあるんだ」
せめて言葉でだけでも励まそうとしたらしい。健気な子だよ。

「……まあ、それは俺もだよ」
ありがとうよ、ワトソン。
それだけで十分だよ。
ヒステリアモードの今だ。女性の応援があるなら、挑めるさ。どんな難敵にでも。
いや。ヒステリアモードでなくても――男は皆、そうなのかもしれないけどな。
……
足音を殺しつつ戻った、第1展望台からはさっき部分的に停電していた街の灯りが、それで分かった、元に戻っているのが見えた。
近所迷惑な女だよ。
（しかし……撃ってこないな）
100m上の第2展望台を警戒するが、厚い雲に届きそうなそこに光はない。
いや、あるにはあるが、ボンヤリした照明程度の明かりだ。
（あれだけの大技だし……再装塡に時間がかかるのかもしれないな。もしくは、俺を誘いこんでから戦うつもりか？）
何にせよ、虎穴に入らずんば虎児を得ず、エレベーターが復活していたので、上行きのものに乗ろうとすると……

その入口辺りに設置された監視カメラが僅かに角度を変える音がした。

「……」

スカイツリーには何台かカメラが有ったから、なるだけ死角を歩いて来たが……これはヒステリアモードだから分かるが、あまり広角カメラだ。

それらの作業用カメラとは機種が違うな。

どうやら昨日今日取り付けられたものらしいな。

ヒルダ。お前、最初から俺とワトソンの塵や埃も付着していない。

――高く付くぜ、その見物料はよ。

（塔の1階層ごとに敵がいるなんて、まるでレトロゲームみたいだな）

などと考えつつ、工事用エレベーターを乗り継いで上昇を繰り返す。

航空機が衝突しないように灯された赤い警告灯が、その金網から格子状の影を俺の顔に落とす。

眼下の景色は、人工衛星から撮影した航空写真のようだ。

「……」

エレベーターは柱にマジックで『435m』と書かれた所まで続いており、そこからは鉄パイプと鉄板を組んだだけの簡素な階段が上へと続いていた。

周囲を見回すと、いかにも建築中といった造りの甘さだ。
鉄骨は剥き出しで、安全柵も金網とワイヤーで作った適当なものだな。
強い風が吹くと、塔全体が揺れるような気さえする。いや、実際揺れているんだろう。
あちこちから、キイ、キイ、ギイ、ギイと建材の継ぎ目が軋む音が聞こえてきている。
キイ、キキッ、という別の音に顔を上げると――
「……ッ……」
天井のあちこちに、コウモリがとまっているのが見えた。
どうやらここは、夜にはコウモリの巣になってるらしい。
50匹はいるだろうか。1匹ずつは小さいが、あああやって大挙して逆さづりの姿勢を取られると気味が悪いもんだな。
コウモリを見渡しつつ、『450mマデ上リ』と書かれた階段に踏み出すと――
「――キンジ」
頭上から、アニメ声がした。
「……!?」
振り仰げば、
「アリア……！」
アリアだ。
「――」
鉄骨の陰に――

ピンクのツインテールを風に靡かせ、細かい穴の開いた鉄板の踊り場に立っている。

よかった。無事だったんだな。

「大丈夫か？　ワトソンに薬を飲まされたらしいが――」

「平気よ。ここに来たってことは……戦ったんでしょ？　何が何だかだったけどね。ここに着いた時は寝てたから……何が――」

階段を駆け上る俺と、降りてくるアリアの足音がカンカンカンと交錯する。

「あんたとワトソン、上がってくるのはどっちかって思ってたけど……そう。ワトソンが負けたのね。日本語ペラペラだったワトソンは……うーん、仕方ないわね。ヒルダとの取引に失敗したんだから。その辺の話、もう聞いたんでしょ？」

俺を窺うように見てきたアリアは、俺以上に訳知り顔だ。

どうやらヒルダか、その協力者とやらに粗方の話を聞かされたらしいな。

「……ああ。まある程度はな」

「そう」

一つ瞬きをしたアリアが、きゅ。

俺の袖を掴んで、少し引っ張り上げた。

「来て。ヒルダと話すわよ」

「話す、って。俺とお前はヒルダの親父の……殺しちゃいないが、カタキなんだぞ。話が

通じる相手なの
「通じるわ。ヒルダはブラドより計算高いの
倒したキンジを
「……買いかぶられたもんだな」
「キンジ、それなりに警戒してるらしいわ」
までではできなく
「キンジ、ただ戦うだけが武偵じゃないわ。
しれない」
……ヒルダとバスカービ
そう言うアリアに手を引かれながら、俺は
スカートの裾からいわゆる銃チラ状態で見
帯銃したまま。背中の小太刀もある。
ここへ来た時は眠っていたのに、ヒルダに
なら――確かに、ヒルダは話が通じる相手
「……？」
見れば、アリアが……
イヤリングを
それも片耳だ
どこかで見覚
交渉できるならして、『師団』に寝返らせる
間で、不可侵協定ぐらいなら結べるかも
階段を上がっていく。
えたが――アリアは、ガバメントを両方とも
武装を解除させられなかったのかもしれない。
なのかもしれない。
ア
しているな。
け、トゲトゲした黒いイヤリングを付けてる。
えがあるような気がするんだが……どこだっただろう。
ングを

まあアリアの趣味なら言わぬが花だが、あまり趣味がいいとはいえないな。

なんというか、コ・コウ・モ・リっぽくないか？　その形。

だとしたら――ヒルダの翼を想起させる、イヤなデザインだぜ。それは。

気温というものは、１００m上がるごとに０・６度ずつ下がる。しかも時刻は夜中だ。

地上も秋風で肌寒かったが、吹きさらしの４５０m――第２展望台付近は、冬山のように冷たかった。

スカイツリーはまだここまでしか出来ておらず、真上は、空。

階段の終点から見上げたその空に、星は見えない。

その代わり深く垂れ込めた雲があって、それが強風で早送り映像のように流れていた。

周囲に建物が全く見えないから、自分がその雲の中にいるような錯覚さえ覚える。

「……」

アリアと２人で、さっきの第１展望台より狭い第２展望台を見渡すと――

機材は周辺に片付けられていて、丸くコンクリートの床が広がっている。

照明はあまり明るくないものがあちこちにあって、床を不規則に照らしていた。

ヒルダの姿は……無い。

その代わり、北側の一角に祭壇のようなものがある。

いや……祭壇じゃない。
通常のものより遥かに大きいが、あれは……棺桶。柩だ。
漆黒の柩が、鮮やかな真紅のバラで飾り付けられている。
あの大輪のバラは――かつてブラドが『アリア』と名付けた新種のバラ。
それが大量に集められて、棺桶を埋め尽くすように添えられている。
その周囲には霞草代わりなのか、絡み合うツタ植物がこっちの足元近くまで伝っていた。
「ヒルダ……こんな物まで用意して。交渉次第では、これに入れって意味ね」
アリアの視線を追うと、俺たちのそばにはマホガニーの棺桶が大小2つ並んでおり――

Kinji Tohyama
Aria Holmes Kanzaki

という彫金のプレートが、それぞれの蓋に付けられていた。
持ち運ぶためにか、2つの棺桶は太い電気コードのようなケーブルで繋がれている。
「……一応もらっとくか。いずれ一度は入るモンだしな――」
少し背筋に寒いものを感じつつも、俺はその棺桶を一蹴りする。
そして、キキッ――
と、コウモリが視界を横切った直後……
「――『柩』とは終の棲家。たった数平方mとはいえ、何人たりとも侵されざる個の領域。

それは気高き吸血鬼からの、至上の贈り物と心得なさい」

ぞぞ……ぞぞぞ……

北側の豪華な黒柩から、フリフリの日傘が出てきた。蓋を開けすらせずに。

（ヒルダ……！）

くる。くるる。

ふざけるように回す傘で顔を隠しつつ、ヒルダは——

棺桶のフチに脚を組んで腰掛ける姿勢で、浮かび上がってきた。

その顔が、斜め下からの照明に照らし出されている。

（敵ながら——美人だな）

一目見た時から分かってはいたが、ヒステリアモードの今は一層それが理解できる。

蝋細工のように白い肌。その中で妖しく輝く、切れ長の赤瞳。紅のルージュに彩られた唇。先端に縦ロールを掛けた金髪のツインテール。キレイに筋の通った鼻先……

その美人が漆黒を基調としたゴスロリ服を着ると、退廃的・魔的な感じがして——実際魔物のヒルダには、違和感がない。

何段にも重ねられたフリル、機械織りではない手作りのレース、黒絹のリボンで豪華に飾られたモノトーンのドレスを当たり前のように着こなしたヒルダは——

「ふふっ。見とれているのね」

俺の視線に気づいたのか、脚を挑発的に組み替えた。
パニエで贅沢に膨らませたミニ丈のスカートの下、太ももに伝うガーターベルトの横で、白いイレズミのような目玉模様が……ウィンクするようにチラッとのぞく。
蜘蛛の巣柄のタイツで引き締められた脚線美は、サディスティックなムードをたたえて黒光りするエナメルのピンヒールへと繋がっていて――
「まあ、ムリもない事だけれど。私は、美しいから」
ヒルダの姿に、俺は見とれるというより――飲まれた。
俺はヒステリアモード状態で対峙する事で、ヒルダの『格』を悟ってしまったのだ。
「……ッ……」
この、触れることすらできないような不可侵の気配。
まるで魔王、ヒルダが座ったことで王座に変わったような錯覚がする。
そこの柩さえその女版だ。
「お前たち人間が名も無き雑草なら――私たち吸血鬼は、手入れの行き届いた温室のバラ。天が与えたデザインからして、もう違うのよ。好きなだけ見なさい。星を見る犬のように、決して手の届かぬ高等種――それも、異性の私を。恋い焦がれなさい。希いなさい。ただ見る事しかできないのだから、せめて、見るのよ。ご覧、ご覧、目を逸らさずに……」
くす、くす、と笑いながら、赤いマニキュアをした指を口元に添えるヒルダから――

――!?　……なぜだ。

ヤツが言う通り、目が逸らせない気がしてきた。

「そう。それでいいのよトオヤマ。そのまま、苔むした墓碑のようにジッとしていなさい。

そう……そうよ。私の言う事をよく聞く、いい子ね。ほほほっ」

……！

やられた……暗示術。ワトソンが言っていた、催眠術の一種だ。

これは――暗示術（メスメリズム）。ワトソンが言っていた、催眠術の一種だ。

いきなり、初見で使ってきやがった。

身動きが……取れないッ……！

「ゴメンね、キンジ」――

アニメ声で言いながら、アリアが……自分の棺桶の陰から、鎖を引っ張り出した。

床の穴から出た鎖が、チャリチャリ音を立てて伸びてくる。

「……!?」――

さっき屈んだアリアの太もも――そのホルスターに収められた、ガバメント。

その傾き方の違和感を、ヒステリアモードの目が捉えた。

（重心のバランスが、僅かに……いつもと違う……？）

――まるで、弾が入っていないような――

それに気づいた瞬間、かちゃ、かちゃ。
アリアは素早く俺の首を鎖で縛り、更に真鍮の錠前を掛けた。
（――アリア？）
それにすら何もできずにいた俺の視界では、パチ、パチ、パチッ……！
「ほほほッ……！」
ヒルダのロールのかかったツインテールが、小さく放電するのが見えた。
その手には、細かい金属でヘビの鱗のように表面を覆われたムチが――
「んッ……！」
と、ヒルダが一つ息んだとき。
――バチッッッ！
電流音（スパークノイズ）が鳴り響き――
「……うッ！」
俺は、自分の名が刻まれた棺桶の脇に倒れたのだ。あのヒルダのムチから、俺の首に掛けられた――この鎖で。
感電させられた――
伝って繋（つな）がっていたヒルダが、超音波じみた高笑いをする。
「ほーっほほほッ！　こうも考え通りに事が運ぶと、拍子抜けするものねぇ」
手の甲を口にあ

「……ッ！」

外堀通りの二の舞を演じてしまった俺は、歯を食いしばり――

……なぜだ！　という目でアリアを見上げる。

だが、アリアは無言で俺を見下ろしてくるだけだ。

「美しいバラには棘がある――トオヤマは美女に弱いと聞いたけど、それだけだ。

鎖から外したムチを両手で引っ張り、ぱんっ、と鳴らしたヒルダはー

柩の上に立って、カツン！　更にピンヒールを鳴らした。

「――私は、ワトソンとは戦いたくなかったの。だからトオヤマ、お前がワトソンと戦うように仕向けた。お前は普段愚物でも、ここ一番の勝負に強い所があるから――予想通り、あの法化武装を持つワトソンをうまく露払いしてくれたわ」

ワトソンは、戦う前まで俺を騙していたが――

そのワトソンは、更にヒルダに騙されてたってワケか。まるで化かし合いだ。

そういう戦い方も、あるのか……コイツらとの『戦役』では……！

「この塔の名は『天空樹』とか。お前はその樹木を這い登るアブラムシのようだったわ。ほほほほほっ……トオヤマ、お前は這い続けなさい。私は――翔ぶ――」

――ばさぁ――

ヒルダは左右に1mほどずつ、そのコウモリのような翼を広げた。

その人ならざる形の影が、言われた通り這うばさっ。ばさぁっ――

何度もヒルダが羽ばたくと、彼女の足下に下降気流が作り出されていき……

その風が柩の周囲のバラを吹き飛ばし、その下には……

「……アリア……！」

ここにいるのとは別の、もう1人のアリアが倒れていた。

バラの花でロールごと体に鎖を巻かれていた。

そのアリアは、ツインテールの足首を、巧みなムチ捌きで絡め取ったヒルダは――

ぶんっ！

翼でバランスを取りながら、ムチを振り回してアリアを放り投げてきた。

「！」

10m近く飛ばされたアリアは、ごつッ！

自分の名が彫られた棺桶にぶつかって、目をグルグル回してる。

「……？」

見ればアリアは、甘ロリ風に改造した武偵高の制服を着ていた。

この、ヒラヒラの服は――

「ヒルダが――キンジを警戒してたのは、本当だよ」
倒れたアリアを見下ろす、もう1人のアリアが呟く。
立っている方のアリアは、自分の顎の下に手をあて……ぺりっ、ぺりぺりっ……と、特殊メイクの薄いマスクを剥がしていく。
その下から現れた、顔は……
「だから少し違う展開も期待してたけど……相手が悪かったよ。キー・くん・理子！」
――理子！
「理子……なんで、お前が、ここに……!?」
「……」
制服もアリアと取り替えていたらしい理子が、無言でカラコンを外して捨てる。
「――お手柄よ、理・子・」
ムチを背後に戻したヒルダは、先日のように理子を『4世』とは呼ばない。
「理子。お前には、私にはない技術と能力があるわ。私は、それを高く評価していてよ。だから私はお前を遺伝子としてではなく、竜悴公家の正式な一員……私に次ぐ次席として取り立てるわ」
そして柩から下り、カツン、カツン、とピンヒールを鳴らして近づいてくる。
「……」

対する理子は、複雑な表情をヒルダに向けていた。
コイツも、暗示術にかけられたのか……？
いや、そういう感じじゃない。理子は自我を保っている。
じゃあ、なぜ、理子……！
「それに……おまえは、とても愛らしい。お前は昔から私を憎悪しつつ、憧れてもいたのでしょう？　そのこっちまで歩いてきたヒルダは、白い指で、私の心を疼かせていて、私の心を愛でるようにまるで、お気に入りの人形を愛でるようにね理子。かつてはお父様の手前、お前を犬のように扱ったけど……それはかったのよ」
真紅のマニキュアをした指が、なされるがままの理子の頭や頬を撫でる。
何度も、何度も……優しく。
「トオヤマとの一件にも色々あったようだけど、全部忘れなさい。男なんて、くだらないわ。それに私が殺されても、トオヤマはいずれ『眷属』に殺される運命にあった。だから、あなたに罪はないのよ」
そこで少し俺の方を見そうになった理子の顔を、ヒルダが胸に抱き寄せた。
「もう過去を振り返ることはやめなさい。お前も知っての通り、このイヤリングは――」

ヒルダの白い指が、理子の片耳についたコウモリ型のイヤリングに触れる。
「――竜悸(ドラキユラ)公家の、正式な臣下の証(あかし)。お前が外そうとしたり、耳を削ぎ落とそうとしたり、人り――お前は10分で死ぬわ。これは裏切者を再度取り立てるとき、浄罪のために付ける決まりになっている物なのよ」
……ッ……！
ヒルダ――この、魔女……！
「そんなモノを付けて……操ってたのか、理子を……！」
俺は少しだけ動かせるようになってきた腕で、上体を押し上げようとするが……
ダメだ、ヒステリアモードの力でも起き上がれない。
「キーくん」
ヒルダの腕の中から出てきつつ、理子が俺に言う。
「理子も――いろいろ考えたよ、これを付けられてから」
考えた……？
「理子は元々、怪盗の一族。キーくんたちとは違う、闇(やみ)に生きる……ブラドやヒルダ側の人間だったんだよ。それがいつの間にか、キーくんやアリアたちの側について人としてブレてたんだ」

ヒルダと俺の間に立った理子が、俺を見下してくる。

「ヒルダは闇の眷属。生まれながらの悪女だよ。でも……自分を貫いて、最後の吸血鬼になったのに……誰の庇護も無く、戦い続けてる。自分が何者なのか分かってる」

理子……

「それにヒルダは、仲間には貴族精神をもって接してくれる。変装食堂の衣装を作った夜……ほんとはね、理子はヒルダに会って交渉してたの」

そういえば、理子はヒルダに。

理子は衣装を作り終えてから、誰かに呼び出されて教室から出ていった。

あの時すでに――接触されていたのか。ヒルダに。

「その時は物別れになったけど――理子は驚いたんだ。ヒルダの態度はとても丁寧だった。理子と同盟する条件を出してもいい、とまで言ってきた。そのあと外堀通りで理子はヒルダとまた話したよ。戦ってから、理子はもうこのイヤリングがあったから、従うしかなかったけど……理子は『組むなら――それから一度も、あたしを4世と呼ぶな』を『4世』とは呼ばなくなったよ」

そしたらヒルダは満足げに目を細めた。

俺たちに語る理子の背後で、ヒルダは満足頭を撫でながら、何かを言おうとした時――

そして理子の

――もごもごッ！

俺の横から、くぐもったアニメ声が上がった。

「……アリア……？」

痺れの残る首で何とか振り向くと、アリアは自分の口を塞いでいた布を――今まさに噛みちぎっているところだった。

そのネコっぽい犬歯で何度もモグモグ噛みしめている。

「――ぷはっ！」

と大きく呼吸をしたアリアは、ワトソンのハッキリとしたツンツンまつ毛の目で、理子を見上げている。

「――一通り聞かせてもらったわ。理子。あたしは……あんたを責めはしない。誰だって命は惜しいものよ」

アリアは俺の陰に隠れるような位置で、割と物わかりのいい事を言ってる。

「でもね理子。貴族（ディム）として言わせてもらうけど、ヒルダの貴族精神は見上げたものだわ。あんたに随分甘いらしいけど、それは言うことを聞かせるためにキャンディーをあげてるのと同じこと。あんたはソイツに見下されてるのよ！　子供扱いされてるのよ！」

ヒルダの目が……図星を突かれたように、鋭くなった気がする。

アリア、余計な挑発はよせ。

こっちは文字通り、手も足も出ないんだぞ。

「誰も言わないなら、あたしが言ってあげるわ。ヒルダはあんたをその奴隷にしてるだけなのよ！」

ヒートアップするアリアに、ヒルダは――

「人間の分際で……高等種族の吸血鬼に、偉そうな口を利くわね……」

案の定……怒りだした。

「吸血鬼はちっとも高等じゃない！　教えてあげるけどね――イギリスの奴隷制度廃止法が成立してるわ。あんたは150年は遅れてるのよ！　なんかとっくに卒業してるのッ！」

あの。アリアさん。

あなた初めて会った日から俺をドレイ扱いしてきませんでしたか？

「――それにね、吸血鬼顔負けの犬歯を剥き出しにして、俺の背後でびょんびょん暴れ出した。

アリアは理子に――

そして縛られたまま、俺と利害関係があった。別件裁判があったから、あんたにキンジとあんたとの!?　キンジは、何度もあんたの命を救ってる。

「あたしはママの――

理不尽には思わない。でも、キンジはどうなの!?　キンジは、何度もあんたの命を救ってる。

ほどの貸し借りはなかったハズよ。それなのに、

あんたはキンジを信頼すべきだわ！　ヒルダなんかじゃなく！」

びちびちっ！
縛られたまま、アリアは陸に揚げられた魚のように跳ねている。
「キンジを信じないで罠にハメるってんなら――キンジの相棒として、戦う義理があるんからね！　覚悟しなさいよっ!?」
びちびちっ！　びちびちっ！
アリア魚は跳ねながら――
しゅるっ……しゅるるっ……！
（こ、コイツ……！）
鎖から、抜け出てるっぽいぞ。
そうだ。思い出した。
9月に新幹線でコに俺ごと縛られた時と同じで、アリアはツインテールごと縛られた時に限って縄抜けができるんだった。
――ちょうど、揉まれたネコジャラシの穂が人の手から抜け出てくるのと同じ原理で。
それに気づいた俺は、自分の背でアリアの動作をヒルダから隠す。
「おしおきしてあげるわ、理子。そこのヒルダと2人並べて、ねッ！」
しゅるんっ！
鎖から抜け出たアリアは、すかさず俺の背からワトソンの十字箔剣を抜いた。

「――ッ！」

それを見たヒルダが、腰からムチを外そうとする。

だが、反撃には間に合わない。

「やッ！」

理子（りこ）の改造制服を着させられたアリアが、

その小さな手に握られた十字箔剣（クルス・エッジ）が、流れ星のように突き出された時――

――ばさっ！

ヒルダは翼の背中のリボンを翻（ひるがえ）して俺（おれ）を飛び越える。

避けたのだ。アリアの突きを。

「やっぱり、これがニガテなのね！」

突かれようが、瞬時に回復する能力を持つハズのヒルダが。

フリフリ制服のままアリアが構え直したサーベルに、ヒルダが振るったムチが絡みつく。

そうして、アリアとヒルダが綱引きするような状態になった時――

「――ンッ！」

バチッ！

ヒルダからムチから銀剣へ、ムチから銀剣へ、銀剣からアリアへ。

「きゃあっ！」

激しい高圧電流が伝わり、アリアが短い悲鳴を上げた。
ショックで硬直してしまい、柄を放せずにいるアリアを――ぐいっ！
「下等な――人間の分際で！」
銀剣ごと引っ張り寄せたヒルダは、どかっ！
パニエのスカートを思いっきり跳ね上げつつ、ハイヒールの足で蹴り
「――あうっ！」
俺の方へ逆戻りしてきたアリアは、電流でノビている。
脱力してしまった足をX脚気味に開きながら、棺桶の前に座り込んじ
ヒルダは、ムチで絡め取ったままの銀剣を頭上に向けたわねッ……！」
そして――カタパルトと呼ばれる中世の投石機のように、剣を大きく
「こんな汚らわしいモノを……よくも私に
つけてから放り投げてしまう。
展望台の遥か外へ飛ばした。
やはりあの剣は、よっぽど苦手な物だったんだろう。
だが、それももう俺たちの手にはない。
対超能力者戦の経験が豊富なアリアも、倒された。
理子は敵に篭絡され、それを見殺しにした。

そして、俺は最初からヒステリアモードだったのに、このザマだ。

（……チクショウ……！）

3分……いや、2分でいい。なんとか稼げないものか。

そうすれば、そうする気がするのに。

この手さえ動けば……やれる事も、あるハズなのに……！

「ネズミの分際で夜眷属狩人を気取るなんて……キライよ、そういう冗談。私、少し怒っちゃったかもしれない」

――ギュルルルルルッ……！

顔を上げると、いったん少し離れたヒルダが……

――アリア。

お前の手術を、早める事にしたわ――

ツタ植物の下に隠していた、小型のチェーンソーを持ち上げていた。

そして、カッツン、カッツン、とヒールを鳴らして歩いてくる。

まるで、ホラー映画みたいな光景だ……！

「お、おい！　何だ、手術って！――よせ！」

「アリアの胸を開けて、心臓を摘出するのよ。人間の肋骨って、案外硬いんだもの」

叫ぶ俺に、ヒルダは白い頬を引きつらせるように笑う。

「トオヤマ。さっきお前を殺さなかったのは、これを見せるためよ。アリアが生きたまま

心臓を抉られる様を、よくご覧なさい」
アリアに近づいたヒルダが、ぐいッ。
セーラー服の防刃ブラウスを、一気にめくり上げてしまう。
「さあ、見せなさいアリア。その心臓に据えた『緋弾』を……！」
痺れて声すら出せないアリア。その下着が露出する。
トランプ柄の寄せて上げるブラを丸出しにされたアリアは、
「〜〜〜ッ！」
痺れで声は出せないものの、激しく赤面した。
そして力を振り絞るようにいやいやと首を振り、藻掻いている。
だが、ヒルダはアリアの平らな胸を押さえ——
「安心なさい。私は、お前の姿形は気に入っているの。胸以外は切り刻んだりしないわ。
軀は剥製にして館に飾ってあげるから、安心して、私に身を任せるのよ……」
はぁ、はぁ、と興奮したような吐息を漏らしながら——
ヒルダはゆっくり、ゆっくりと、チェーンソーをアリアの胸に迫らせる。
その目は、アリアの怯えきった顔に釘付けだ。
ヒルダ、こいつ……人間の恐怖心を、愉しんでやがる……！
「や、やめろッ……！」

必死に叫ぶ俺の声も、ヒルダにとっては快楽のソースに過ぎないらしい。

にたぁ……と、キバをむいて、悦に入った顔になっている。

「サイコー……だわ、今夜は。この快感を思い出すだけでも、1年は快楽に困らなさそう。

さあ、アリア――鳴きなさい、鳴くのよ、そのナイチンゲールのような愛らしい声で……

ほほほっ、ほほほほほッ！」

チェーンソーの刃が、アリアの下着に微かに触れ――

ピッ、と、繊維が宙を舞う。

「――！」

アリアが身を震わせると、それを見たヒルダも「あッ」と短い嬌声をよじらせる。

そしてウットリとした嗜虐的な表情で、身をよじらせる。

「いいわ……いいわアリア。今の、とっても良かったステキ。とっても良かったわよ、その表情よ。もっと、もっと見せなさい……！」

その感覚が気に入ったのか、快感に震える手でヒルダは――

「もっとよ、もっと、もっと、もっともっともっと、もっともっと見せて……エ！　あぁ……

ピッ、ピッ――！　んッ！　んッ！　んッ！」

アリアの下着を、チェーンソーの先端で何度も器用に擦る。

「……やッ……嫌っ……あっ……！」

やっと僅(わず)かに声が出せたアリアだが、抵抗はできていない。
むしろその喘(あえ)ぎ声が熱を増していくのを聞かされるたびに、ヒルダの
「どうなの、こわいの？　こわいのよね？　こわいって言って！　言いなさい、ほら！」
サディスティックな言葉の銃弾を浴びせながら、ヒルダはチェーンソーを執拗(しつよう)に前後させる。
ピッ。ピシッ――!!
ピッ――!!
次第にゆっくりと、ある時はゾッとするほどの素早さで。
――ピッ、ピッ――ピシッ、ピッ――
ある時はゆっくりと、ある時はゾッとするほど
「ほらァ……！　どうなのよアリアっ!?　何か言いなさい！　ほほッ、
ヒルダはきらけのボロボロになっていく下着の布が――無くなったらおほほほっ！」
そして同様に、肉を、骨を……！
（チクショウ、胸の皮を傷つけるんだろうと、何度も、何度も。
動け、俺の手……動け……ッ！）
手づかみにしてでも、あのチェーンソーを……
だが、動けるまで、あと1分は……かかる……
「いいのか、ダメだ、手が動かないヒルダ」

その時、理子の違う、『武偵殺し』の方の声がした。
普段とは口調の希少な適応者だ。殺したら『緋色の研究』が上位に進めなくなるぞ」
「アリアは緋弾の俺の頭上では、理子がチェーンソーのグリップを押さえている。
僅かに……震える手で。
「……！」
ギロッ。
恍惚とした表情だったハズのヒルダが、切れ長の目を吊り上げた。
まるで、砂糖菓子を取り上げられた少女のように。
「この――無礼者――金色の電光が弾ける。
バチッ！
ヒルダの手元で――」
「――うっ！」
どさッ、と前のめりに倒れた理子の背を――ヒルダのピンヒールで刺すように踏みつけた。
そして、がしゃんー
ヒステリーを起こしたような手つきで、チェーンソーを床に叩きつけてしまう。

「理子！　お前……見ていて分からなかったのか！　せっかく……せっかく、もう少しで上り詰めようとしていた所なのに台無しだわ！」

ギリギリとキバを剥いて歯ぎしりするヒルダにとって最も不愉快な事だったらしい。どうやら……拷問を中断させられるのは、ヒルダ――なんてヤツだ。真性のサディストだな。

「ア……アリアには、まだ利用価値がある！　理子は――すぐに喋れている。

どうやら俺やアリアがやられた時より、ヒルダの電圧が下がっていたようだ。

だが、今のヒルダの態度から見て……意図的にそういう手加減ができたとは思えない。

ヒステリアモードの観察眼が、僅かな違和感をそこに感じた時――

俺の手が、少しずつ動くようになってきた。

あと30秒……！

「『アリアを殺すな』……ですって……？　お前……激昂し、涙ぐんでさえいる。

そう。そうなの。また裏切るつもりなのね？」

ぐりッ……！

ヒルダはヒールに力を入れ、理子の背骨を抉るように踏む。

「……ッ……！」

理子はそれをはね除ける事ができない。

しかし痛みに顔を上げたところを見ると、

ただ、理子らしくない怖じ気づいた顔で、

理子は――

俺のベッドに忍び込んできた夜、ヒルダの

さっきはヒルダに口出ししていたが、本当

かつてルーマニアで自分をイジメ抜いた、

怖くて怖くて、逆らえないんだ。本当は。

「理子。私は今夜、お前を試すつもりでいたのよ。アリアとトオヤマを

どうか……でも、お前はそれに失敗した。ということは、またバスカービルに戻るつもり

なのかしら？　ん？　ええッ？」

ぐりッ……ぐりッ……！

「あ……うぅ……！」

痛みと恐怖に震える、理子の声……

「理子。やはりお前は私の下僕に相応しくないわ。ペットに格下げよ。

玩具にしてあげる、こうやって……こうやって、ねッ！

もし次、私に逆らったら――そのイヤリングを弾いて、殺してやるからグリグリと理子の背中を踏みつけたヒールは、カツン！ピンヒールを鳴らして、その足を理子の顔のそばに突いた。

「――理子。私に謝罪なさい。ううん、今永遠の忠誠を誓うのよ。お前はもう、私のものとして生きるしかないのもう片方のヒールで耳のイヤリングをつかれた理子は、恐怖に身をうッ……」

「う……ううッ……」

縋(すが)るような手つきで、捧(ささ)げ持つように、その理子の顔の下、コンクリートの床にぽた、ぽた、と、滴(しずく)がしたたっている。あれは――理子の、涙……

「……ッ……！」

その時――

とうとう動くようになった俺の右手が、そして、カシュッ――！

ガス圧の音を立てて、左手に撃ち込む。理子が震えながら、ヒルダのハイヒールに唇を付けようとした――その時――

「……武偵憲章8条」

俺は言いながら、体の各所を意識の中でチェックした。

心臓の一鼓動、血液の一循環ごとに気付け薬が回っていく。

「任務は、その裏の裏まで完遂すべし」

低く発した俺の声に、ヒルダが振り返る。

大きな目から涙を流しつつの理子も、こっちに振り向いた。

「理子。いつだったか、君は――俺に依頼したね。『助けて』、と」

自分の喋り方で気づいたが――

俺のヒステリアモードは今、通常のノルマーレの方が優勢になってる。

アリアが自分以外の男に奪われた、という感覚が弱まったためだろう。

血流から考えるに――ノルマーレ7割、ベルセ3割――ってところか。ちょうどいい。

ヒルダは女性だが、ベルセの勢いを借りれば戦えるだろう。いくぞ。

「今夜、理子の依頼の『裏』を完遂しよう」

倒れたまま語る俺を、ヒルダが嘲笑う。

「ほほほっ――何をするつもりかしら、トオヤマ？　這うことしかできないミミズのような体で」

「前半には言葉でお答えし、後半には行動で反論させてもらう」

「……？」
「理子を、助ける」
そう答えるまで、両手と背筋で飛び上がり、両足で着地した。
バッ！
頭の両脇に突いたまま、ヒルダの足元を駆け抜ける。
そして低い姿勢のまま、ヒルダの足元を駆け抜ける。
「――ッ！」
這うことしかできないと思っていた俺に動きで反論されたヒルダが、
その隙に、俺は駆け抜けざまに理子を久々のお姫様抱っこで救出した。
（――またスタンをやられたら面倒だ）
と、俺は高圧電線が地面に落ちた際に離れるべき距離――
6m半まで、バックステップでヒルダとの間合いを広げる。
「……」
俺の腕の中で、理子は……凍える幼児のように両腕を縮ませて、震えていた。
幼少期に心に刻まれたヒルダへの恐怖が、今なお理子を縛っているのだ。
幼かった頃、どれだけアイツに酷い目に遭わされたのか……
この様子から、察するに余りあるな。

一方、素早く確認したところ……アリアは虫食い状態の下着を隠す事すらできず、声も出せずにいたが――

『リコ　ユウセン　キュウジョ　セヨ』

と、気丈にマバタキ信号を送ってきている。

いい子だ、アリア。

アリアは少し休んでていい。

――ここは、俺に任せろ。

「『理子を助ける』ですって？　トオヤマ、お前はどこまでお人好しなのかしら。理子はたった今、お前を罠にハメた薄汚い女なのよ？――」

ヒルダは、ばさっ――

コウモリのような翼を広げ、その羽ばたきと同時に脚で跳躍した。

そして1m近く飛び上がり、俺の名前が彫られた棺桶の上にフワリと降り立つ。

「理子はアリアの命乞いをして、私を裏切ったにも拘わらずにね。その前はバスカービルの一員、その前はお父様の飼い犬――そいつは昼と夜を行ったり来たり。本当に無様で、見苦しい女だわ」

ヒルダの声を聞くだけで震える理子は、目をきつく閉じ……

「そうだよ、キンジ……あたしは裏切り者だ……命惜しさに、お前を裏切ったんだ……」
俺の腕の中で、ぼろぼろと泣きじゃくってその震える耳の
「理子、お前にはイヤリングが、鈍色の光を揺らす。
更にヒルダは、もっと躾が必要よ。そうやってあちこち迷うお前は
ばさっ！　棺桶を踏み台にして――
一際大きく羽ばたき、照明をバックに、今度は3m近く飛び上がった。
「……！」
その人ならざる跳躍力に、俺は目を見張る。
「――世界は、夜を中心に回る――！」
俺たちの頭上を、あの翼では鳥のように飛び回ることはできないらしい。
空中では、羽影で掠めながら、ヒルダが風下へと滑空していく。
形状的に見ても滑空することはたかない。
だが2～3m飛び上がったり、グライダーのように滑空することはできるようだ。
その機動力は、人間のそれを遥かに凌駕している。闘り難そうだぞ。

ヒルダは飛行機のフラップのように翼の縁を弛ませてフレアをかけ、ほぼ滞空するまで減速して……ふわり。

ミニスカートと、何段にも重ねられた豪華なパニエを広げつつ——草花で飾り付けた、大きな黒い柩の上に着陸した。

「竜悴公の一族は、気高き闇の眷属。理子——お前のように心を迷わせ、闇に背を向けたことは一度も無いわ。私たちは、迷わない」

言いながらヒルダは、黒い駝鳥の羽根でできた扇を広げて口元に添えた。

「それは私たちが力を得て、生物の頂点に立った血族だからよ。力は、生物の序列を決める。力無き者は、力有る者に服従して生きる。それが、生物の現実」

カツン、カツン。

柩の上を歩くヒルダのヒールが、鳴る。

「その現実からは、人間も逃れられない。理子。お前のイヤリングは、その教条の象徴よ」

弱者は自分の意思を封殺し、強者の束縛の下で生きる。逆えば殺されるのだからね。理子。

教壇から語る教師のように、ヒルダは語り続ける。

「吸血鬼は現実主義なの。人間のように『弱者を虐げるな』などと理想を語りはしない。そう。それは人間にとっても理想に過ぎないのよ。人間の世界でも弱者は富を与えられず、あるいは疎外されて、緩やかな死をもたらされる。だから理子……あなたが私に従うのは

自然な事なのよ。この街で力ある者に従って生きる、幾百万の人間たちと――同じ現実を受け入れるだけの事なのよ」

ヒルダの扇が、眼下の東京を示す。

横目で見ると、その灯りが――フッ、フッ、フッ――

また、少しずつ停電している……！

「現実を受け入れる――それは、お前が生物として成熟するということ――泣くことは何も無いのよ。お前は今夜、トオヤマとアリアを見殺しにする事で迷いを捨て、大人になれるのよ。だから泣く事は何もないわ」

理子は両手で顔を覆い、ひっく、ひっく、と引きつるように泣き続けている。

それを間近に見ていて――

ガマンの限界が来た俺は、ご高説を垂れた竜悴公姫様を鼻で笑ってやった。

「……フッ……『力こそ全て』か。まるで古い少年漫画の悪役だな、ヒルダ。君は人間を見る目が無いし、貴族にしては失礼だよ。まるで理子が弱い子のような言い方をしたんだからね」

「何ですって……？」

キッ――とツリ目をこっちへ向けたヒルダに、俺は笑顔を返す。

「君はきっと、弱い人間しか見たことが無いんだな。俺は、幸か不幸かほどに強い人間達をイヤと言うほど見てきた。理子も、その1人だ」

「……キンジ……？」

僅かに開いた指の間から、理子が泣きはらした目で俺を見上げてくる。

「ヒルダ。君の言う通り――人間は迷う。だがその迷いを許し、正しい飛ばせる程にね。お互いを見守る強さも持っている。迷うから俺が、理子の地図になってあげよう」

理子はほんの少し、方向音痴なだけ……だから人間だ、と、人の迷いを笑う優しい目を向ける。

俺は腕に抱いた理子へ、兄が妹に向けるような優しい目を向ける。

そして更に理子の瞳を見つめ、真摯に問いかけた。

「理子。君は――ブラドとヒルダに束縛されてきた。きっと残忍で、厳しく、執拗な束縛を受けてきたんだろう」

「……」

はっきりしたふたえの、理子の濡れた目が俺の目を、見つめ返してくる。

「理子。君はそのままでいいのか？　束縛されたままで、いいのか？」

「……い……いやだよ、もう、いやだよ……困ってしまう――」

その円らな目から、さらに涙を溢れさせた——ぐしゃぐしゃに泣きじゃくりながら、もう止めようもないほどに、泣いて、泣いて、泣いて。

「……自由に、なりたいよ……！」

そう、言った。

「……よし。よく言った」

俺は１８０度ターンして、理子をそっと足元に下ろす。

「それなら、もう十分だ。俺が戦う理由ができた」

そして片膝をついて、その頬を伝う涙を指で丁寧に拭ってやった。

「俺がアイツを倒してやる。その忌々しいイヤリングも、外させる——り、ヒルダの方へ振り返り……

俺は立ち上がる。

「——力尽くでな」

ヒルダに、遅ればせながらの宣戦布告をする。

竜悴公姫（ドラッキユリア）・ヒルダ。君を傷害・監禁・未成年者略取の容疑で逮捕する。

俺に睨（にら）まれたヒルダは、ぱちんッ。

黒い扇を閉じ、むしろ嬉（うれ）しそうな表情で俺を見返してきた。

トオヤマ――いいわ、その眼。このあいだ車を襲った時とは別人ののお前なら、私専用のアクセサリーにしてあげても良いくらいだわ」
「美しい女性の御厚意に対し、申し訳無いが――君専用というのならだが、その逆なら戦った後に考えてあげよう。どうやら俺は、女ったらしいからね」
「逆……？」
ヒルダは少し考えるような仕草をしてから、断らざるを得ない。
その白磁のような頬に、微かな紅色を浮かべた。
俺と腕を組んで、デートしてるところでも思い浮かべたらしい。
それからヒルダは何度か言葉を発しようとするタイミングごとに「そのたび、つい声を飲み込んでしまい、悔しそうに顔を向けられて――
ふむ……女性として扱う分には、普通の女の子と大差ないんだな。
それも、箱入り娘タイプ。
男性経験に乏しい、というか、無いな。この仕草を見るに。
まあ、あの恐ろしいブラドがパパなんだ。さもありなん、ってところだね。ヒルダ。
「あ……ッ、り、理子ッ！」
少し慌てつつ、話しかけるターゲットを俺から理子に変えたヒルダは――

「私は今、まず、トオヤマを殺す！　それを見て学びなさい。お前が選ぶべき道は幻想の自由ではない。現実の束縛なのよ」

さっきの調子を取り戻しつつ、パチ……と、その身に小さな雷を纏い始めた。

「『雷球（ディアラ）』――ワトソンの制裁に使ったのは80％程だったけど、トオヤマには１００％をお見舞いしてやるわ。いいえ、私をからかった罪は、１２０％で罰するべきね……！」

ツンと突き出た彼女の胸の前に、ピンポン玉のような黄金色の雷球（らいきゅう）が発生している。

それが野球ボール程――バレーボール程――と、１秒ごとに大きくなっていく。

――来るぞ――

あれは街の電力を使った、ヤツの決め技。

ワトソンを撃った球状の雷と同じモノだ。

（……銀弾（ギン）……！）

俺（おれ）は丸腰を装（よそお）うため、ワトソンに弾倉（マガジン）を捨てられたデザート・イーグルを第１展望台に放棄し、胴体側面にあるそのホルスターにベレッタを差している。

そのベレッタには、対ヒルダ戦の切り札――ワトソンから貰（もら）った、法化銀弾（ホーリー）が入っている。

銀剣をあれだけ厭（いや）がっていたヒルダだ。銀弾も効果があると見て間違いないだろう。

だが、撃つならタイミングが重要だ。

銃を見れば、ヤツはそれを奪いに来る。
それで格闘戦になったら、あのスタンガン技を防げない俺が不利だ。
だから今のように距離が開いた状態で、ヒルダが隙を見せた時に射撃するのだ。
――そう考えて、俺は銀弾を温存してきたのだ。
「これで……100%……！　さあ、もっと行くわよ……！」
身長とほぼ同じ直径になった雷球に霞んで見える、あのヒルダの決定的な隙も――
ヒステリアモードの観察眼で、すでに発見済みだ。
アイツは電気で人を攻撃する際、一瞬、力を溜むクセがある。
その瞬間だけ、ヒルダは無防備になるのだ。
だから――あの雷球を放つ寸前、悪いが重傷狙いで撃たせてもらうぞ。
それも俺の銃技の中で、最も素早い技――
兄さんから見様見真似で学んだ、『不可視の銃弾』でな……！
「……！」
バチバチと音を立てながら膨れ上がり、直径2mを超えた雷球は――
ワトソンに降ってきた物より、一回り、いや、二回りは大きい。
荷電粒子なんてモノの詳しい仕組みは分からないが、密度――のようなものも濃そうだ。
俺の服は防弾製だが、防電性は無い。喰らったら即死は免れないだろう。

だが怖れる事はない。俺はあれが飛んでくる前に、ヒルダを倒すのだ。

と、微かな恐怖心を振り切るように——爪先を、僅かに動かす。

不可視の銃弾。拳銃による居合い抜き。これはその準備動作だ。

（さあ、いつでも来い——！）

ヒルダが力むのは、時間にして0・5秒。

だが、それだけあれば十分だ。

不可視の銃弾なら、1発はブチ込める。確実に。

ヒステリアモードは天下無双なんだ。それを思い知らせてやる。

俺は——ヒルダが力を込める瞬間を見逃すまいと、その美しい顔を凝視する。

「トオヤマ。昼と夜の間で迷う弱者に、幻想の中で死になさい。

幻想は夢。夢は現実たりえぬ、愚かな想い。夜に生きぬお前たち人間は——夜に夢を見て、夜を汚す、罪深き生き物——」

すうう、とヒルダはそこで息をつき——

黄金色の雷球を放とうと、力む——

今だ！

（——不可視の銃弾——！）

……!?

「――ッ……!?」

どうした――どうしたんだ。

手が……手が、動かない……！

さっきやられた高圧電流の痺(しび)れは、もう解けているのに。

「――お前も学習能力のない男ねぇ、トオヤマ」

雷球を放つフリをして、自分の頭上へ移動させた。

「――お前も学習能力のない男ねぇ、トオヤマ」

ぱた、ぱた、と雷球を手で扇ぐようにして、私が気づかないとニヤリ、と笑い――

「下品な香水のように銀弾の匂(にお)いをプンプンさせて、私が気づかないとでも思ったの？　お前は撃つ寸前、集中して私を見る。だから――私も暗示術(メスメリズム)を準備していたのよ」

……しまった……！

攻撃の寸前の隙(すき)の取り合い――その裏の裏をかかれたのか……！

やはり騙(だま)し合いでは、あのコウモリ女の方が一日(いちじつ)の長(ちょう)があったみたいだ。

……バチ、バチ、バチバチッ……放電音(スパークノイズ)が、高まっていく……！

「科学が発展するように、魔術(マッギ)も日々発展してきた。自分の身体(からだ)から消費するだけでは、精神力(ATP)はすぐ底をついてしまうわ。だから、体外から力を得る方法が編み出されてきたの。砂礫(パトラ)の魔女が星から力を得るように、私は――人間の使う電力をいただくのね。近年の分類で言えば、Ⅱ種超能力(スティルス)者の1人よ。ただし、人間には到達し得ない高レベル

これで120%……あぁん、壊れちゃいそ。やっぱり少し、制御が難しいわね」

語りつつ雷球を育て上げたヒルダは、その肌からも短い雷を宙に放っている。

その金色に輝く瞳が、キュッ、と笑み――俺を見据えた。

（来る……！）

キバを見せながらも清楚に微笑んだヒルダが、

「トオヤマ。今のそれ、とってもいい表情よ。フィー・ブッコロス……！

今度こそ本当に、小さく力んだ時。

キラッ――

「――？」

風に乗って――

雷球の光を反射しつつ、ビー玉のような何かが地面スレスレを翔けた。

俺の足元から、ヒルダの立つ柩の――側面へ。

風に乗って飛ぶあれは……シャボン玉……？

いや、違う。

あれは先月、新幹線の中で見た――爆泡珠――気体爆弾だ……！

――ドウウウッッッッッッ！！！――

爆発に第2展望台が振動し、柩を彩っていた赤バラやツタ植物、色とりどりのブーケが宙を舞った。

「――!?」

ヒルダが、ピンヒールの足でよろめく。

バチッ、バチバチッ！　という電流音が、今は柩の横――ツタに絡め太い電線の切り口から上がっている。

花霞の中で俺の眼がそれを捉えた次の瞬間、ヒルダの頭上にあった雷まるで電源を抜かれた電球のように消えて、なくなってしまう。

傾いた柩の上で踏みとどまったヒルダが、牙を剥き――

「――4世……！」

その名を、呼ぶ。

振り向くと、俺の横では……

震える指に極小の香水瓶をつまんだ理子が、立ち上がっていた。

2弾　素晴らしき、理子（フィー・ブッ・コーロス・リコ）

「キーくん、下がってて」

錠剤のようなサイズの使い捨てスプレーを放り、一歩出た理子（りこ）の震（ふる）えは――

俺（おれ）の名を呼んでから、次第に収まっていく。

そして、パンパンッ！　手を打ち鳴らしながら、

「あーっ、そうだった！　忘れちゃってたぁ！　ま元々、理子の獲物（ターゲット）でしたぁー！　なのに、どこの誰（だれ）かなぁー？　勝手なNTRルート開拓しようとしてる空気読めない女はー!?　くふっ、くふっ、くふふふふっ！」

理子はその場で、とてとてて、と回ってみせた。

いつもの理子らしい、おバカで陽気な態度は――

今はどこか、自分を鼓舞しているようにも見える。

「――変圧器（トランス）だったんだろ、その柩（ひつぎ）」

ピタッ――と足を止めてヒルダに向き直った理子の目つきは、もう落ち着いていた。

それが俺には、何かの……覚悟を決めた人間の態度に見える。

「お前は電気を使う。でも、その能力はジムナーカス・アロワナから遺伝子をコピーして

身につけたものだ。あの魚はそんなに長く、大量の電力を放(はな)つことができない。せいぜい1度か2度――使ってしまえば、しばらく休息が必要になる」

「4世……どこでそれを……ッ」

「なぁーにビックリしてんのぉー？　こんぐらいググれば一発で出てくるよぉー」

眉(まゆ)を吊(つ)り上げたヒルダに、理子が不敵に笑いながら続ける。

「だからお前は通常、自分の体から放電しないようにして……外から盗んだ電気を使う。でも、発生させられる電圧が低い割に、お前は超高電圧の電気しか体に取り入れられない。だから大型の変圧器(トランス)が必要だったんだ」

言いながらアリアのそばへ向かう理子に対し、ヒルダは悔しそうに押し黙るだけだ。

（……そうか……！）

海外の家電を日本のコンセントに繋(つな)いでも動かないように、電気によって動く物は全(すべ)て適切な電圧の電力を与えなければならない。

ヒルダもまた、その例外ではなかったのだ。

あの大きな柩は、ヒルダが街の電力を自分の攻撃に転用するための変圧器。

それが無くなった今、アイツは――

「ヒルダ。お前はもう電気をどこからも取れない。肉体からも、もう放てない。アリアと素粒子を操るための大電力も無い。だから、あたしに、さっき自力で電流を放ったからな。

影になって動き回る事もできない」

理子はまだ痺れて動けないアリアの腕を引いて、ズルズルとマホガ

そして自分の耳をポンと叩いて、超小型の香水瓶をもう一つ出した

シュッ――と、それを理子がスプレーすると――

小さなシャボン玉が俺とアリアの棺桶の間に飛び、爆発が、2つを

ちぎった。

その切り口からも、バチバチッ、と漏電の光が踊っている。

「やーっぱり。そっちはバッテリーだったかぁ。ヒルダ。あたしにそう言われたからって

『まだあるぞ』って目で棺桶見ちゃダメじゃーん。理子はドロボーなんだよー？　誰かが

何かを隠してるのを見つけるの、大得意なんだからぁ」

「迂闊だったわ。お前が……そんな爆薬を隠し持ってたとはね……ッ！」

ヒルダはキバを剥き、ここまで音が聞こえてきそうな歯ぎしりをしている。

カラになった爆泡のカプセルを捨てた理子は、

「ご存知の通り、『武偵殺し』は爆弾使いですから」

ANA600便をハイジャックした時に俺に言ったのと同じセリフをして見せた。

（……理子……！）

ヒルダに慇懃無礼なお辞儀をして――

スカートをつまんで少しだけ持ち上げ、

あの時の理子が、帰ってきた……！

――バチッ――！

理子の右耳で、小さな花が咲くように――
鮮血が、弾けた。
ヒルダが『私が念じれば弾ける』と言っていたイヤリングが、破裂したのだろう。
耳以外は無傷だが――傷口からは、毒蛇の腺液が体に入ったのだろう。
10分で人を死に至らしめる、猛毒が……！

「……」

理子はお辞儀したままの姿勢で、耳の痛みに小さく瞼を震わせたが――
やはりもう、それは覚悟の上だったらしい。
その愛らしい顔は、歪めない。

「キーくん、さよならだね。この前、2人でお別れパーティーしといて良かったよ」

背を伸ばした理子の声は、むしろ冷静だった。

「ほんの10分だけど、理子はアイツから自由になる。キーくんが励ましてくれたおかげで、理子は本当の理子になれたよ。だから、たった10分でも……本当の理子をキーくんが見て

くれるから、もう、それでいいよ」

その言葉と共に……

元々曇っていた空から、大粒の雨が降り出した。

ばら、ばら、と落ちてくる雨粒を切り裂くように——理子は、右、左ブラウスの背から刀を抜いた。2振りの小太刀だ。

それはアリアに変装するために持たされていた、晴らすッ！」

「ヒルダ。今、ずっとやりたかった事をやってやる……お前への恨みを

右耳から血の滴を垂らしながら、理子が——

ギリシャ神話のメデューサのように、髪を広げていく。

「いいわ、戦ってあげる。お前ごとき電気が無くても敵ではないわ。光竜悴公の一族と2度も戦った人間は——歴史上、お前が初めてよ」

ヒルダは理子の髪に対抗するように翼を広げ、片足を蹴り上げた。

その爪先に引っかけられて跳ね上がったのは——金色の三叉槍。

先端が『山』の字のように分かれ、通常の槍より命中率を高めた武器だ。

「でも4世、忘れたのかしら？　吸血鬼には、いかなる傷をも瞬時に治すってバラバラで——私の魔臓の位置を、お前は知らない。知っているのは、この両腿の2つだけでしょう？」

「理子……」
まだ暗示術で身動きの取れない俺が、顔を向けると――
毒蛇の腺液を打たれたまま戦うつもりらしい理子は、チャキッ。
「大丈夫。理子にはキーくんがついてるから」
俺のベレッタを持ち上げて、銃身にキスして見せた。
どうやらさっき起き上がった際、俺から盗んでいたらしい。
「法化銀弾――これの傷は治らないんだろ？　ヒルダ」
「……すぐには治らないというだけの事よ。当たらなければどうということはないわ。さあ、お父様のカタキ共――自分たちのために祈りなさい。お前たち3人は、今夜、死ぬ」
柩から下り、三叉槍を構えたヒルダに対し――
理子は更に俺の背からスクラマ・サクスを抜き、髪の二刀と、両手の双剣双銃の理子――
――あのアリアさえをも苦しめたその姿が、闇に浮かび上がる。
変則版だが、2人だけだ――お前を含めて、な！」
「今夜死ぬのは？」
猛毒をその身に受けた理子が、吼えるように叫んで飛び出した。
全速力でヒルダに迫った理子は、クロスさせた髪の二刀で――
ギギンッ！

ヒルダが突き出した槍を、ガッチリと受け止めた。
そして人間の腕では出来ない動作で、ぐるっ！　風車のように小太刀を回し、ヒルダの手から槍をもぎ取ろうとする。
ばさっ！
ヒルダは、こちらも人間には出来ない動き――翼の羽ばたきを使って、その場で槍ごと横向きに宙返りする。
ヒルダのパニエがひっくり返るほどに翻り、カツンッ！
ハイヒールの片足が、地面についた時――
「ヒルダ！　お前は――魔臓に頼って生きてきた！」
パアン！
理子の持つベレッタが火を噴き、法化銀弾がヒルダの右の翼――その付け根に命中した。
バアッ――！　撃たれた翼膜に、不自然なほど大きな銃創が広がっていく。
まるで硫酸弾によって溶かされたような光景だ。
「うッ……！」
呻いたヒルダの傷は、かつてのブラドが見せたような瞬間的な回復は見せない。
「だから体の捌きが甘いんだ！　ケガをしたって平気だと、高をくくってきたからな！」
理子にそう叫ばれたヒルダは、何とか踏みとどまり――

「このッ……4世！　私のペットのくせに……！　無礼な口をきくなッ」
今度は横から、理子の首を狙って槍を薙ぎ払う。
「あははっ！」
理子は笑いながら両脚を前後に広げ、両脚をコンパスのように回してターンしながらヒルダのストンと体を落として三叉槍を躱した。
その姿勢から、中国拳法の歩法。
あれは――コレ譲りの、中国拳法の歩法。
お前はヘタなんだよ！　格闘戦がな！」
――ヒルダ！　間合いを詰めた理子が、ヒルダを小太刀で牽制しつつ――ババッ！　3点バーストに切り替えた俺のベレッタで、さらに右の翼を撃った。
随意筋をやられたのか、ボロボロになった右翼は勢いを失い――垂れ下がる。
そこをスクラマ・サクスの一閃が切り上げ――
とうとう右の翼が切断されて、宙を舞った。
「……ッ！」
片翼になってしまったヒルダが、悔しげな表情で後退する。
それをベレッタの銀弾が追う。ばちばちっ！　という着弾の音が近接拳銃戦の技が、ヒルダを追い詰めていく。
「あははっ！　ヒルダ！　ヒルダ！　どーしたのぉー!?」
左の翼膜を連打し、

理子はアリアの刀、俺の銃と剣を使い、イ・ウーや武偵高で習い覚えた技を使っている。

そう――これは、理子の人生全てが詰まった戦い……！

掛け値無しで全力の『武偵殺し』に、とうとう黒柩に背をつける所まで追い詰められたヒルダめがけ――

――

くるんっ、と前宙した理子のスクラマ・サクスが、ぴゅんッ！

弾痕の穴を繋げるような軌道で、左の翼も切断した。

ヒルダは、その翼を犠牲にしつつも――

必死の形相で三叉槍を突き出し、理子のスクラマ・サクスをもぎ取る事に成功する。

「……このッ……ネズミの分際で！」

ヒルダはスクラマ・サクスを第2展望台の端まで放ったが――

「ネズミ？　それは自分でしょー？　羽をもがれたコウモリさんは、あーら、とっても不思議！　ネズミにそっくりだ！　あはは――ッ！」

まだ2剣1銃を持つ理子はお構いなしで、翼の機動力を失ったヒルダに襲いかかる。

その日本刀が、ヒルダのドレスを引き裂きつつ――バッ！　脇腹を斬った。

「うッ……！」

その傷は赤い煙のようなものを上げて、すぐ塞がっていくが……

ヒルダはベレッタの銃口を恐れ、三叉槍を防御的に使い始めている。

理子も残弾が少ないので――俺が数えてた分には、あと1発だ――アリアの小太刀を
メインに使い始めている。
「あははははっ！　ほらほらヒルダ！　あたしを踏んだり蹴ったりしてみろよ！　昔みたいに
さァ！　ほらヒルダ！」
理子は拳銃で持った小太刀2本でヒルダの体を刺す。
ビリッ！　ざくっ！　ざくっ――ビリッ！
裂けるドレスの下に目玉模様は無いか、傷の治りが遅い部分は無いか――
ああやって、魔臓の位置を探しているらしい。
「やッ……やめなさいッ……やめろっ……！」
「お前が！　いっぺんでも！　そう言った時に赤いマニキュアの手を放してしまったヒルダを、
とうとう槍を理子が執拗に切り裂く。
魔臓の位置を探すには、ああする他になるようは、目を背けたくなるような残酷さだ。
理子の攻め方は、笑いながらやっている。
しかもそれを振り回しているが――
（……戦闘狂……）

——理子の本性を、久々に見た感じがするな。

理子は——ひょうきん者に見えて、実はとてもプライドの高い少女なのだ。

自尊心を傷つけた相手に対する激しい復讐心が、その背中越しに伝わってくる。

「……ぶ——無礼者！　下がれェ！」

メッタ刺しにされ、ほとんど下着姿にまで剥かれてしまったヒルダは——

最後の力を振り絞るように——パチッ……バチバチッ……！

さっきよりずっと弱くなった電気を、身に纏うように放った。

「——おっと」

理子はバックステップし——さらに、俺たちの所まで後退してくる。

さっきより強くなった雨が、理子の刀からヒルダの血を洗い流していく。

「……4世イ……許さない、許さないわよ……」

毒突くヒルダは自分で自分を抱くように丸まり、こっちを睨んでいる。

あの電気は——恐らく、ヒルダが自分の生命力を削って出しているのだろう。

雷球を放ったりはできないようだが、今は、ヤツに近づけないな。

ズタズタにされた身体の各所を回復させつつも、放電しながらだとそれには多少時間がかかるらしく——槍を抱いたヒルダは、しばらく動かない。

アリアの下着を乱した因果か……その精緻な縫製のランジェリーとタイツも、あちこち

引き裂かれている。ガーターベルトも、片方切られて垂れ下がってしまってるな。

どうやら……ヒルダの服は防電・不燃性ではあっても、防刃・防弾性ではないらしい。

「んッ……ううんッ……」

隠れようとしたのか、ヒルダは、ずっ、ずっ、と何度か体を影の下――床に溶け込ませようとしたが、それも結局できずにいる。

いけるぞ。ヤツは電力不足に陥っている。倒すなら、今だ……！

「全部見つけたよ、目玉模様――白い肌だから、見つけ難かったけど」

戻ってきた理子が、俺に言う。

その足が……ふらっ。

小さく、よろめく。

理子が戦い始めてから、3分は経った。

イヤリングから体内に入った毒蛇の腺液が――回り始めているのだ。

「大丈夫か……理子！」

「……両太も、右胸の下、それと臍の下だよ。目玉模様は腿と腹に集中してた」

吸血鬼の無限回復力は、『魔臓』という人間にはない臓器によってもたらされている。

厄介な事に魔臓は4つあり、それを1つや2つ傷つけても他の魔臓がすぐ治してしまう。

従って、吸血鬼を倒すには4つの魔臓を同時に破壊しなければならないのだ。

ヒルダの肌にあるイレズミのような目玉模様は、その魔臓の位置を示す印なのだが――

「場所は分かった……だが、どうする。そのベレッタには、あと1発しか弾が無いだろ」

と言った俺の後ろから、

「あ、あと……2発なら、あるわ……！」

ようやく感電から立ち直ったらしいアリアが、近づいてきた。

そして俺の陰に隠れるようにして、きゅっ、きゅっ。

ツノみたいな髪飾りを2つとも外している。

「全身調べられたけど、さすがにこれは気づかなかったみたい」

そして、ぱか。

髪飾りの底を外すと、空洞になっていた中から……

左右1発ずつ、.45ACP弾が出てきた。

「昔は薬を入れてたんだけど……今まで、何度も弾切れしてピンチになったからね。最近ここに弾を隠すようにしたのよ。理子、あたしの銃を返して」

アリアは理子の太ももから自分の2丁拳銃を抜くと、片手で雨粒を防ぎながら――1発ずつ排莢口から装填した。

白銀と漆黒のガバメントが、生き返ったように鋭く光る。

――キーくん。アリア。ありがとう。でも大丈夫。理子も方法を考えてあるから」

「方法……？　ヒルダを斃す方法を、他に……か？」

俺が言うと、理子は鋭い眼で頷いた。

「もし殺されそうになったら、相討ち覚悟でそれを使おうと思ってた。にはヒルダが飛び回ってたらダメだったからね。まずは翼を封じたんだ……なるほど。だから、割と惜しげなく銀弾を使ってたのか。

「でも……あんた1人で、どうやるのよ。ベレッタには1発しかないんと言うアリアに、理子は首を横に振った。

「ベレッタの弾を1つ残したのは、魔臓を失ったヒルダを殺すためだよ」

殺す、という言葉に眉を寄せた俺は――

「……？」

その時、視界の端にいたヒルダに違和感を感じた。

ボロボロになったゴスロリ衣装を脱ぎ、紫のランジェリー姿になったまだ体に薄い電気の鎧を纏って身を守り、体の回復の仕上げにかかっている。

だが……何だ。

――あの姿――

色白だからよくない予感がする。

は見えないが、確かに、その肌には白い目玉模様がある。

両腿に2つと、臍の下に1つ。右胸の下にも、1つ。

見える。ヤツの弱点は全て丸見えだ。だが、それが逆に——

何か、言いようのない違和感を俺に感じさせてくる。

「——待て、理子」

「武偵法を守れっていうんなら……ゴメン。キーくん」

「そうじゃない。ヒルダに……違和感を感じるんだ。お前に作戦があるんなら、それは——

今は、使うな。4点同時攻撃で仕留めるぞ」

俺が理子の両肩を掴み、まっすぐ目を見て言うと——

その態度に、理子は大きな目を瞬かせた。

「……いいよ。キーくんがそう言うなら、いいけど……どうやるの？

弾も3発しかないんだよ。それで4発撃つなんて……物理的に不可能だ

「すまん。俺は物理が苦手だ」

俺の声に、さっきより少し近くなった雷の音が被る。

それはアリアにも聞こえたらしく、赤紫色の目で小動物みたいに西の空を見上げている。

雷が本格的に鳴り出したら、雷嫌いのアリアがしくじるリスクがある。ブラド戦の時のように。

4点同時攻撃——やるなら、今だ。今しかできない。

「アリア。同時攻撃をやるにはアリアの力が必要だ。その2丁でヒルダを撃ってくれ。強襲科（アサルト）では急所を撃たないよう訓練されてるが、撃てるな？」

「う、うん」

俺が少し強く言うと、アリアは子供のように頷（うなず）いた。

アリアは基本、ヒステリアモードの俺には従順だからな。

「理子。理子はヒルダの右腿（みぎもも）を撃つんだ。４発目は――俺が何とかする。理子は不可能を可能にしてきた。それを数多（あまた）の不可能にしてきた。それをバカにしているようだが、人間は数多の不可能を可能にしてきたからね」

言ったけど――歴史上、人間は数多の不可能を可能にしてきた。それをバカにしているようだから、理子の横に立った。

やろう。彼女は人間のために――不可能にしてみせる」

俺はそう言いながら、理子の横に立った。

「今夜は俺が、理子のために……」

「……理子の、ために……」

理子は、感動したような目で俺を見上げてから――

柔らかにウェーブした髪を揺らして、ベレッタを持ち上げた。

「分かった。やるよ、キーくん」

「いい子だ」

俺は理子の頭を一つ撫（な）で、ヒルダを横目で見る。

翼以外の傷を完治させたヒルダは三叉槍（トライデント）を手に立ち上がり、こっちへ歩いている。

体を覆う電流は大したことはないが、あれでは触れるたびに感電させられるだろう。

つまり、刀剣の類は使えない。

足りない銃と弾で、やるしかないんだ。やはり。

「右の……腿を、撃つ――……」

ふらッ……と、よろめいた理子に、アリアが肩を貸している。

「理子、大丈夫!?」

「あは……天国で、曾お爺さまに、怒られちゃうなぁ……ホームズ家の撃ちなさい」

戦ったなんてさ……」

「あたしだって虫唾が走るわよ。リュパン家の女と助け合うなんて」

「アリア……」

「何よ。ほら。しっかり立ちなさいッ」

「あたし、やっぱり、お前が大キライだよ。くふッ……」

「あら、気が合うわね。あたしもあんたが大キライよ。ふふっ」

ただの女の子同士のように小さく笑いながら、2人は――

ちゃきちゃき。

ヒルダに、3丁の銃を向けた。

「……ッ……!?」

それに、瞬警戒するような表情を見せたヒ
「ほほッ……足りてないじゃない。ねぇ？
すぐ安心したように、笑みをこぼす。
（禍転じて福と成す、ってやつだな）
――銃が4丁あったら、ヒルダは逃げたか
もし逃げられたら、またどこかで襲撃され
その時、ヒルダと相討ち覚悟の方法を持つ
「行くぞ……！　俺が合図したら――撃て！
2人に叫び、ヒルダめがけて駆け出した俺
さっきは女子の手前、大口を叩いたが……
撃つ方法なんか考えついてはいなかった。
だが、もう俺は走った。そしてそれでいい
俺は今、爪切りバサミ一つ持っていない。
だが、それでもきっとできる。
きっとできる。いや、絶対できる。
物事なんてみんな、最初は不可能に思える
できると信じて走らなきゃならない。その勇

（――方法なんて、走りながら考えろ！）

ヒルダの槍が俺に向けられた瞬間、ヒステ

さっきヒルダがムチに絡めた十字箔剣を、

放り投げた光景が再生された。

それと同時に、見え

閃光のように――活路が。

――これだ――！

雨粒を弾きながら、俺は槍を避けて左へと

そして素早くヒルダの背後5mほどへ回り

雨に濡れた足元から水を跳ねさせつつ、ド

ヒルダの、思ったより肉づきのいい下半身

「理子！　アリア！　――撃て！――

俺は今のターンの勢いを使い、片手での銃

捻った。

そして指甲（オープンフィンガーグローブ）Fー G――『オロチ』で

――バババッ！　バッ！――

――アリアと、理子――

装甲した右手を振りかぶる

テップする。

込む。

リフトする車のように振り

に視線を据える。

返り――

弾逸らし（ラッシュ）――『螺旋（トルネード）』のよ

うに全身を大きく

大きく振り回して

。

2人が同時に、3つの銃口を光らせた瞬間。
俺の世界が（ホーリー）法化銀弾は、超高感度カメラで撮影したような純銀弾。
銀は鉛より比重が軽いため、発砲時に火薬が生み出す圧力を十分に受けられない。
そのため、理子のベレッタから放（はな）たれた銀弾は音速に至らず――
――ビス・ビス・ビス・ビス――！
アリアが放った亜音速の.45ACP弾と全く同時に、ヒルダに命中した。
「――！」
3発分のマズルフラッシュで影になったヒルダは――
右胸下、下腹部、右腿（みぎもも）の魔臓（まぞう）を撃ち抜かれてもなお、踏みとどまっていた。
左腿（ひだりもも）の魔臓を頼りに、攻撃に転じるつもりなのだろう。
――そこで音速の銃声が3つ、俺に届きした理子の銀弾が、俺めがけて飛んでくるのが見えた。
右腿を貫通――
さあ、次は俺の番だ。
俺の体スレスレで通過するアリアの弾、2発を見送りつつ――
――ギンッッ――！

俺は右手の2本指で、飛来した理子の銀弾を挟んだ。
チタンを焼結させたコバルト合金の『オロチ』が、激しく火花を散らす。
その火花で、俺の手は火の玉を握っているように輝く。
（――『銃弾返し』――！）
指で挟んだ弾を、俺は――今回は、スリ抜けさせない。
弾の速度は可能な限り保ち、そのベクトルの向きだけを変えていく。
ワトソンの時は、30度が出来たなら――
30度だって、出来るんだッ！）
60度だって――
（――180度だって――
弾丸は俺の身体ごと、180度を回りきり――
――そこで、指から放たれ――
――バシュッ――！！！
見事にU・ターン・して、後ろからヒルダの左腿を貫いた。
――発砲からこの瞬間まで、コンマ1秒もない。

ヒルダの回復速度より早く、3発の弾で4点を撃てたハズだ……！

「……ッ……」

その体に4度の着弾を受けたヒルダは、カツン……と、ヒールの足を踏ん張り、

そして、背後でヒルダに広げた右手を向けていた俺へと振り返る。

――信じられない、という顔で。

そうだ。信じられないだろう。

あれだけ見下していた人間たちに負けるなんて――思ってなかっただろうからな。

だが、それが今、現実になったんだ。

どんな気持ちだい、現実主義の吸血鬼さんよ。

「Desteaptă-te, romîne…din somnul cel de moarte……」

これは、詩……？　ヒルダが、おそらくルーマニア語で――

呪いの言葉か何かだろうか……詩のようなものを呟いている。

「In care te-adâncirâ…barbari…de……ti……ra……ni……」

そして、その場に膝をつき……前のめりになっていく。

もう、声を出していなかった。

雨に打たれ続けるヒルダは――

闇の眷属・竜悴公姫ヒルダが――

ついに、斃されたのだ。
父娘共々、同じ3人組にな。
「……理子っ……！」
アリアの慌てた声に顔を上げると、理子が指で示す……ヒルダの柩、その脇に残る花のそばまで
俺は2人の元に駆け寄り、理子が指で示す……！」
引きずるようにして連れて行った。
柩を背もたれにさせて床に座らせると、理子は——
「……やだなぁー、もー……！　2人とも、なんて顔してんのぉー……？」
理子の容態を心配する俺とアリアに、作り笑いを上げてきた。
だが、具合の悪そうな顔色は隠せていない。
あのイヤリングに仕込んだ毒蛇の腺液は、10分で人を殺す——と、ヒルダが言っていた。
それが打ち込まれてから、もう7分は経っている。
（一刻も早く、医者に診せないと……！）
だが、このスカイツリーを下りるだけでも5分はかかるだろう。
それはアリアも分かっているのか、ただ、理子の傍らで容態を診ているだけだ。
「キーくん、アリア。そんな顔しないで。理子は今……いい気分なんだよ」
……理子……

「理子はね……理子は、命懸けで、戦ったハズなのに……いつから、死ぬのが怖くなっちゃったのかな……くふふっ……」

理子……！

「ほんとはね、分かってるんだ……理子が、死にたくないのは……キーくん……キーくんに、出会っちゃったからだ……」

作り笑いのまま泣きながら、震える手を伸ばしてきた理子に……

俺が、ただその手を握りしめる事しかできなかった――その時。

――ピカッ――！！

近づいてきた稲妻の光に、アリアが大きく肩をすくめ――

理子の……ふたえの目が、驚きに見開かれた。

雷ではなく、俺の背後――

ヒルダの倒れていた辺りに、向けて。

「……？」

振り返った俺が見たものは……

……ズズズン……

という落雷の音を背に、三叉槍を持ち、平然と立ち上がっている――

「ほほほっ――ヒルダ……ご気分はいかが？　4世さん」

ど……どういう事だ。

その胸の下と下腹部に開いた弾痕が、治って・・・いる。

銀弾で撃たれた両腿の傷は治りが遅いようだが、それでも……治りつつ

「どうして……!?　4つの魔臓を撃ったのに……！」

身を竦めたまま、アリアが不死身の竜悴公姫に犬歯を剥く。

「あぁ、いいわ。3人とも、とってもいい表情。特に――理子。無念でし

投げ打ってまで戦ったのに……ほら。私はご覧の通り、平気よ。ねえ、今

ほほほっ、もっと悔しがりなさい。それを串刺しにするから、面白いのよ

手の甲を口元に寄せて笑うヒルダは――

雷雲に向けて、槍を揺らすような仕草を見せた。

「私は生まれつき、見え難い場所に魔臓があるわけではなかった。その上

目玉模様を付けられてしまったの。だから――これはお父様にさえ秘密に

外科手術で、変えちゃったのよ。魔臓の位置をね。ほほほっ、おーっほほ

超音波じみた高笑いに、階下で群れていたコウモリたちが飛び上がる。

「ほほほっ――おーっほほほッ！」

そしてヒルダの背後、雨と稲光のスクリーンを乱舞した。

「――さあ、私の魔臓はどこでしょう?」

雷鳴の中、紫の下着姿を見せつけるようにヒルダが胸を張る。

「実は、私自身も知らないの。敢えて知らないようにしたのよ。だって誰かにバレるかもしれないでしょう? 手術の痕はすぐ跡形も無く治っちゃったし、手術をさせた闇医者の答えは、闇の中。だァれも知らない」

……!

どうりで……初めっから、惜しげもなく太ももを丸出しにしてたワケだ。

ようやく分かった――

さっき俺が感じた『違和感』は、ヤツが目に服を引き裂かれ、電気で追い払った後――4つの弱点が露出したのに、アイツは理子の玉模様を隠さなかったこと。

その点について焦った素振りを見せなかった。

それは、見られても平気だったから。

あの目玉模様の下に、魔臓が無かったから。

「ああ、なんていい天気なのかしら」

ガガーンッ……!

すぐそばに落雷したらしい音を、ヒルダは心地よさそうに聞いている。

アリアが縮こまり――理子(りこ)はただ、悔しそうにヒルダを睨(にら)む。

「4世。121年前、建造中だったエッフェル塔で――私のお父様は、アルセーヌ・リュパン1世と戦った。奇遇なものね。双方の子孫が戦う造りかけ……でも、いい塔よ。とても高くて、この塔もまた、東洋の猿が造るとは思わなかったけれど」

近い空を愛(め)でるように、ヒルダが雷雲を見渡す。

「私は、この好天の日を待ってたの。だからヒルダは、雷雨の夜、塔で戦うのか……教えてあげるッ……」

そう言ったヒルダは、雲を見上げ――

稲光と同時に、二叉槍(トライデント)を頭上高く掲げた。

「――ッ！」

その金属槍(やり)を誘雷針にして、厚い黒雲から――真っ白な光の束が――

ガガァ――――ンッッッッッ……！！！！！

激しい落雷の音と共に、周囲を閃光(せんこう)が包み――

「きゃあああああっ！」

アリアが、パニックに陥ったような悲鳴を上げる。

「――！」

とっさに両腕で顔を覆った俺が、眩む目を開くと……

前方には、高熱で蒸発した雨粒が水蒸気となって吹き荒れていた。

闇を流れる水蒸気が、第2展望台をまるで異世界のように見せる。

「――生まれて3度目だわ。第3態になるのは」

白煙の向こうに――

ヒルダが、心地よさそうに立っている。

その全身を覆う電光は、さっき見せられた黄金色のものではない。

青白く、激しく、触れるどころか近づいただけで黒焦げにされそうな

耐電性の下着とハイヒール、蜘蛛の巣柄のタイツは残っているが、リ

なり――長い巻き毛の金髪が、強風に暴れている。

まさに……悪魔の姿だ。

この世の者とは思えない……！

「お父様は砂礫の魔女に呪われ――この第3態になる機会も無い間に、

討たれた。私は第2態でお前達に

もらったわ。さあ、遊びましょ？」

体が醜く膨れる第2態はキライだから、それを飛ばして第3態にならせて

帯電したヒルダは、槍や体のあちこちからバチバチと青い稲妻を踊らせている。

がすんっ！　と足元に槍の石突きを突いただけで――

コンクリートの床に稲妻が走り、蜘蛛の巣のようなヒビが入った。

「第1態が人、第2態が鬼なら――この第3態は、神。耐電能力と無限回復力を以て為す、竜悴公一族のための奇跡。そう、稲妻とは奇跡的にも、私が受電しやすい電圧として造った証拠……」

それはこの現象を作った神が、私を神の近親として造った証拠……」

バチッ、バチッ、と帯電したヒールを鳴らして歩くヒルダは――

二叉槍を振り上げ、迫撃砲のような音を立てて柩の一角を破壊した。

剥き出しになった柩の内部――分厚い銅板が、ぐにゃりと曲がって露出する。

な……なんて馬鹿力だ。父親より過激だぞ。

「――だからもう、人間の電気なんかいらないの！　おーっほほほほほ！

ご覧なさい！　怖れなさい！　涙を！　流して！　俺たちを恐怖させようと――

サディストのヒルダは、俺たちを恐怖させようと――

ガスンッ！　ガスンッ！

第2展望台の縁にあった鋼鉄の柱を槍で殴り、ひん曲げていく。

――その隙に俺は、アリアと理子の状況を確認する。

アリアは――ダメだ。

その目は闘争心を失ってはいないが、さっきの落雷で体が萎縮しきっている。

理子も……もう、戦えないだろう。

ぐったりと柩に背をもたれさせたまま、ただヒルダを睨む事しかできていない。

「――理子、いや、アリア。貸してもらうぞ」

唯一まだ戦える俺は、理子が背に収めていた小太刀を片方抜く。

あれだけ帯電した状態のヒルダには、近づく事すらできないので――

「ヒルダッ！」

展望台の縁辺りに立つその足めがけて、刀をブーメランのように投げる。

シュッ――！

回転しながら飛んだ刃は、ヒルダのアキレス腱を切断したが――

「……！」

ダメだ、傷は何事もなかったかのように治ってしまう。

転倒して塔から転落してくれれば、とも思ったが……よろめきすらしない。

ピカッ――と、稲妻に光る顔を上げたヒルダは――

にい、と、キバを見せて笑った。

そして壊れた柩に、ハイヒールの足で上がる。

「アリアは剥製にしようと思ってたけど――ごめんなさいね。もう、それはできないわ」

ビシッ……バチッ……！

青白い稲妻が、ヒルダが振り上げた三叉槍の先端を踊るように行き来して——

「第3態の私は——触れるもの全てを、焦がしてしまうから——」

雷球……！

三叉槍の先端に、球状の雷がまた生成されていく。

だが……違う。色が違う。

この雷球は眩いセルリアン・ブルーの光を放ち、遥かに高電圧に見える。

形も違う。

有り余るエネルギーが不安定な光を放ち、球というより星のような形をしている。

触れてもいないのに、俺たちの持つ金属——腕時計やボタン、ポケットの携帯から、バチ、バチッと極小の稲妻が空中に放たれていく。

「私と長時間戦ったご褒美に見せてあげる。竜悸公家の奥伝——『雷星』。これでお前達を黒焼きにし、並べてこの串に刺し、お父様への贈り物にしてあげる」

……悪趣味なプレゼントもあったもんだぜ。

舌打ちする俺の眼前で、ヒルダは体から槍へと電力を供給し、1秒、また雷球を大きくしていく。

こうなってしまえば——

もう、俺にできることは……特攻だけだ。
ヒステリアモードの全力でヒルダに体当たりして、感電して黒焦げになりながらも――
それぐらいしかこの塔から飛び降りる。アイツごと。
――だが、何か……ないだろう。残念だがな。
それがヒステリアモードの……いや、男としての、俺の仕事だろう。
俺は無言で、威嚇用にと最後の小太刀を借りる。
そして女子2人を守るように、ヒルダの立つ柩へと上がった時――
「人生の角、角は、花で飾るのがいい……あたしのお母様の、言葉だ……」
（……？）
背後から、理子の声が聞こえた。
俺は日本刀を傾け、磨き上げられた刃に映る理子を見る。
理子は、柩の周囲を飾っていた大きな花束の一つを抱えていた。
明るく元気だった理子によく似合う、ヒマワリの花束を。
「だから……ヒルダ。お前にやるよ。お別れの、花……」
俺の背中越しに声をかけた理子に、ヒルダが視線を向ける。
「ほほッ……4世にしては殊勝な心がけね。でも謹んでお断りするわ。私、ヒマワリって

キライなの。太陽みたいで、憎たらしいんだもの。お前も知っているでしょう？　私は、暗い所が好きなお前に、一つ、日本の諺を教えてやるよ。

「くふっ……暗い所が好きなのよ」

……自分のすぐ足元には、何があっても……大抵、気づかない」

不敵に笑いながら、刀に映る理子は――

ヒマワリの花束を、がさ、がさ、と解いていく。

「これは近すぎても遠すぎてもダメだった。

花束の中から出てきたのは、銃身を短く切り詰めた――

――ウィンチェスター・M1887。

「散弾銃……！」

理子の横で、アリアが目を丸くしている。

……なるほど……！

「理子、お前は――天才だっ！」

俺は横っ飛びに柩からダイブし、俺の陰にいた理子の銃に――

ヒルダが、いハッ、と息を呑んだ瞬間。

「くふっ。今、サイコーのアングルだよ。ヒルダ。素晴らしいよ……！」

震える理子の腕を、アリアが支え――

――ガウンッ！！！

稲妻にも似た銃声が、第2展望台に響き渡った。

1発しか飛ばない通常の拳銃弾やライフル弾と異なる、その散弾は――

――バッ！

無数の小さな弾子となって、空中で散開した。

ヒステリアモードの俺の眼が捉えた、その数は――100発以上。

――ビシビシビシビシビシビシビシッ――！！！

超小型の軟鉄弾だ。

「――うあッ！」

花開くように飛散した弾が、ヒルダの全身をくまなく撃てる。

そう、散弾銃なら――

魔臓がどこにあろうとお構いなしに、ヤツの全身をくまなく撃てるんだ！

「あ……ッう……ううッ……！」

無数の弾を体中に浴びたヒルダが――ふらついて、その場に片膝を突いたとき。

蒼い『雷星』が、溶けるように槍に戻り――バシュッ！

ヒルダの体を通過して、足元に流れていった。

「――キャアアアアッ――！」

瞬時に、ヒルダの全身を炎が包む。

皮膚が燃えよう と瞬時に回復できるはずのヒルダが……

自分が操って いた高圧電流に、燃え上がっていく。

（……無限回復 力が、途切れている……！）

4つあった魔臓が、全て今の散弾のいずれかに撃ち抜かれたのだろう

――ひいいい……！

聞くに堪えな い悲鳴を上げたヒルダは、黒い柩から転げ落ちる。

「あァう……！ そんな……これは、これは悪夢……悪夢なんだわ……

もの……！ 私が、この私が、こんなヤツらに……こんなに、ひどい……！」

翼も無く、影 にになることもできないヒルダは――

ズルズルと這って、俺たちから逃げようとする。

だが、自分が燃える炎で方向が分からないらしい。右往左往している

そのヒルダを捕縛しようと、手錠を出したアリアだが……すぐ、もう

出来ないことに気づく。

それは俺も同様だった。
見るに見かねて助けてやらねばとも思ったが、燃える体には近づくことができないのだ。
「ヒルダ……！　そっちじゃない、そっちへ行くな！」
展望台の縁（へり）の方へ這っていくヒルダに、叫んだが――
ヒルダは自分が燃える音で、聞こえなかったのだろう。
もがき苦しみながら、とうとう縁から手を滑らせ――
「あぅ……ッ！」
炎の中から一声、最後に叫び――
「……！」
思わず目を逸（そ）らした俺の耳に聞こえたのは、遠ざかっていくヒルダの絶叫だった。
声は450mの高さから、下へ、下へ……落ちていき……
……そして……
辺りが、静かになった。
聞こえるのは、もう――俺たちを打つ、雨音だけだ。
（ヒルダ……）
悪女ながら自分を貫（つらぬ）き、気高く、美しい敵だったが……
その最期は、哀（あわ）れなものだったな。

安らかに還ると言いたい。闇の中――コウモリの、住処へ。

「キーくん……」

呟くような、理子の声……

「さっき、ショットガンを『使うな』って――失敗してた。そしたら、理子は……」

おしまいだったよ……」

理子は銃を抱えたまま、雨に打たれながら空を見上げていた。

「……これで、理子は……本当の理子に、もう、焦点を結んでいない。

虚ろなその目は倒して、自由には……」

「ブラドとヒルダの胴と、脚だけ狙なれた。でも、キーくんとアリアは結局、倒せなかった……それどころか、また助け合っちゃったねぇ……」

それでも笑顔を絶やさない理子のそばで、

俺は片膝をついた。

「いいんだよ……それでいいんだ、理子。

今の理子は1人じゃない。助け合う仲間が『本当の自分』なんて、時と共に変わっていく。

「キーくん……」

「そうよ理子。誰かを倒すより、助ける方が難しい事だわ」

遠ざかった雷鳴の中、アリアも……理子に肩を貸す。
「だから――助・け・る・わ・よ。あんたの事も」
俺はアリアと目配せし、2人で理子を支えて立ち上がらせた。
「――行くぞ、理子。気をしっかり持て！」
俺たちは、階段を降りていく。
イヤリングを弾(はじ)かれてから10分を回り、もう呼んでも応(こた)えなくなった理子に――
それでも、2人で呼びかけ続けながら。

3弾　秘密のリハビリ

ワトソン、ヒルダとの2連戦を経た夜が明け――
武偵病院のICU前、廊下にあるベンチで目が覚める。
窓から、青空が見える。雨はもう上がったらしい。
（全身が……痛えな……）
ヒステリアモードの俺は、肉体に限界以上の力を出させる。特に昨日は、桜花・螺旋・銃弾返しと、荒技を3発もやった。体にガタが来るのもムリはないだろう。
ゆっくり起き上がると、ICUのドアの上にはまだ『治療中』のランプが灯っていた。
（理子……）
心配しつつ、それを見ていると……
隣のベンチにすっぽり収まって寝ていたアリアが、みきゅ、とネコみたいなクシャミをし、自分のクシャミで目を覚ました。
「……ん……キンジ……り、理子は？」
がば、と起きてきたアリアも、すぐ『治療中』の表示に気づいて無言になる。
あの後――理子は、第1展望台に着いたところで心肺停止状態に陥った。

アリアに一次救命処置を任せ、俺は復活したエレベーターで急いで地上に降り……公衆電話で呼んだ車輌科のヘリがスカイツリーに来るまで、20分かかった。

心肺停止から4時間経って蘇生した例もある、だから諦めるな――と話を自分に言い聞かせながら、第1展望台に戻ると――

――そこでは、医師でもあるワトソンが理子を介抱していた。

ワトソンは、自分が『死んだフリ』をして逃げるために理子を一時的に仮死状態にしており……なんと、第1展望台に転落してあれだけ焼け焦げ、100mを転落しても……ヒルダも横で寝かされていた。もちろんピクリとも動けず、いつ死んでもおかしくない状態だったが。

ワトソン主導で、瀕死の2人は武偵病院に運ばれていき――

俺とアリアは、ワトソンのポルシェを借りて深夜の武偵高に帰っていたというアリアの運転は、荒かったな。理子が気がかりで焦っていたせいもありそうだったが……

などと昨夜の事を思い出している間に――無数の薬品や治療器具が並ぶICUに、俺とアリアは恐る恐る人っていく。

「……理子……！」

『治療中』のランプが消える。

アリアが声を上げ、駆け寄ったベッドの上体を、起こしていた。
まだ少しボンヤリしてるようだが……良かった。助かったんだな。
「理子！　理子！　……ホントに死んじゃったかと思ったのよ！」
理子に飛びつこうとするアリアを、白衣を着たワトソンが押さえている。
見回すと、治療室には俺たちの他に誰もいない。
「……解毒できたのか、ワトソン」
「ボク1人では不可能だったけど、救護科の矢常呂先生の御力を借りてあの猛毒を物ともしなかった」
彼女は天才だね。
「矢常呂イリン先生か。ここにはいないみたいだが……？」
「少し外してもらった。ボクたちだけで話したい事もあったからね」
マスクを外したワトソンは、ふぅ、と徹夜疲れに大きく息をついた。
とりあえず俺がベッドに歩み寄り、理子の様子を窺うと……
理子は、サッ……と、俺を避けるように顔を伏せた。
「理子……？」
生還を喜ぶかと思っていたのに……どうしたんだ。
その様子に、しばらく俺たちが黙っている——理子は、

「――キンジ、アリア……あたしは……恥ずかしい」
裏理子の喋り方で呟いた。
「あたしはヒルダに命じられて、キンジを騙したなのに、お人好しのお前たちは……あたしを庇った。あたしはできたんだ。だからあたしはその借りを、命で返そう本当に、死んで償うつもりだったのに――こうやって、おめおめと生き延びて……」
理子の声は、悔しさに震えてさえいる。
お……おいおい……
ホントに、どこまでもプライドの高い子だな。理子は。
「……理子。あんた、勇敢ね」
それを聞いたアリアが、マジメな表情で言った。
「あんたの事だから、てっきり『助かったよ、ありがとー』とか言ってヒルダについたのをウヤムヤにするもんだと思ってたわ。でも今、あんたは自分の思いを正直に話した。それは――とても、勇気がいることよ」
赤紫色の瞳で、まっすぐ理子を見つめるアリアに――
少し振り向いた理子は、アリアを見つめ返し……この恩は必ず、返す……」
「アリア、キンジ……また恥ずかしそうに、視線を逸らした。

その声も震えていたが……今度は少し、嬉し泣きしそうな感じだ。

それを聞いて急に恥ずかしくなったのか、困り顔になったアリアが俺に『ほら、あんたも何か言ってあげなさいよ』と小声で言ってくるので……

「あー……まあ、昨日のは……俺は、流れで戦っただけだ。恩がどうのとか、考えなくていい」

思いつくままに喋ると、アリアが『そんだけか！』という顔をしてくる。

しょ、しょうがねーだろ。今の俺はヒステリアモードじゃないんだ。

泣きそうな女子に、気の利いたセリフなんて言えねーよ。

場が少し沈黙してしまい……アリアが睨んでくるので、俺は仕方なく――

「あー、念のため聞くが、あいつらには……他に吸血鬼の仲間とかいないだろうな？」

「……ブラドの妻は病死した。マンガみたいに人を噛んで増える種族じゃないし、あいつらは2人だけだ」

「そうか。じゃあ……お前、肩の荷が下りた気分だろ。よかったな」

普通の俺は、普通にそう言うしかない。

それを聞いた理子は、頷くように少しうつむいた。

「そうだね……今まではずっと、ブラドとヒルダのことが心のどこかに引っかかってた。逃れたかったから、戦い続けてきた。でも、それが無くなって……自由になって……今は

少し、不安もあるよ……」
「不安？」
「これから、どうすればいいのかな……って」
「贅沢な悩みじゃねーか。理子らしく、気まに、やりたいように生きりゃいいさ」
女子のお悩み相談なんて、俺にとっちゃ東大人試より難しいことだ。
なのでテキトーにそう言うと、理子はそういうムードが好きなのか……小さく笑う。
「そうだね。理子らしく……か」
「ああ。それが『理子が理子になる』って事なんだよ。きっと、本当の意味のな」
いまは平凡な俺の、ごくごく当たり前の話に――
理子は、うん、と一つうなずいてくれた。
顔はまだ下を向いたままだったが……なんか、その頬が少し……赤くなったような気がするな。
毒の後遺症で、熱でもあるのかもしれない。
これ以上、俺のヘタな話に付き合わせるのもかわいそうだ。
アリアも『まあまあよし』という顔をしてるし、この辺で退散するか。
「じゃあ……おだいじにな」
と、踵を返そうとすると……

「さて。仲直りができたところで、もう一つ話があるよ」
ぴ、と人差し指を立てたワトソンが、黒曜石（オブシディアン）のような瞳（ひとみ）で俺（おれ）たちを見回した。
「話……？」
「ヒルダの事だよ」
ああ。色々ありすぎて忘れかけてたぜ。
ヒルダは……どうなったんだ？
「まず宣言しておくが、ボクは武偵（ぶてい）であり医者だ。敵でも、戦いが終われば過剰攻撃（オーバーアタック）はしない。いかなる人格、国籍、人種であっても関係ない。治す」
人種……
吸血鬼も、人種でいいのか？
不全なのにもかかわらず、彼女は驚異的な生命力で手術を乗り切ったよ。ヒルダの体から散弾銃（ショットガン）の弾を――107発、全（すべ）て摘出した。魔臓（まぞう）機能が意識も無く、人工呼吸器を必要としながらも……彼女の命は、生きようと願っている。これまあいいか。
「だからさっき撮影した、今の彼女の姿だ」
と、ワトソンはデジカメで撮影したヒルダの姿を俺たちに見せてくる。
自業自得とはいえ全身に大火傷（おおやけど）を負ったヒルダは……包帯でミイラみたいになっており、

骨折したらしい手足にギプスを填(は)められている。何とも哀(あわ)れな姿だ。

……ていうか、これでよく生きてたな。さすが吸血鬼だよ。

胸の上に十字架(ロザリオ)が置かれているのでよく見ると、それに『Anti Ki-Barai-Kekkai area』と書かれた識別シールがついている。詳しくは分からないが、玉藻(たまも)が張った結界にヒルダを入れても大丈夫にするためのアイテムらしいな。

「ちなみに魔臓なるものを縫合したのは初めてだったので、ボクも完璧(かんぺき)に手技が出来ず……その組織を若干、切除せざるを得なかった。だがボクは、転んでもただでは起きない。それを材料に、魔臓の働きを止める薬品――バンパイア・ジャマーの開発を約束しよう」

ワトソン。

お前、回りくどいんだよ。さっきから。

何が言いたいんだ。

「だが……日の出の頃(ころ)から、彼女の容態は悪化している。主(おも)な原因は血液不足だ。ボクはここに着くと同時に、ヒルダの血液型を調べた。結果は、B型のクラシー・リバー型。人間では170万人に1人しかいない、珍しいものだったよ。その血を保存しているのは世界中でシンガポールの血液センターだけで、取り寄せるのに2日はかかる。そして……ヒルダは、この昼を越せないだろう」

……そうなのか……

あれだけ戦った相手なのに、もうすぐ死ぬと思うと……助けてやりたいそう思ってしまうところは、ヒルダに言われた通り、俺はお人好しなのかもな。

「なんとかできないの？」

俺よりお人好しっぽい口調で、アリアがワトソンに尋ねている。

「同じ血液型の人がこの辺りにいれば、助けられるんだが……」

と、ワトソンは……なぜか、理子の方を向く。

しばらく黙っていた理子は――

「それ、理子の血液型と同じだよ。自分たちと同じ血液型って事もあったから、ブラドは理子を手放したがらなかったんだ」

目を閉じて、無表情にそう言った。

（そうだったのか――それで、ブラドはあんなに理子にこだわってたのか）

実は俺は、前々からその点を不思議に思っていた。優秀な遺伝子を持つ人間なら、世の中にたくさんいる。ＤＮＡが欲しいなら、髪の毛一本あれば事足りる。

だがブラドは、理子だけは身近に置きたがっていた。その謎が解けた。

理子はブラドにとって――優秀な遺伝子の持ち主でありながら、自分たち吸血鬼一族と同じ珍しい血液型の持ち主という、石二鳥の存在だったのだ。

ヒルダは、それを知らなかったみたいだけどな。

「実は……峰理子、キミの血液型のことは知っていた。矢常呂先生が教えてくれたからね。――ボクは医師だから、どんな悪人でも死にかけている者を見殺しにはできない。命とは、貴いものなんだ」

おい。

どの口で言うんだ、ワトソン。

お前、昨日俺のこと殺そうとしたばっかだろ。

「だが理子、キミの献血を強制はしない。敵の配下になるのが暗黙のルールだが、ヒルダはそれに従わないかもしれないからね」

そんなルールがあるのか……戦役には。

ていうか、配下、治ったら俺に押しつけ、あんな凶暴なご令嬢。面倒みきれんぞ。

「ちなみにヒルダは・時期、イ・ウーに留学していた。交渉次第では、神崎かなえさんの裁判に出廷させることもできるだろう」

すでに1人お世話してるし。

理子がどう出るんじゃねーだろうな。

しばらく黙っていた理子が、チラッ、とワトソンに、腕を出した。

「――いいよ。採れば？」

ワトソンの前で……アリアを見てから……

と言った理子(りこ)をアリアが誉(ほ)めようとすると、
「べっ別に――これは、アリアに恩返しするとかそういうんじゃない。あんなヤツ、殺す価値も無いから。理子が殺すのは殺す価値のある相手だけ。キーくんが『恩返しなんていらない』って言うから、ほんとに何も返さないよーだ。恩ドロボーしてやるっ」
ぷいっ、と横を向く理子は……
よしよし。普段の理子っぽくなってきたな。
「そうね。あんたは大ドロボー。ありがとう、怪盗さん」
くすっ、と笑いながらフランス語で言い残し――アリアは後をワトソンに任せて、俺と共にICU(集中治療室)を出るのだった。

眩(まぶ)しい朝日の中、寮へ帰る。
睡眠不足の俺とアリアはアクビを連発したり、フラフラ歩いてお互いにぶつかったりだ。
「しかし、理子は……なりはちっちゃいが、大物だな。最後はヒルダを助けたか」
「根は優しいのよ、あの子。ちょっと情にもろいところもあるし。自分には厳しいくせに、他人には優しいところがあるのよね」
そこに気がついてるんなら、見習えよ。アリア。

特に、『他人には優しい』の部分を。

「――なんにせよ、初勝利ね。全員参加じゃなかったけど、チーム・バトルの結束を深めていくものでしょ」

「そういえばそうだな。激しくギクシャクしながらだったけどな」

「いいのよ、最初はギクシャクでも。チーム内で対立が生じても、イザ戦う。それがチームの意義だし、そうやってめるように俺を見上げてくる。

そう言うとアリアは腰に手をあて、たしなまたこっちに銃を向けるかもしれないわ」

「でも油断しちゃダメよキンジ。あんたは特に、理子の色気に引っかかりやすいんだから。カチンと来るが、前科があるので反論できん。

色気に引っかかりやすい……という部分に

それに、アリアが言うことも一理ある。

理子はまだ、あたし達をライバル視してる。

昨夜は協力したが、いつかまた戦う時が来るかもしれない。

だが――その辺のことも、なんとなく俺の中で整理がついてきてるんだ。

「まぁ……理子とは2度も敵になったり味方になったりしたが、2度あることは3度あるって言うしな。さっきは協力したが、3度目があったら……また戦うさ」

俺は歩きつつ、アクビ混じりに言う。

「4度目があったら、そん時は協力だ。喧嘩するほど仲がいいってやつなんだろ。俺らと

理子は」

「ふふ。そうかもね。じゃあ、あんたもいいのね？　これからも理子とチームメイトで」

「まぁいいさ。いじゃねえか、そういう油断ならないヤツが仲間にいても。その程度の度量は、さすがに俺にもある。時には友達、時にはライバル……そういう関係の友達は、高校生ならみんな1人ぐらいはいるもんだろ」

「ふふっ。それもね。偉いわ、キング。よくできました」

「まあ、普通は拳銃が無いからライバルがいても安全なんだけどな」

と、腰のベレッタをポンと叩いた俺の手、その肘が……ぽす。

眠くてよろけたアリアの肩に当たって……ぽと。

アリアのブラウスの中から、何か布のようなものが落っこちた。

「……？」

「……？」

2人して、足元を見下ろすと……

布のようなもの、というか、布が落ちたらしい。

穴だらけのボロになった、ガキっぽいトランプ柄の布が。

その布からは、ヒモのようなものが何本か出ている。

「「――！」」

……こっ、これは……！

ヒルダにチェーンソーでズタズタにされたアリアの、その……し、虫食い状態になっていた寄せて上げるブラ（プッシュアップ・ブランジ）ちぎれて、落っこちてしまったのだ。盛り上がりに乏（とぼ）しい胸はそれを引っかけることもできず、立て板に水から排出してしまったのである。スルッとブラウスの下着じゃねーか！

「～～～～～～！」

ばちばちばちっ、アリアの、その……し、

という、ヒルダの電気みたいな殺気が俺に殺到する。

「……キィ……ンソーで限界を迎え――

恐る恐る上げた俺の顔が、遺影の白黒写真みたいになった。ようなシステム（？）で

そこの赤信号より真っ赤になったアリアさんが、激怒していらっしゃるのである。

「こっ、こっ、こんな道ばたでェ！　公共の場で！　なんて事してくれるのよォーッ！」

がばっ！

地上のウサギを狩る大鷲（おおわし）のごとき手つきで、パッドまる見えのボロブラをつかみ上げたアリアから……

……ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

ヒルダの雷球より1000倍恐ろしい、マグマのような殺気がほとばしっている。

「ち、違うッ……！　これは、その、俺は悪くない！　元はといえばヒルダのせいだ！」

「問答無用!!　――風穴砲！　発射用意！」

くるっ――たったぁ――！

溜めがあるのか！

アリアは十分な助走距離を取ってから、鬼の形相でこっちに振り返る。

今回の風穴は……あ、新しいぞ！

そして、だだだっ！　短距離走の世界記録を超える速度で突進してきて――ばっ！

「発射ぁ――――ッッッ！」

俺から5mの地点で、身を捻りながらジャンプした。

これが、風穴砲――自らの体を砲弾とした、頭からの体当たり……！

そして今の俺はただの俺。

もちろん銃弾返しでアリア弾をUターンさせる事もできず、棒立ちである。

本物の砲弾のようにスパイラルしながら飛んでくる頭頂部が、俺の顔面へ迫る。

その光景が、死に際のスローモーションで見えて……アリアの背後に、螺旋を描くツインテールに覆い隠されていく。

遠いスカイツリーが、小さく見えていた

――救護科（アンビュラス）の皆さん。
ICU、理子（りこ）が退院したら……次、予約集中治療室
地球温暖化のせいか、今年は台風シーズンが早く来て早く終わっていいですかね？
そのおかげでこの秋は晴天が多く、爽（さわ）やかな実りの秋を満喫できるシーズンとなった。
それから数日後に訪れた学食に並ぶ食い物も――栗（くり）、柿（かき）、梨（なし）、いろんなものがあるな。
（無いのは、金だけ……か）
だが、今の俺（おれ）はブ厚いステーキを食べている。
これは一般科目が終わった後、ワトソンが俺に言われた恨みを学食に呼び出しておごってくれた物だ。
どうやら、スカイツリーで俺に言われた恨み言に応（こた）えたつもりらしい。律儀なヤツだよ。
初めて食ったが……うまかったな。学食のステーキ。
昼メシを抜いてたのも逆に良かった。
誰（だれ）が言ったか知らんが、空腹は最高のソースだからな。
さらに、もう3時だから周囲に生徒はいないし、静かで、快適だ。
「……お前も何か食えよ」
俺の前で紅茶だけを飲むワトソンにそう言うと、
「昼食なら昼時に済ませたよ」

「お前が構わないならいいが……こんないいもの食ってる前で茶だけ飲まれると、悪い事してる気分になるぜ」
「これは習慣だ。気にしなくていいよ。英国貴族は、ティータイムを守る。たとえ戦争中でもね」
「アリアは飲みたい時に飲みたい物を飲んでたけどな」
「……アリアはホームズ家で、貴族教育をあまり受けていなかったんだろうね」
「アリアとの婚約は……破棄したよ。ワトソン家の事情についても、ほとんど話した」
「怒らなかったか、アイツ」
「『そんな事だと思ったわ』、だそうだよ。ちょっと安心したような表情にも見えた」
「アリアらしいな」
俺はセルフサービスの水を飲んで、一息つく。
「ただ、そのぉ……ボクが……」
人はいないのに赤くなって周囲を確認してから、「じょし」と小声で呟くワトソン。
「……であることは、言ってない。言えなかったんだ。あまりにも、恥ずかしくて……」
「それで正解だと思うぜ。言ったら言ったで混乱まぎれに発砲されかねんからな」
その後、ワトソンがモジモジして何も言わなくなったので……俺は話題を変える。

「理子はもう大丈夫なのか。今日、いつもの調子で登校してきたが」
「……救護科の先生も太鼓判をくれたよ。隅々までチェックしたが、すっかり健康だった。逆にちょっと心配なのは……ヒルダの方だね」
「どうした。容態が悪化したのか」
「いや。意識も戻ったし、体もどんどん良くなってるよ」
「じゃあ、暴れてるのか」
「その逆だね。始めはベッドから這って逃げようとするし、ナースを噛もうとするしで、大変だったけど……理子のおかげで助かったことを聞いてから、急におとなしくなった。一言も喋らず、呆然として——ずっと、何かを考えてる」
「……まあ、逃げたら教えろ。今度は戦車にでも乗って捕まえにいくさ」
冗談めかして言いながら、俺は席を立つ。
スカイツリーで起きた事は——ヒルダがやらかしたあの停電も含めて、『落雷事故』と報道されていた。マスコミの動きはよく分からんが、まあ、アリアが巻き込まれたことでまた外務省が動いたのかもな。

文化祭の準備のため、今日は短縮授業となっている。
『変装食堂』以外には特に仕事のない俺は、遅い昼食を終えたあと寮までワトソンに車で

送ってもらう事になった。
腹一杯になったら、なんかこう、力が漲ってきたな。
俺は帰宅部だから、それをぶつける対象も特に無いが。
「その……トオヤマ。キミは、本当にあのランチだけでいいのか？」
運転しながら、ワトソンが訊いてくる。
「……何がだ？」
「その……キミはボクに、何の仕返しもしないじゃないか。ボクはこの陥れてたのに。キミは、これだけでいいのか」
「いいさ。お前は女だろ。女に仕返しとか、男のする事じゃねえよ」
俺が適当に言うと、ワトソンは原因不明の赤面顔になった。
なんか……間違った回答だったのか？　今の。
ほんと、女に対しては何と言えば正解なのか分からん。
「でも……ボクを恨んでるだろう？」
「別に。恨み辛みでエネルギーを使うのは、人生の無駄遣いだ」
助手席のシートを少し後ろに倒して、俺はアクビをする。
ぶっちゃけ、仕返しなんて面倒くさいからな。
そういうのは、ベルセの俺に任せる。こっちの俺はスルースキル発動だ。

「ダメだ……ダメだ、トオヤマ。何か復讐しろ。これじゃあボクの気が済まない」

……面倒なヤツだな……

「あー……食い物の恨みだけは別腹だが、それも今晴れたからいいんだってば！　何か支払わせてくれ、イーブンになるまでっ」

「ダメだダメだ！　何か支払わせてくれ、イーブンになるまでっ」

ワトソンは、さらに赤くなって首をブンブン横に振る。

うう。ワガママ女め。

ていうか暴れるな。お前が動くと、シナモンみたいないい匂いがしてイヤなんだよ。

「……じゃあ、何すりゃいいんだよ」

仕方なしにそう聞くと、

「何をしても構わない。縄で縛って叩いてもいいんだぞ。むしろそのぐらいしてくれ」

……。

「あー……お前……ヘンな趣味の持ち主とかじゃないだろうな……？」

「ヘンな趣味……？　……！　なっなっ、なんてバカな事を言うんだキミは！　変態か！　ぼっ、ぼっ、ボクはそんなハレンチな事を考えたりはしない！　しないしな！」

「くっ首を絞めるなというかハンドルを離すな！」

と、ジグザグ走行するポルシェに命の危険を感じつつ……

俺は車内でキーキーわめくワトソンを何とか運転に戻させるのであった。

ワトソンが妙な所で車を停めて「降りてくれ」と言うので、一応、降りると……
カエデの枯れ葉が舞う向こうには、選択教科棟が見える。
ここは美術室、音楽室、書道室などが集められた建物で、芸術的センスの武偵高の生徒たちには人気が無く、いつも人けがない場所だ。
それは今日もで、ワトソンに誘導されて入ったロビーには誰もいなかった。
「こんな所に何の用があるんだよ」
「その……トオヤマ。盗人猛々しいというヤツかもしれないが……実は……ボクはキミに、一つ頼みがあるんだ」
「頼み？」
首を傾げた俺に、ワトソンはまた無人の周囲をキョロキョロ見回してから――
「秘密を守ってほしい」
真っ赤になって、左右の手のひらを組み合わせる。
「なんの秘密だよ」
「ボクが……女子だという事を、誰にも言わないでほしいんだ……！」
ワトソンは俺に対して祈るような仕草をしてるぞ。
「あー……」

それで俺に、何かを支払いたいと強情を張ってたのか。

要するに、口止め料として。

じゃあそう言えよ。イーブンにしたいとか、建前せずに。

（別に、言いふらすつもりなんかないんだが……）

でも、ここまでオドオドされると……ちょっとイジりたくなってきた。

「ふん。どうしようかな」

俺が少し考えるようなフリをしてやると、ワトソンはビクンと背を伸ばす。

そして組んだ手を上下に振りながら、

「頼む、頼む、誰にも言わないでくれっ。学校の皆にもいつかカミングアウトする、でも、今じゃ急すぎるっ……！　ボクはまだ、女子として振る舞う準備ができていないんだっ」

慌てるワトソンは……普段の俺でも分かっちまった。

――可愛いな。やっぱり。

それも、今まで俺の周囲にいなかったタイプの女子だ。

ボーイッシュだから、女嫌いの俺でも気安く話せる女子。

案外……こいつはこいつで、危険な存在だったのかもしれないな。

「……」

少しドギマギした俺が何も言わずにいると、ワトソンは深刻な表情になり、くるっ。

踵を返すと、ロビーから路駐したポルシェまで走っていく。
そしてトランクから大きな紙袋を掴み取り、たったった。戻ってきた。
俺の手首を掴んだワトソンは、
「お、おい。どこへ行くんだ」
と言う俺を引っ張って、無言で2階のワトソン に連れ込まれた準備室にはデッサン用の石膏像や大小のキャンバスがあり、当然、誰もいない。
カーテンが閉じられた薄暗い部屋で……がちゃり。
ワトソンが、出入口のスライド扉に鍵をかけてしまう。
「おい……！」
な、なんだ？
ワトソンがジャケットを脱ぎ、ネクタイに指をかけ、外してるぞ。
さらに、しゅるっ。
ワトソンは俺に背を向け、ベルトも外してしまう。靴も脱いだぞ。
「あ、あっちを向いていろ」
と言ったワトソンは、ちい。
「――！」

チャックを下げ、勢いよくズボンを下ろしたぞ！
ついこの前まで男だと思ってたから、油断してた。対応が遅れた。
俺（おれ）も素早く背を向けたが……一瞬、見えちまったぞ。
ま、真っ白なショーツ、が。
ワトソンお前、そこはトランクスとかじゃないのかよッ。
いやまあ、その、下半身の構造上――そっちの方がフィットするのは分かるが、お前、
転装生（チェンジ）やるんなら徹底しろよっ！
（チ、チクショウ……！）
俺の脳裏に、純白のショーツに包まれたヤツの腰の画像が焼き付いちまった。
あの流麗な丸みを帯びた、左右対称の、桃みたいな――臀部（でんぶ）の形。
あれは確かに、女子の体にしか有り得ない曲線だった。
いやいやキンジ――そんな分析をしてる場合じゃないぞ！
（一刻も早く、脱出しないとッ……！）
ムリヤリ我に返った俺が大慌（おおあわ）てでドアに飛びつくと、びゅんっ！　ざくっ！
背後から黒塗りのククリナイフが飛んできて、鍵（かぎ）の部分に突き刺さった。危ねえ！
「――逃げるなっ！　ボ、ボクの方が逃げ出したい気分なんだッ、本当は！」
「じゃあ逃げてくれよっ！　ワトソンお前、な、何のつもりだッ！」

鍵をガチャガチャやるが、壊れてしまって開かない。
俺は祈るような気持ちでドアに額をつけ、自分の血流を確かめる。
や、やばい。危険だ。もう黄色信号ぐらいになってる気がする。
瞼に焼き付いてしまった画像をスクロールして、とにかく下着の事を忘れようとすると——さっき同時に見えた、張りのある太ももが脳裏をよぎってしまう。
あれもやっぱり、女子の足だった。
さすが体脂肪率27%。細くしなやかな割に柔らかみを感じさせる、しっとりとした輝き……肌も絹のようにキメ細やかで、ミルクみたいになまっちろかった。
だが、だが……！
太ももも程度がなんだ。よくよく考えてみりゃ、武侠の女子はみんな落ち着けキンジ。
太ももも丸出しじゃねーか。
怖くない。怖くない。うん……怖くないッ
「こっちを向け、トオヤマ」
必死に自己暗示をかけていた俺に、ワトソンが声をかけてくる。
「——バカ言うなッ　断る！」
「向かなきゃ撃つぞ！」
「……！」

ヒステリアモードに――なりかけているとはいえ、なってはいない俺だ。
撃ち合いになったらひとたまりもないぞ。
「……ッ……」
恐る恐る、扉の前で振り返り……
「……！」
どんっ。
後ずさった俺は、扉に背中をぶつけてしまう。
こっちを向けと言った割に、ワトソンはまだ俺に背を向けていたが――
もうワイシャツも脱いで、胸を押さえていた包帯みたいなバンドを外してしまう。
その瑞々(みずみず)しい背筋の映像が、俺の画像フォルダに追加されてしまう。
白磁の肌には貴族的な気品が漂い、マンガみたいにキラキラしてる。
「ボクの父は――ボクに男子として生きるよう、厳(しっ)しく躾けた。子供のころは、少しでも女らしい仕草をしただけで激しく折檻(せっかん)されたものだよ」
絶句する俺に、ワトソンが背中越しに語る。
「だからボクは、自分が女である事を忘れようと思ってきた。でも……13、14歳の頃(ころ)から……女性の登場人物に感情移入してしまい……やっぱり、自分は女なんだと感じさせられたよ」

がさ、がさ。
ワトソンはこっちに背を向けたまま、足元の紙袋から……
純白の下着を取り出して、胸にあてた。
「ん……んッ……」
そして慣れないのか、背中側の小さな金具を繋ぐのに手間取っている。
「……女性らしさに憧れて、父に隠れ、鏡の前で女らしい仕草をしようとだが……できなかったんだ。女っぽい仕草をするたび、幼少期のトラウマまだ怖いんだ。女らしく振る舞う事が……」
下着を付け終えたワトソンが——すぅーっ。はぁーっ。深呼吸して——
意を決したように、くるっ！
こっちを向いてしまう。
「……！」
——女——だ。やっぱり。
ワトソンが無警戒に胸のカップを直したりするから、まず確認するようさすぎず、形も左右等分で、見た目にも美しいお椀形をしに押し出し、少し上向きにツンとしている胸。
……その薄布を大きすぎず小さすぎず、形も左右等分で、見た目にも美しいお椀形をしアリアのように平坦でもなく、白雪のように大きくもない。

女子高生らしい、歳相応の膨らみだ。
それが宝石のように、まぶしく輝いて見える。
その両胸から——可憐な臍を経由して下半身に至る、無駄な肉付きのないスラリとしてて、全身がバランスよく構成されてる。
美術室に似合う、デッサンモデルみたいなスタイルだ。健康美の見本みたいな感じで、変ないやらしさがない。
そのせいか、ヒステリア的には危険なカンジがするのに——理子や白雪にはないショートカットだし。
ような恐怖感は無いぞ。髪も男子っぽいし。
まだ、なんとか——自制できそうだ。頑張れ、俺……！
「はじめまして……で、いいのかな。これが本当のボクだ。ボクが女性として誰かの前に立った事はない。キミが、初めてだよ」
ワトソン自身もドキドキしてるのか、その肌が——微かに、ピンクに色づいていく。
ただ、男らしく（女だが）堂々と下着姿を晒しつつも、近づいてきたりはしないな。
いいぞ、そのままそこで踏みとどまってくれ。
「ボクが女だということをキミが皆に言いふらすつもりなら——ボクも、早急に女らしくならないといけないけど」
「……？」

「ボクが女らしく振る舞えないのは、精神的なトラウマによるものだ。だから、ショック療法でそれを克服する。キミが、それをやれ。その行為を以て、キミへの償いも兼ねる」

「ショック療法……？　なんだよ、それ――」

「だから……その、キミがボクに、自分を女だと思い知らせるんだ。ボクは貴族だから、直接的な表現はできないが……ボクを最も女扱いする行為を……し、しろっ」

「……？」

「……？」

わ、分からん……！

「こうなってしまえば、ボクも覚悟を決めた。女に戻る。そのためには……自分で自分を女だと身にしみて体感する必要があるんだ。だからキミが……ボクを、女性にしろっ！」

「女性にしろ……って、お前は元々女だろ……！」

「キミは話を聞いてなかったのか!?」

「聞いてただろ！　お前の目の前で！」

早く解放して欲しい俺が、キレ気味にそう言うと――

ワトソンはラズベリー色の唇を結び、顔をシリアスに引き締まらせた。

「トオヤマ……ひょっとして、ボクの感情を気遣っているのか？　それは……いいんだ。

こんなタイミングで言うのは、最悪だが……あの夜、感じたよ……ボクは、キミならいいんだ。キミがいいんだ」

不意に、ワトソンの声に女の色香のようなものが混じり――俺は、たじろぐ。

お、俺の何がいいんだ。

あんだけ撃ち合って、殴り合ったのに。

「もしキミが詳しく知らなくても、途中までは本能で何とかなると思う。細かいリードはボクに任せていい。ボクは医学書で読んだ事があるから、知識だけはあるんだよ」

い、意味不明だ。しかも俺への償いにもなること。

ワトソンが女らしくなれるショック療法で、しかも俺への償いにもなるようだが……

そんな一石二鳥の行為をしろ、と言われてるようだが……

ヤツが肌を出した事と、話の端々から類推するに――医学的な行為のようだが――俺は医者じゃないぞ？

「どうしたんだ、トオヤマ。男のくせに怖いのか」

「い、いや、怖いというか……ワケが分からん。ど、どういう事だよ、それは？」

「わ、分からないのか!?　ここまでされて……！」

ワトソンは、その勝ち気な一重瞼（ふたえまぶた）の目を丸くする。

「ボクはキミにだけ、キミだから……この姿を見せたんだ。それでも、無自覚なのか」

「……」

言葉に詰まる俺に、ワトソンは呆れ顔で大きな溜息をつく。

「『据え膳食わぬは男の恥』という諺が日本にはあるようだが……キミその料理をアーンしてと言われても食べない男なんだな。どうりであれだけ多くの女子と浮き名を流しながら、それぞれとの仲が進展していないと思ったよ」

大きなお世話だ。

こちとら病気持ちなんだよ。

女子との仲なんか、進展させてたまるか。

「じゃあ、ショック療法じゃなく……リハビリにしよう」

「リハビリ……？」

話の流れが変わったぞ。ビタ一文分からんままに。

「そう。名付けるなら……ボクは『女の子訓練』をキミでする。キミは『男の子訓練』が必要そうだから——ボクですればいい。幸いボクたちは異性同士だから、相互にリハビリできるよ。その代わり、リハビリが終わるまではボクが女子だという事は秘密にしてくれ。いいね？」

いいも何も、そもそも人に言う気は無かったんだが……ワトソンは袋から『変装食堂（リストランテ・マスケ）』で使うセーラー服を出してる。

ありがたい。服を着てくれるみたいだ。
ここは流れに乗っておこう。
「そ、そうだな、リハビリで行こう」
とりあえず俺が頷くと、ワトソンはセーラー服を着る。
「ショック療法で行く際に必要になるかもと思って、持ってきておいてよかった。
しゅる、しゅる。スカートも、はいてくれた。
本日最大の難所を、どうやら切り抜けたらしいぞ。
「これから時々、ここでボクは『女の子訓練』、キミは『男の子訓練』をする。たぶん、異性とはいえ息も合うだろう。ただ、これも2人だけの秘密だよ」
ぴ、と指を立てて俺に詰め寄ってきたワトソンは……
外見はボーイッシュな美少女なのだが、ちゃんと服を着ている分には——やはり、俺にとって抵抗感が少ない。
本人が言う通り、女らしくないからだ。喋り方や仕草の一つ一つが。
女子力ダービーで白雪・理子から10馬身ぐらい遅れてるアリアより、まるで、セーラー服を着た美少年。同性の前にいるような気安さがある。
確かに女子の中では、俺に合うタイプだろう。

ヒステリア的な安全面において。

「まあ、なんとなくだが――お前の言う、ってのは何をするんだ」

「そうだな……じゃあトオヤマ。今からこは、春の野原だ」

「は？」

何……言ってんの？

「ほら。タンポポが咲いている。キレイだね。あはは」

ワトソンは演劇でもするように、床板を示す。

心なしか、その笑顔が女の子っぽくなったぞ。すごく幼稚なカンジ。

「お……おかしくなっちゃったのか、ワトソン」

心配になって聞くと、ガスッ！

ワトソンは俺の顎に鋭いショートフックを入れてきた。

「おかしいのはキミの方だ！　これはロールプレイ、武偵ならそれぐらい分かれ！　ここでのボクは女の子、キミは男の子としてボクに接するんだ！」

どうすりゃいいんだよ。教えろッ」

「女の子はそんな溜め0の完璧なフックは放たん！　ていうか、男の子として、って――

「えっ」

「えっ、じゃねーよ。ロールプレイとは――何人かで特定の状況設定をしてそれぞれの役を演じ、状況に陥った際のシミュレーションをしておく訓練だ。言うなればゴッコ遊びみたいなものだが、これが意外と、潜入捜査の前にやっておくと高い効果がある。

なので、探偵科や諜報科、特殊捜査研究科なんかでは必修になっている程だ。

「だからその、えっと……だから、女子と男子として、自然に接しあうんだろ」

「俺は女子と自然に2人っきりになんかなれん。何をすればいいんだ。やるのはいいが、方針ぐらい決めてからにしろよ」

「いや、だから――女の子のボクを、キミは男の子として……ちゃんと、可愛がれっ」

「か、可愛がるって……またアバウトな……」

「可愛がってくれなきゃ怒るからなッ！」

真っ赤になって言うワトソンは、既にかなり怒ってるカンジだ。気の短いヤツめ。

しかしこの間戦って分かったが、コイツはボクシングができる。

それもアマならいいとこまで行けそうなくらいの、高レベルな動きだ。

素手でも油断できん。怒らせないよう、アドリブで何とかせねば。

「じゃあ……野原はやめろ、唐突だし。屋内で屋外の動作は難しい」

「それもそうだね。じゃあ、ここはボクの部屋という設定でいこう」
「構わんが、俺はお前の部屋の構造を知らんぞ」
「だいたいでイメージするといいよ。こっちにデスクがあって、こっちにベッドがあって、イスは1脚しかないから、祖母が来た時とかは――仕方なしにベッドに2人で座ってた。ここがベッドがわりだ。トオヤマ、ほら。ボクの横に座れ」
と、横倒しにされた大きなキャンバスの上にワトソンが座る。
「……」
お前……ホント、男子として生きてきたんだなぁ。
なんちゅう設定だよ。
ロールプレイといえ、女子が男子を自室に上げて、ベッドに2人で座るって。
事の重大さに気がついてねーだろ。
「じゃあ、これでいいのか」
とはいえ殴られたらたまらないので、俺も仕方なしにそこに座る。
ぎし、とキャンバスが軋み、リアルにベッドに座ったみたいだ。
それを聞いたワトソンが――急にハッとした顔になった。
音から状況が想像されて、いきなり設定をミスった事に気付いたらしい。
「……ッ」

少し膝を開いて座っていたワトソンは、慌てて膝を閉じ、防御的な手つきでスカートを腿の下にゴソゴソ絞り込んでいく。

そしてキャンバスの縁を掴み、硬直し、何も言わなくなってしまったので……

「……」

会話のきっかけが無い俺も、黙るしかない。

それがまた良くなかった。

……リアルすぎる。

そんな体験は無いが、実際、女子の部屋で——男女でこんな事になったら、黙りこくるしかないよな。2人とも。

「ト、トオヤマ。何か話せ。自然に、男子っぽくだぞ」

ワトソンはさっきまで場をリードしていたくせに、窮地に陥ると俺に振ってきやがった。

その無責任さにカチンと来た俺は、

「……お前、人にやれっつーんなら自分も女子っぽく喋れよ」

と、さっきからロールプレイがまるで出来てないワトソンに注意する。

「じょ、女子っぽく？　い……一人称はどうしよう。『あたし』はレベルが高すぎるよ」

「……じゃあそこは、『ボク』でいい。そういう女子もいるしな」

「ベッドに、だ、男子と座って、女子っぽく……か……」

自分に暗示をかけるようにゴニョゴニョ呟いた。
薄暗い室内でも分かるぐらい、下から上へ、だら、だらと汗もかき始めた。
「……トオヤマ。な、何か、喋ってよ」
やっぱり怖いのか、小刻みに震えながら女っ喋り方のせいか、急に女の子に見えてくる。
（……マズい……）
余計なこと言うんじゃなかったぜ。
女の子だと思うと、異常に可愛く感じてきたワトソンは……
ロールプレイなんだからそれで正解なんだがぼく喋り出したワトソン赤くなっていく。
「……な、何か、喋ってよ」
「じゃ、じゃあ、何もねーよ……」
「何しにきたの。ボクの、部屋に。やばいぞ……コイツ。本当に女子とベッドに座ってるみたいだ。
「何しにって、お、お前が呼ぶから……」
「そ、そんな。は、恥ずかしいよ」
前髪を小さく跳ねさせてうつむき、ぎゅーっと目を閉じたワトソンから——ふわり。
微かに、シナモンのような香りがする。
（や、やばいって……！）

コロンか何かが、いいニオイすぎる。
それもアリアのクチナシ・白雪の桃・理子のバニラ・レキのミントみたいな女子っぽい香りじゃないから、油断してしまう。いま、思いっきり吸い込んじまったぞ。
ドキン……と、俺の血流が、危険値を掠め始める。
ていうか今さら気がついたが、どうやら俺は女子の香りに弱いらしいぞ。人より嗅覚が鋭いらしい。犬かよ。
「ちょ、ちょっと早いが……そ・そ・そろそろするか」
お――俺の――大バカ野郎！
なぜここでミスる！　しかも致命的なミスを！
ワトソンが辛そうだしこっちもヒスりそうだったので、もうロールプレイを終了しようと思って、『そろそろにするか』と言おうと思ったのに……『そろそろするか』って！
――何を!?
という顔をガバッと上げたワトソンと、俺のテンパった目が合ってしまう。
慌てた2人の体重が移動したせいで、元々不安定に重ねられていたキャンバスが――
がたんっ！
後ろに、大きく傾く。
「キャッ！」

女子っぽい声を上げて、ワトソンが腰を抜かす。
「うおッ……！」
大キャンバスにひっくり返ったワトソンにぶつからないよう、俺も
俺は何枚か布を破って、予想以上に体を下げてしまった。
「！」
「……！」
どうしてこうなった……ッ!?
俺はワトソンの頭部を抱き、ワトソンは俺の身体に抱きついてる。
お互い、強襲科で習った『転倒しそうな場合の動作』をつい実践し
俺の腕の中から、上目遣いにこっちを直視してくるワトソンは……
ワトソン、は……
……
「――フッ――」
という笑いが漏れてしまうぐらい――
愛らしい瞳をしてるね。仔猫ちゃん。
「『ボクを最も女扱いする行為をしろ』――ワトソン。さっき確かに、そう言ったね」
「……！　か、構わない。ここからショック療法に切り替えても……ボクは男として

育ったから、度胸だけはあるんだ。何でもして、いいッ……！」

「じゃあ――そうしよう」

目つきから喋り方まで、急変した俺にワトソンは、ぎゅーっ、と目を閉じ「うわごとのように呟いてる。

ははっ。そうしているキミは、女の子らしいよ。とても。

「ああ、ああ、ドキドキして、口から心臓が出てきちゃいそうだよ……なっちゃう……！」

とパニック気味に言うワトソンを、俺はそっと抱きかかえるようにして起こす。

「――エル・ワトソンさん。一つお教えしよう」

「……？」

キャンバスのベッドに改めて座らされたワトソンは……

円らな黒い瞳を、キョトンとさせている。

俺はキャンバスから下り、

「女性を最も女性扱いする行為――それは、優しくすることだよ」

と、微笑んであげた。

俺は、映画で見た西洋の礼儀作法を真似て――スッ、と跪く。

「エルは素晴らしい申し出をしてくれたけど、怯える女性に乱暴な事をしてはいけない」

唐突に『エル』というファーストネームで呼ばれたワトソンは――

ドキン、というファーストネームで呼ばれたワトソンは――

正確に言うと、聞こえてきそうな表情になった。

「し、失敬な！　ボクは怯えてなんかないっ！」

と、俺の前に下り立ったワトソンの膝を失礼ついでに拝見すると……

苦笑いしてしまうぐらい、震えている。

やっぱり、ムリをしていたんだね。

「今日はここまでにしよう。リハビリテーションは段階的にするものだ。急にハードな事に及ぶと、お互いの体に悪い」

「でも、それじゃあボクのキミへの償いが……」

「エル。エルはそこの女神像より美しい」

「……キ、キミ、は、きゅうに、なに、を……っ……！　からかうな……！」

「――からかってる目に見えるかい？　エルは、美しい」

俺が真摯な視線を向けると、ワトソンは自分の胸を押さえてビックリしてる。

「ボ、ボクが……う、美しい……!?　そんなことを言われたの、生まれて初めてだ……」

「エルはその美しい姿を俺に見せてくれた。それだけで充分すぎる。償いには――」

俺はさりげなくワトソンの肩に触れ、撫でてあげる。
この――ワトソンの胸から聞こえる、きゅん、きゅん、という音は何だろう。
ヒステリアモードの俺にも、分からない事だらけだね。女性の身体というものは。
「何でもしていい、とまで言ってくれて――嬉しかったよ」
モードの特徴の一つだ。
賛美・謝辞・感謝を織り交ぜて語り、女性に考えるスキを与えないのも――ヒステリア
本能的にやってるみたいだが、我ながら末恐ろしいよ。こういうところは。
「……う、うれッ……嬉しかった、の……良かった。じゃあ……」
ワトソンもようやく、リハビリ終了ムードになってくれつつ……
さっき脱いだ男子の制服を手に取ったので、俺は音もなく彼女に背を向ける。
「き、今日は終了にしよう。これからキミは気が向いたらボクを呼び出して、リハビリを
していいよ。放課後でも、授業の合間でも、俺は音もなく彼女に背を向ける。
キミができそうなら……リハビリから、シャワーショック療法の方に行っても構わないからね」
最後まで言い張るワトソンに、俺は「はい、はい」と苦笑混じりに応えておく。
少し場の空気が落ち着かせるために頭もそっと撫でてあげる。
「あと、トオヤマ……ムードを壊さないために、なんにせよ、事後言うつもりだったけど
……『極東戦役（FEW）』は――」

その単語に、俺の目つきが鋭くなる。

――極東戦役。

世界の裏側で行われている――『師団』と『眷属』の、見えない戦争。

その、話か。

「――これからの戦いは厳しいぞ。キミは自ら『師団』、茨の道を選んだんだからね」

逃げ回り気味だった俺も……

この戦いには、もう参加した事になってしまったのだろう。

『眷属』の一角を担うヒルダを倒したという既成事実があるんだからな。

「……茨を掻き分けるのには慣れてるさ」

覚悟を決めた言い方で返すと――

ワトソンは服を着る手を止めて、少し間を置いた。

「リバティー・メイソンも、『師団』になる事を本部――グランド・ロッジで議決した。これからはボクも、キミの味方になる」

「それは頼もしいな」

俺は――前々から、医療系の武偵が仲間に欲しいと思っていた。

俺たちは、よく負傷するからな。

――医療系の武偵には救護武偵・衛生武偵の2種類がいて、東京武偵高ではそれぞれが

救護科（アンビュラス）と衛生科（メディカ）と病院で負傷者を治療する医学、衛生科は事件現場で武偵を救助・応急処置する技術を教えていて……喩（たと）えるなら救護科（アンビュラス）の生徒は医者やナース、衛生科（メディカ）の生徒は救急隊員や衛生兵のような役割分担をしているのだ。

倒れた仲間がいれば銃撃戦の現場にでも飛び込んで行かなければならない衛生武偵には、高い戦闘技術も求められるのだが――ワトソンなら、申し分ない。

だが……

「ただ、武偵高のチーム登録は終了した。知ってるとは思うけど、国際武偵連盟（IADA）は割と杓子定規（しゃくしじょうぎ）だからね。一度登録すると、殉職や退任などで欠員が生じない限り入れ替えがきかないんだ。エルには外注することになるが、衛生武偵の報酬は高額で――」

「――もう、報酬はもらってるよ」

「……？」

「ヒルダの翼を回収したんだ。それと、魔臓（ぞう）組織。どちらも、対魔武装（アンチミディアン）の一級素材になる。それらをもらえるなら、1年間の援助契約を結んでも構わない」

俺にとっては不要なものなので、それで力を貸してもらおう。

ありがたく、ワトソンがいいなら……

「じゃあ、お願いする。これからはバスカービルの衛生武偵（メディックDA）になってくれ」

「――承（うけたまわ）ったよ。契約書はバスカービル宛（あて）に後で送るね。それと……ヒルダの治療中に、もう一つ回収したものがある。彼女が隠し持っていた物だ」

と言ったワトソンがこっちの肩をつつくので、振り返ると――

男子制服に着替えたワトソンは、その手にピルケースを持っていた。

ぱか、と開かれたその中に入っていた物は――小さな宝石。

ルビーのようにも見えるが……色は、深い緋色（ひいろ）をしている。

「結晶化した『殻金（カラガネ）』――7つある内の1つだよ。もうすぐ玉藻（たまも）も帰ってくるだろうから、その時アリアの体内に戻してもらおうと思ってる」

――殻金。

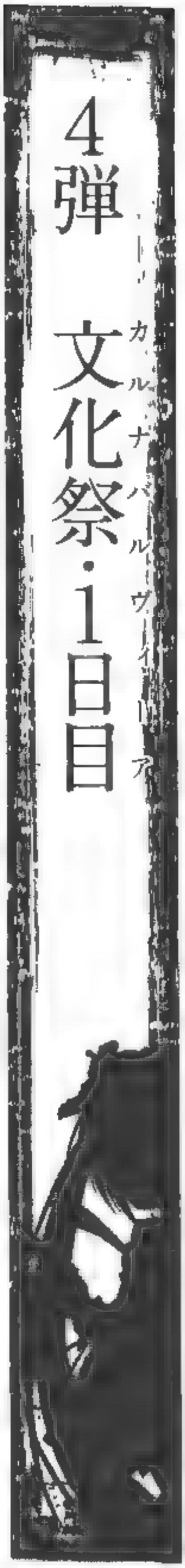
それは緋緋色金（ヒヒイロカネ）と人間の心を遮断する殻だ。

アリアの胸には既（すで）に2つ戻されているから、これがあと4つあれば――

アリアは、玉藻が言っていたような恐ろしい存在にならなくて済むんだな。

だが、その4つは『眷属（グレナダ）』の連中が持ち去ってしまった。

それを――取り戻さないとな。何が何でも。全部。



4弾　文化祭・1日目

それから何日かが過ぎ――10月30日。
武偵高で、今年の文化祭が始まった。
寮から出ると、歩行者天国になった学園島の道路を校外の人々が往来している。
道端には出店があちこちに建ち、強襲科や尋問科でさえも平和的に一般開放されてるな。
（……まあ、ヤバい物は一通り地下に隠してるんだけどな）
武偵高では文化祭の準備期間中に、施設内のレイアウト変更や大掃除をする。
少しとはいえ取材も来るし、武偵高への進学を考えている奇特な小中学生と親御さんに悪印象を持たれないようにするためだ。
ただ、それらの面倒な仕事は1年の担当。
武偵高の上下関係は軍隊みたいに厳格だからな。
奴隷の1年、鬼の2年に閻魔の3年……なんて言葉もあるくらいだ。
俺も去年、それはそれは徹底的に強襲科の薬莢拾いをさせられたもんだよ。
（文化祭は2日あるが……今年のノルマは今日の変装食堂だけだし、明日は羽を伸ばせるかもな）

俺は専門校区を歩きつつ、あちこちに貼られた文化祭ポスターを眺める。

これらのポスターは、武偵高の生徒たちから募集したものだ。

油絵風のもの、アニメ調のイラスト、バリバリのCG。数十種類はあるな。

（どれも、そこそこ上手いな……）

ポスターには全て番号が付いており、携帯から投票ができるコンテストになっている。

このコンテスト、ジャンヌが聞きつけてきた日は大変だったよ。

『優勝できるのは分かっているが、一枚描いてみるか』

などと言いつつ、創作意欲が湧きまくりの顔をしてたからな。ジャンヌ画伯。

『勝てるのが分かってて戦うなんて、大人げないだろ』

とかなんとか言いくるめてやめさせたが――危ないところだったぜ。

超ド級に絵がヘタなジャンヌの作品が公開されて、来場者に精神的外傷でも負わせたら訴訟騒ぎになるところだった。

そう。俺は武偵の仕事――『事件を未然に防ぐ』という仕事を、人知れず果たしたのだ。

（これ……教務科に報告したら、1単位ぐらいもらえるんじゃないか？）

などと半ば真剣に考えながら、俺はお祭りムードの校内を歩いていく。

車輌科の格納庫ではヘリの操縦席に座れるとあって、子供たちが集まってるな。

狙撃科のエアガン射的コーナーや超能力捜査研究科の占いミュージアムも大人気。

プロ顔負けと名高い特殊捜査研究科（CVR）のミュージカルなんか、当日券売れてるよ。CVRは美少女揃いだからな。バカ高いチケットが飛ぶように売れてるよ。

いつもは生徒たちがメシを食い散らかす学食も、今朝は『変装食堂（リストランテ・マスケ）』に長蛇の列ができるとあって、成功すれば教務科（マスターズ）が働いた生徒全員の内申を良くしてくれるらしい。

磨き上げられている。

変装食堂では生徒の潜入捜査（スリップ）の練度をアピールできるとあって、

いつも単位がギリギリの問題児こと俺にとっては、真剣にやる価値のある仕事だ。

だが……

「いらっしゃいませー！」

「そんなネクラそうな目つきのポリ公はおらんやろッ」

などという女子たちの声が聞こえる裏で……

と、ゲンコツと共に判定理由も言われたが――納得いかねえ。

変装の仕上がりを見た蘭豹（らんぴょう）に命じられ、俺は厨房（ちゅうぼう）係に回されている。

目つきなんて生まれつきのものだろ。そこまで変えられっか。蘭豹めそこまで登録してること、

こないだ情報科（インフォルマ）の知り合いから聞いた話……お前が出会い系サイトにバラしてやるからな。プロフィールの趣味欄にも

『らんらん』ってハンドルネームと共に

読書とか書いてたらしいが、お前がパチスロ攻略本と実話ナックルズ以外の書籍を読んでたのは見た事ねーんだよ。歳も18歳ってサバ読んでたそうじゃねえか。

顔だけは美人だから、騙されてあの雌ゴリラとデートさせられる被害者が現れないとも限らん。俺が天誅を下してやる。

……などと怨念を込めながらシチューを掻き回す確かにネクラな俺の横で中華鍋を振り回すのは、

「火力が足りねー！」

などと消防上の服装のくせにボヤく武藤である。

これは蘭豹により「消防上は命懸けの仕事やぞ！　そんなヘラヘラした奴がおるか！」と3m近く蹴り飛ばされている。

ていうかそもそも厨房係がいるんなら、全員が変装する必要は無かったじゃねーか。

無計画すぎるだろこの学校。

などと恨み辛みを込めたシチューやパスタを作り続けること1時間。

午後からのシフトでやってきたらしいキャバ嬢こと平賀さんが、蘭豹にネコ掴みされて空輸されてきた。

憮然とした表情の平賀さんは足が曲がらない方に曲がってるが、蘭豹にアキレス腱固め

でもやられたんだろう。うちの暴力教師は女子にでも容赦しないからな
「ったく、平賀ァ――お前に比べりゃ誰でもマシや！　身長ぐらい伸ばしてこんかッ！」
「あやっ、あや！」
ムチャな事を言いつつ平賀さんをカラの寸胴鍋に放り込んだ蘭豹が、
「つっても、厨房は2人で足りるしなァ。さて、どっちをフロアに出すか……」
俺は――武藤が平賀さんのキラキラスカートを引っ張って鍋から救出している隙に、
「先生、この厨房で俺……いや、本官は十分反省しました」
と、蘭豹のハンドルネームを交えつつ蘭豹の方を向いていた蘭豹が――ピタッ――と静止する。
すると、武藤が一時停止ボタンを押されたように、でかいポニーテールまで固まって
「……」
口をへの字にして振り返った蘭豹は、額に小声で進言した。
確証はないが、もしや……遠山が自分の秘密を知っているのでは……？　という焦りの色がある表情だ。ここで話題を変えつつ、もう一押しだ。
「ち――ちなみに本官には19歳の兄がいますが、厳つくはありますが、美形です」

キヲツケの姿勢で言うと、『好きなタイプ・こわもて』とプロフィール欄に書いていたらしい蘭豹は――それでも教師のプライドを守り、基本、への字の口は変えずに……しかし嬉しそうに口の端を曲げて、W形にした。

まるでリアルに豹が笑ったみたいだ。

まあ、あんた実は兄さんに一度会ってるんだけどな。女子の姿した兄さんに、だけど。

「そうやな……武藤と平賀は同じチームやしなァ。連携して調理させた方がええかもな。よし、遠山！　フロアに行けッ！」

――やった。兄さんを微妙に犠牲にしつつも、渡りきったぞ。雌豹の眼前を。

と、俺は何だか分からない顔でこっちを見ている武藤と平賀さんに敬礼しつつ……なんとか、この不名誉な厨房からの脱出に成功したのであった。

――警官姿でフロアに出ると、そこは嵐のような忙しさだった。

変装食堂は庭にまでテーブルとイスを展開し、様々な服を着た2年が行き来するカオス領域を広げている。

（……う……）

フロア係では、イヤでも女子が目につくな。ここはここで、苦手なムードの難所だ。衣装も女子の方が華やかだし、コスプレ喫茶みたいな雰囲気が流れてる。

男性客たちは楽しそうだが……それは普段の武偵娘共の危険さを知らないからだろう。
ウェイトレスとして給仕される分には、単にコスプレ女子高生が食べ物をくれるだけだ。
普通の男にとっては、それはそれで楽しいイベントなのかもしれない。
だがその女子たちはあんたらの敵に雇われたが最後、銃弾やＴＮＴ火薬をくれるんだ。
しかも火がついた状態でな。
（……知らぬが花、ってやつか……）
などと思いつつ炒飯やコーラを右へ左へ運んでいると、普段縁のあるパイロットの制服でオバチャンたちのアイドルと化している不知火。
化学研究所職員の白衣でメロンソーダを渡し、客に微妙な表情をされた中空知は……
だらしない感じに柔らかそうな胸をレースクィーン衣装にムリヤリ収めた中空知は……
マズいな。仕事がちゃんと出来てない感じだ。
まず、弱視用コンタクトをしてるハズなのに、壁や机にぶつかりまくってる。
オーダーの復唱も例の中空知喋りだし、俺と目が合うとなぜか真っ赤になり意外と長い脚を1人でもつれさせて転びやがった。
しかも転んだ拍子に、持ってたお盆でなぜか自分の顔面を強打してるし。
なんか今のは俺のせいっぽかったし、あまりにもこの仕事が苦手そうだったので……
俺は中空知を助け起こしつつ、休憩させてやろうと思ってフロア外まで連れていった。

フロアから出てすぐの道は、バリアフリーにするためベニヤ板でスロープが組まれてる。
……うう。中空知。
お前、転んだせいで、その超ミニなスカートがかなり危険な高度までズリ上がってるぞ。
だがそれを指摘しようにも、その際、もれなくムッチリしただらしない太ももをつい見てしまう恐れがある。言うに言えん。
と、1人で怯えつつの俺にフロアから見えない場所まで連れてこられた中空知は……
「お、おとこやまくん……ウェ、イ、ウェイトレス、失敗ばっかりで……ごめんなさいっ。わ、私はっ、ドジでノロマでグズな、カメですっ。カメとか、カメですっ！」
長い前髪を押さえてメソメソするが、実際自分で言っている通りっぽいので否定もしてやれん。
この人、通信オペレーター以外は図書委員の仕事ぐらいしかしてないからな。いきなりレースクイーン姿でウェイトレスやれって言っても、ハードルが高すぎだろう。
これを厨房に回して哀れな消防士を解放してやれよとも思ったが、中空知は男性客から妙な人気を集めてるっぽいので蘭豹に進言もできない。
とはいえこの変装食堂、文化祭の後で教務科による評価を受けるのだが——
その結果が悪いと連帯責任とされ、全員の内申が下がるルールになっている。
なので、挫けるヤツが出ると俺の評価も下がるのだ。なんとかしないといけない。

「いいから。蘭豹に見つからないように少し休め。俺がその分働く」

我が身可愛さに、俺が中空知を休憩室の方へ引っ張っていると……

「ヘイヘイ！　さすが一級フラグ建築士のキーくんだ！　なっちールールールー」

などと、得意の変装で『西部劇のガンマン』になりきり、大遅刻してきた理子が俺たちを指さしてきた。

評価が異常に高かった理子が俺たちを指さしてきた。

当時のアメリカ人らしく、ちゃんと人を親指で指してる辺りが芸コマとして普通に学校に通っているで、スカイツリーでの決戦なんか無かったかのような感じだ。

理子は――退院してから、いつもの理子

俺たちに対する態度も、元通りで……まるで。

まあ、理子は面倒ばかり起こすが、いないといないで寂しいヤツだからな。

元気に戻ってきてくれたのは素直に嬉しいんだが……

「でもキーくんはフラグへし折り職人でもあるからねぇー。理子的には何サボってんだよッ。中空知ーはそう見えて意外と計算高いからねぇ。ちょっとキーくんからは離しておいた方が無難かもですよ。おーおー、ドジっ娘演出ですかそれは」

「ちゃんと日本語を喋れ、というかお前は向いてない。少し休ませて、俺たちでフォローするぞ」

「オーケー！　なっちーはウェイトレスに

理子はニヤニヤしながら、中空知のズリ上がったスカートを指す。

「み、み、峰さんっ！　これはこれ、違うんです、計算とかじゃありませんっ！」
それで遠山くんくんくんくん……の、こかんど、好感度がッ、上がるなら！　音声明瞭ですッ！」
慌てて俺から離れた中空知は、ズリ上がり気味だったパツパツのミニスカートを直す。
中空知。お前もおま前で、気づいてたんならなんで今まで直さなかったんだよ。
俺はずっと目を上に逸らしてたんだぞ。危険だから。
「でもでもキーくんはいいこうよー。理子はキーくんとアリア攻略からいこうよー。まずはアリア攻略からねー。ばぁーん」
「……は……？」
してるぞっ。だからキーくんは、理子とかなっちーとはカラダだけの関係を保ちましょー
ふたえのお目々を細めた理子が、人差し指でこっちを撃つような仕草をし……
……ゴゴゴゴゴゴ香りと共に、背後からマグマのような気配がして――
「……」
ほぼオチが読めていた本官の視界が、くるっ。
180度入れ替わった。
上下に。
俺は何者かの手によって、ベルトと襟を掴まれてひっくり返されたのだ。

「この――エロキンジー！　か、か、カラダって何！　理子だけじゃなく、子にまで……なっ、何してんのよッ！　あんたがするのは、ウェイターの案の定――
俺を上下逆転させて後ろから抱きかかえるのは、小学生姿のアリアちゃ
「ちがッ……俺は何も――！」
「あぁ？」
仔ライオンがイラッとした時のような声を上げたアリアは、ふわっ。
俺を抱えたまま、一瞬滞空し――
「――風穴落としィィィー！」
ゴスッ！！！
スロープのベニヤ板に、俺の頭を顎まで突き刺した。警帽ごと。
床板が薄かったお陰で、死は免れたが……
なんちゅう大技を決めてくれるんだ。それもバリツか。
おおー！　小４女児が警官にパイルドライバーだ！　武偵高でしか見られないね！
と、と、遠くんが！　山くんくんが！　ぎ、逆から見たギロチンに！
などという理子と中空知の声が……
……くぐもった音となって、聞こえる。床板の上から。

何とか頭を抜いて、這うような姿勢で上を見上げると――

「……！」

俺はアリアの短い女児スカートを、斜め下から仰ぎ見る形になっていた。

警察官が本来捕まえるべき、変質者みたいな状態である。

「――！」

まんま小学生っぽい、ほっそりしたアンヨの上が――ま、マズい！

このアングルはマズいぞ！

あと1㎝頭が下がったら、見える光景によってはヒステリアモードになっちまいそうな血流を感じる……！

あ……あんたって男は……！　この状況で……！」

ビキイ……！

アリアは俺が『ラッキー、見えた（笑）』とでも思ってると思ったらしく、こめかみに血管を浮かべている。

「おお！　アリアちゃん8歳！　丸見えだぁー！」

「――小4は10歳よ！」

「ばきゅーん！　ワールテルローの戦いだ！」

ぼーん！　とジャンプした理子が――

キーくん頭を下げろ！」

「ぐっ！」
俺の背に、デニムスカートの腰で跨って
その体重で、俺の頭が体ごと下がる。
読めたぞ。理子め。俺をヒステリアモードに慣れさせようとしてやがるんだな。
今後の『眷属たちとの戦いのために。
（そうはいくかッ……！）
いまヒスったら、それ以前に大惨事になる。そこの人けのない控え室で、3人まとめて
ヒステリア無双をやりかねん。なんの罪もない中空知まで犠牲者にしてしまうぞ。
俺は、防御姿勢――
だが、理子はアリアの足の間を見ないようにしようとした。
中国武術の技の多彩さを思い知らされるぜ。
完全に『見えキャメルクラッチの要領で俺の顎を両手で引っ張り上げる。
「風穴記憶破壊角度になったアリアが！」
――足を踏み下ろしてくる。
（――！）
神はいる。

アリアが上げた靴の裏が、神の加護としかスカートの奥――足と足の間だけを、俺の視線からガードしているのヒステリアモードにならなくて済む……！神様。間もなくそっちに行くかもしれないから、そん時は礼を言うぜ。

アリアの風穴コンボを喰らっても3分の失警帽をかぶり直してウェイターの仕事に戻っだがよく考えたら、この耐久力は主にアリ感謝は取り消す。

「はーい皆さーん。こちらですよー」

小学生の集団を、女教師姿の白雪が優しい子供たちは変装食堂の入口付近ではしゃいそれをレジ係のアリアが店内に案内しようとしたら、仲間だと思われ引っ張られ転ばされる始末。そこで、店長役のアリアが店内に案内しようとしたら、仲間だと思われてツインテールを引っ張られ転ばされる始末。

（……板に付いてるなぁ。子供の扱いが……）

さっきあれだけランダムな位置にいた小学生たちが、きちんと並んで席についていくぞ。

さすが6人姉妹の長女。見るからに良妻賢母のタマゴだな。
注文を取り、フロアからバックヤードに入った白雪は、
「お客様もいっぱいだし、頑張って盛り上げましょう！　えい・えい・おー！」
などと疲れ気味のコスプレ集団こと俺たちに言い――
みんなもつられて、「おー！」と拳を挙げてる。
無表情なままだが、レキ博士までやってるぞ。あんなの初めて見た。
しかも白雪は客のテーブルごとに今どんな対応が必要なのかテキパキ教えてくれるので、
皆、動きやすくなる。
まさに救世主だ。
「統率力あるなぁ……お前」
仕事の優先順位をホワイトボードに書く白雪を見て、俺は感嘆する。
お前、今後、バスカービルのリーダー代わってくれないかな。俺、もう自信ないし。
「そんな……」
俺に声を掛けられた白雪先生は、あせあせ、とダテ眼鏡を直す。
「私、生徒会の仕事で遅れてきちゃったし。そのぶん埋め合わせしなきゃ」
そして妙に嬉しそうに俺の所へ来て、階級章やネクタイを直してくれた。
「武偵には接客業が不向きなヤツが多い。教務科には、かなり減点されてたと思うが……

お前のお陰で盛り返せそうだぞ」

「……キ、キンちゃんに、誉められちゃった……」

かぁー……と、ウットリした表情で赤くなった白雪は……

「わ、私、キンちゃんのお役に立てるよう頑張りますっ。役に立たないあなた、行ってらっしゃい」

警帽を整えてくれた白雪は、セリフ内の『子供』の部分でアリアをギロッと見てた。

ちうー、とメロンソーダを飲みつつ休憩してたアリアも……ストローを噛みつつ、白雪の仕掛ける視殺戦に応じてるぞ。

というか、ぎりぎり。ストローを噛みつつ、その逆る殺気は。

な、なんだよお前ら。

そのくせいつもと違って、なんかちょっと焦るような顔でこっちを睨んだ。その逆る殺気は。

言いたい事があるなら言えよ。アリアらしくない。

「ほら、アリアも学校に行く時間ですよ。忘れ物はありませんか？」

勝ち誇ったように、アリアは「ない。行く」と言い捨ててソッポを向く。

口調で母親っぽく言う白雪に、

そして同じくフロアに戻る俺の足を、ぎゅむ！　わざと踏みやがったなんで俺が白雪を誉めると、お前が怒るんだ。

な、なんだそれ。

しかも体罰がなんか陰湿だ。今までとは怒り方の質が違う気がする。
脳みそに新しいソフトでもインストールされたのか？　速攻アンインストールしてくれ。

言いたい事があるのに言わないっぽい、おかしなアリアに時々睨まれながら……
俺はなんとか、自分のシフトが終わる5時を迎えた。
先日また買い直した携帯を見ると、ワトソンから「今日はリハビリしないのか」などというメールが来てた。アイツの前でヒステリアモードになった時のことを思い出すと鬱に
なりかねん俺は、華麗にスルーを決め込む。
それでなくても、今日は「本官」って一人称で喋ったり、注文を受けた後で敬礼したり、
慣れない挙動をしまくったせいでクタクタだ。
さっさと帰って何か食べて、フロに入って、泥のように寝ちまおう。
と、控え室の方に向かうと……
「遠山」
ほとんど個室ともいえる狭い第4控え室から、声が掛けられた。扉越しに。
「ジャンヌか？」
「そうだ。私だ。入れ」
「……服は着てるだろうな」

なぜか扉を開けようとしないジャンヌに一
「お前はバカか。着ているに決まっているだろう。だが……その服につ
ほしいのだ」
などと返してくるので、首を傾げながら控え室に入る。
中では――『アッシュホーム・カフェテリア』のフリフリでヒラヒラなメイドっぽいカッて、机に突っ伏していた銀髪の合間に見える耳チューシャの下、キラキラしたんだな。
なんか、真っ赤。お前は確か遅番だったろ、シフト」
「そうだ」
机に置いた腕の中から、伏せたままジャンヌが返してくる。
「じゃあそろそろ出番だろ」
「それは分かっている」
「じゃあ行けよ。お前、気に入ってるんだろ、その服」
俺はこの間、偶然見てしまったが……
なんせジャンヌは、そのウェイトレスの服を自前で持ってたぐらいだからな。

「そ、そうだ。だが、やっぱり……人前に出ると思ったら、恥ずかしくなったのだ」
「しょうがないだろ。そういうイベントなんだから。俺だって恥ずかしかったぞ」
「お前と一緒にするなっ！」
がば、と顔を上げたジャンヌは、顔もアリア並に真っ赤にしてる。
100%の白人だから、赤というよりピンクだけどな。
ぐぬぬぬぅ、と、何やら行き場のない負の感情を俺に向けるような顔をするので、冷凍グラタンにされたくなかった俺は――
「分かった、分かった。で、何で俺を控え室に引き入れたんだ。お前は」
宥(なだ)めるように、相手をしてやる。
「感想を言え。私のこの姿を、お前は先日も見ただろう。どう思う」
「そん時も言っただろ。かわいいって。心配するな」
「本当か？」
「本当だって。警官はウソをつかない」
「もう一度言え」
「何をだよ」
「かわいいと言え。私は自信がないのだ。わ、私は……こういう衣装を、特にこれは、持っている洋服の中でも一番のお気に入りだ。ウェイト

レスの仕事だったのだ。だが、これは…わ、私のような長身の女が着て、本当は一度やってみたかなんとなく分出たら、笑われる。バカにされて、石打ちの刑にされるジャンヌは、一種の内弁慶ってやつなんだ」1人ではあれだけ堂々とファッションショ恥ずかしがってないし。

「そんな事はない。自信を持て。かわいいから。ほら、行けよ」

「感情が籠もってないッ！」

立ち上がって、ジャンヌは袖を振り下ろすジ面倒なヤツだなぁ。コイツも。

俺がゲンナリすると、ジャンヌは縋るようにヒラヒラのスカートが、俺に押しつけられ「実は……テニス部の後輩たちが、私を見に来るらしいのだ。どうしたらいい」

あぁ……。

そういう事か。

――武偵高に違いない」

上級生は下級生に対して厳しめに接し、多少は見栄も張らなければならないのだ。

少々、いや、かなり封建的な校風がある。

そうやって、上下関係をハッキリさせる。これは捜査や戦闘をスムーズに進めるために必要なことである。

だからジャンヌは、後輩たちに笑われることを特に怖れているのだろう。

「誰もお前を笑ったりしない。万一笑う1年がいたら、シメるの手伝ってやるから。ほら、あと15分ぐらいだぞ――」

と、俺が腕時計を見ると――

ジャンヌも、手首の内側につけた宝石つきのキラキラ時計を見た。

「う、うう、もうそんな時間か」

「そんなに慌てるとやるとそんな時間か」

ぱし、ぱし、と肩を叩いて気合いを入れてやるよ。大丈夫だって。本官が保証する。行け」

ぱき、ぱき、と周囲に小さな氷の結晶が飛ぶ。

なんだこれ。プチ・ダイヤモンドダストかよ。

感情が昂ぶると出るシステムなんだな。一つ発見だ。

「――遠山っ。お前はこの服をクジ引きで当てた責任者だ。もし笑われたら、人間樹氷にしてやるからな」

などと言いつつ、ジャンヌは自分からは部屋を出ようとしない。

「逆ギレすんな。ジャンヌは自分からは部屋を出ようとしない。人間樹氷にしてやるからな」

「人間の樹氷だ。こんな簡単な言葉も分からないのか。お前はバカなのか」
「……バカだった、お前に聞いた俺が。さあ行くぞ。ほら、ついてこい（フォローミー）だ」
と、俺がジャンヌを何とか控え室から引っ張り出すと――
「ジャンヌ先輩！」「ジャンヌさんー！」「お待ちしてました！」
ドアの前で、いきなり4～5人の1年女子と出くわした。
どうやらジャンヌの声を聞きつけて集まってきた、テニス部の後輩たちらしい。
「はう」
心の準備が出来なかったらしく、ジャンヌは自ら人間樹氷みたいに固まる。
俺巡査が『そこの1年、もし笑ったら逮捕するぞ』という目を向けるより早く――
女子たちは揃（そろ）って浮かべまくった。
「「きゃー！　かわいいー！」」
目にキラキラ星を！
キャー！　キャー！
カワイイー！　カワイイーイーイー！
大喜びの女子たちは、俺をまるっきり無視でウェイトレス姿のジャンヌを取り囲む。
「か、か、かわいいッ？」
わなわなとバラ色の唇を震（ふる）わせるジャンヌに……

女子たちはまた黄色い声で、カワイイ・コールを浴びせまくってる。

「い、いや、これはだな――クジ引きで仕方なく、やむを得ず着てきた

似合わない事は分かっていて、その上でだな……っ！」

しどろもどろに言うジャンヌを、後輩たちは「そんなことありません！

「ジャンヌ先輩には――可愛い！」「先輩は女神様です！　可愛い！」

などと賞賛しまくってるぞ。

「う……うう……！」

ジャンヌは――恥ずかしさに、目を泳がせまくっている。

その反応にも、1年女子たちはカワイイ・コールだ。

ていうか、お前ら……「カワイイ」以外の単語を知らんのか。

キャーキャールとジャンヌを窓際で取り囲む1年たちを見た俺は――

（それにしても、凄い慕われっぷりだな……）

内心、少し感心してしまう。

白雪もそうだが、後輩に慕われる人間性というのはある。これはいずれ部下を持つかもしれない武偵にとっては割と重要なことで、2年以上は『リーダーシップ・上官適性』として学年末に採点もされるのだが……ジャンヌはきっと、満点だろうな。

冷徹そうに見えて、後輩に威張ったり無理難題を押しつけたりは決してしないらしいし、男子にも女子にも受け入れられるタイプの美人だし、天然ボケな所はあるが物知りだし……同級生から見ても、頼れる存在だからな。

そういえば前に噂で聞いたが、ジャンヌの1年人気は女子テニス部を起点に、情報科・探偵科あたりまで勢力圏を広げているらしい。

一時期ワトソンに若干食われたらしいが、それもこの調子ならすぐ取り戻せるだろう。

（ジャンヌには何か、人を惹きつける力みたいなものがあるんだよな……）

なのかもしれんが……）

ちなみにアリアも強襲科で1年に尊敬されているが、それは能力的にではなく人格的にはそうでもない。アイツは割と、後輩に厳しいからな。

あと、理子。これは論外だ。アイツは後輩と同レベルになって遊んでるからな。

レキも説明不要で論外の1人である。

今後はジャンヌ・白雪を教師、それ以外を反面教師として観察しよう。

俺、人徳ないからな。後輩なんか、風魔ぐらいしか知ってるヤツがいないし。

（とりあえず、まあ……人間樹氷とやらにはならずに済んだみたいだな）

と、安堵の息をついていると――

トラブル発生だ。

後輩たちにチヤホヤされ、様々な感情でいっぱいいっぱいになったらしいジャンヌが、

「……！」

フリフリのスカートを翻して、逃げ出したぞ。

窓から。

「お、おいっ……！」

ここは1階だからケガはしないだろうが、脱走者（無断欠勤者）が出ると『変装食堂』自体が大幅減点になってしまう。

それで教務科にイベント不成功と判断されたら、口から内臓が出るまでスラムをやられるぞ。連帯責任で全員。もちろん俺も。

窓に飛びついてないから、ジャンヌは火の出そうな顔を両手で押さえ、前をちゃんと見れば、薬草畑のカカシにぶつかって蘭豹にボディーブローしてる。

俺は非常ドアから中庭に出て、ジャンヌの後を追う。

「センパーイ！　どちらへー!?」「写真撮らせて下さい！」「変装食堂、枠に殺到する1年たちを押し退けて中庭を走っていく。

などと集団で窓

内臓がかかってると思うと、人間、通常より追跡能力がアップするもので——

ジャンヌが逃げ込んだ場所は、すぐ発見できた。

というか、中庭付近の物置小屋の前にリボンつきのシューズが片方落ちてたのだ。お前はシンデレラか。

俺は犯人を追い詰めた警官そのものの動作で、そー……っと木の壁に顔を寄せ、

「……」

銀氷の魔女との対決も辞さない覚悟で（なにせこっちは内臓がかかってる）木の割れ目から中を窺う。

ここからだと横向きに見えるジャンヌは、木の椅子に座り――

「ふ、ふふふ……」

火照った左右の頬に手をあて、今まで見せた事のないような愛らしい顔をしていた。

（……やっぱり、嬉しかったのか）

年相応の女の子らしい、見ただけでこっちも幸せになってしまうような――笑顔を。

元がハリウッド女優みたいに引き締まった顔立ちをしてるから、新鮮だな。ジャンヌのああいう表情は。

彼女の素顔を、初めて見たような気さえするよ。

「……かわいい、か……！　ウェイトレスの私は、かわいい、か……！」

幸せを噛みしめるように伏せた顔に、銀髪のレースをかけたジャンヌさくバタ足させてる。

座ったまま、伸ばした足をパタパタ……小

（……）

なんか、これ以上ノゾキ見するのも悪い気がしてきたな。

あの衣装で強調された胸がバタ足に連動して揺れる光景に、危険性も感じるし。

（まあ、逃亡の恐れは無さそうだな……）

と、俺（おれ）は苦笑いしながら物置に背を向ける。

ワトソンもそうだったが……

男勝りの女騎士ジャンヌ・ダルクの未裔（まつえい）として育てられたせいか、ジャンヌにはどこか

『自分は女らしくない』と思い込んでるフシがあった。

だが、やっぱり女子は女子だ。

本当は女の子らしい自分の一面も表に出したくて、悩んでいたんだろう。

ジャンヌはこの変装食堂（リストランテ・マスケ）でそれを実現して、自分の思い込みが間違っていたことを認識できたわけだ。

だから今後は少しずつ、今まで隠していた面も表に出していけるかもしれないな。

学校って物は……くだらないイベントをやらせてるようで、実は生徒が成長する役にも立ってるんだな。少なくとも、その機会を与えてくれているわけだ。

（――まあ、一般校の方が……そういう機会も多いんだろうけどな）

腕時計を見れば、ジャンヌのシフトまではまだ7、8分ある。

ジャンヌ。
そこでもう少し喜びを噛みしめたら、ちゃんと念願のウェイトレスと
――しっかり頑張れよ？
武偵高に来たての頃は、ドリンクバーすら知らなかったんだから。お
ようやく武偵高の男子制服に着替えた俺は、夕焼けの中を帰る。
文化祭の期間中はバスが運行しないので、徒歩で寮へ向かう途中……
「遠山の」
戦闘訓練用の廃墟ビルから、声がかけられた。
ここは本当に戦場みたいで見た目が悪いので、今はビニールシートで
禁止になっているのだが……
今の声。聞き覚えがあるぞ。
キツネ耳少女で、実際キツネの妖怪だか何だかの――『師団』の味方
「玉藻。帰ってきたのか。よりによってこんな日に」
と、青いシートをめくって廃ビルに入ると、隠され、立ち入り
ビルの1階は、弾痕だらけのコンクリートが剥き出しになっていた。
割れた窓から吹き込む風で、細かいホコリが立っているな。
玉藻だ。

そのホコリをあちこちから差し込む光が照らして、サーチライトみたいになってる。

「――今日は友引じゃからの。仲間を増やすには良い日柄じゃ」

玉藻の声がする奥の方へ、俺はガラス片や薬莢を踏みながら向かう。

「お前、今日はテレビ局も来てるんだぞ。捕まって『珍獣ハンター』で放送されても知らないからな」

などと言いつつ見上げると、高い所に横向きに渡された鉄骨の上に……武偵高のミニサイズ・セーラー服を着た、玉藻が。

「儂とて、民に興味を引っ張られたりはしとうないわ。じゃから、ほれ。ここの生徒に見えるような本位で耳を着てきたぞ」

光の筋の中で言うベビーキャップみたいな帽子をかぶってて、帽子にキツネの耳型の頭にフリルつきの突起が上に思いっきり突き出ている。

それは、それでいいのか？

「ときに遠山の。ヒルダを討ったようじゃの。でかした」

ぴょーん、と玉藻が鉄骨から動物的な身のこなしで降りてくる。

その動作で見えたが、シッポはスカートの中にちゃんとあった。

やっぱり、消すことはできないんだな。言うと怒るから言わないでおくけどな。

「よく知ってるな。誰に聞いた」
「リバティー・メイソンの長からじゃ。『師団』への帰属を連絡すると共に、鬼払結界に俘虜――ヒルダが入っても呪殺しないで欲しいと要請があってな」
リバティー・メイソン……
なるほど。ヒルダを倒してすぐにワトソンが連絡を入れて、それが伝わったのか。
などと納得している俺に近づいた玉藻は……ひょい。両手を差し出してくる。
「……なんだそれ。水飴なら無いぞ」
「違うわい。抱っこせい」
「抱っこって……お前、赤ちゃんじゃねーんだから」
「神輿が無いから抱っこでガマンしてやると言っておるのじゃ。ありがたく思わんか！」
抱っこして、案内せい。バチが当たっても良いのか？　んん？」
玉藻は背伸びして、べちべち！　と俺の鼻を叩いてくるし……
一応どうやら、こいつは神様の一種らしいしな。
バチが当たってこれ以上運が悪くなったら、命に関わる。抱っこぐらいしてやるか。
だが、よいしょッ……と両脇を持ち上げるものの……
「お、お前、抱っこするには重いぞ。20キロ以上あるだろッ……何キロだよッ……」
「体重を聞くか！　それは女神、いや、全ての女に聞いてはならん数値じゃぞ！」

「逆？　ふーむ、遠山侍は昔から時々分からん事を言うのう」
分からん事を言うのは、そっちだろうに。
ご先祖様もきっと困らされたんだろうなぁ。なんか、コイツと縁があるみたいだし。
などと、溜息混じりに玉藻をあやしていると……
「――さっき装備科の安藤が近くを歩いてたよっ。やばいやばい」
「見つかったら取られちゃうよ、アイツ甘いモノ見ると目の色変わるから」
「こっちこっち。ここで隠れて食べよっ……あっ……キンジ……！」
廃墟の入口側から、女子の声が聞こえてきた。
何かの景品で当たったと思われる巨大なクレープを持った3人組の女子が――
玉藻を抱っこしたまま振り向いた俺に、あんぐりと口を開けている。
「……た、たらしが……！　ついに……！」
「こんな所に、そんなちっちゃな女の子を連れ込んで……！」
「誘拐だ！　教務科に通報しなきゃ！　児童相談所に通報しなきゃ！」
ちょっ……！
運、ちっとも良くなってねーじゃねーかッ。神様を抱っこしたのに。
よく見れば全員うちのクラスの生徒だった3人は「超やばくね!?」などと言いながら、
スカートのポケットから携帯を出している。

はしっ、と玉藻は俺の首に手を回してしがみついてくる。
「じゃあせめて、そのボヤく俺の胴を、赤ちゃんぐらいのサイズから、玉藻はさらに両脚で挟んでくる。
「ほれ、ほれ、なんとかせい。神を抱くと運が良くなるぞ。ふはははっ」
楽しげに体をグラインドさせる玉藻の尻を支えて、ぐいっ、と引っ張り上げると……
なんとか、できた。神様抱っこ。
「こ、これで歩き回るのはしんどいぞ」
と、目の前にある玉藻の顔を見ると――
嬉しそうな玉藻の顔は、あどけなくて、無邪気で……
くりっくりのお目々が至近距離から見上げてくる様は、なんというか
立てられちまうな。
キツネ耳とシッポさえなければ、誘拐とかされまくりそうな外見だよ
「なんじゃ。お前、まじまじと顔を見てしまっていた俺に、玉藻が笑ってくる。
「バカ言うな。歳が離れ過ぎだ」
「791歳差ぐらい構わんぞ。化生の世界では無い事ではない」
「そうじゃねーよ。逆だ、逆」

「ち、違うッ……！」
俺は大慌てで玉藻を下ろし、言い訳を考えるが……
通報&武偵三倍刑が掛かってると思うと、
「こッ、これはその……迷子だっ！」
イザとなったら銃撃戦も辞さない覚悟で、
「迷子？」
キョトン、と玉藻がこっちを見上げてくる。
「そうだろ迷子！　迷子！」
と叫ぶ俺の必死感に気づいたらしい玉藻は、
「そ、そーじゃ……そーなのー……うぇえぇえぇん」
さすがに空気を読んだらしく、話を合わせてくれたが……
こ、この芝居が、キツネのくせにサル芝居だ。ヘタすぎる。
女子たちは、
「迷子……？」
「っぽくない！」
「なんか手なづけた後ってカンジがする！」
俺による少女誘拐説をぐらつかせない。

「だいたい、武偵高のインターンの制服着てるじゃん！　迷子になるわけないぐ。
アイツ、探偵科（インケスタ）の生徒だぞ。見覚えがある。
チクショウ、こんな所で推理力を発揮させやがって。
「そ、それは……迷子だったんだが、俺の所に届けられてきたんだ。俺のお兄ちゃん。会いたかったよー」」
はしっ、と玉藻も俺の腰にしがみついてくる。
「――キンジの従妹（いとこ）がこんなに可愛（かわい）いわけがない！」
「顔は関係ねーだろっ！　ほ、ほら行くぞ。よかったな、お兄ちゃんに会えて」
と、俺もサル芝居を打ちながら……
「うん行く！　お兄ちゃん、もう迷子にならないようにするね！　わーい」
などとスキップする玉藻の手を引きつつ、なんとか、廃墟（はいきょ）からの脱出に成功した。
その様子に女子たちは一応納得したのか、背後から聞こえる声は……
「そうだったのかぁ……あっ、ねえ、あの子のネコミミ帽子かわいくなかった？」
「ちょっと動いたよね」
「何か動力入ってるんだよ」
などと、玉藻のネコ耳帽子の方を話題にしている。

まあ、これはネコ耳じゃなくてキツネ耳なんだけどな。しかも、本物（リアル）の。
と、冷や汗を拭（ぬぐ）いつつ廃墟（はいきょ）の庭に出た俺（おれ）は……
「玉藻（たまも）。お前、案内ならどこへでもしてやるから……その姿は、やめてくれないか」
ガックリと膝（ひざ）に手を突きつつ、玉藻に頼む。
女児を連れ歩く高2なんか、あいつらにでもお前の体力では、儂（わし）を運びづらそうじゃったの」
「ふむ……たしかにお前の体力では、儂を運びづらそうじゃったの」
「じゃあやらせんなよ……」
「では、こうしよう」
そう言った玉藻の足元から、ぽんっ、と白い煙が上がる。
「……!?」
見れば……
玉藻の姿が消えて、足元に和風の毬（まり）が落ちていた。
そうだ。コイツはこれにもなれたんだ。
「ほれ。運べ」
毬から声がするので、俺は……それを拾う。軽い。普通の毬の重さだ。
「最初っからこうしとけよ……ていうか玉藻。お前これ、どうやってんだよ」
「虚物変化（こものへんげ）の術式か。お前に理解できるかのうー？」

バカにするような声で前置きした毬は、
「まず――『芥子虚粉(ケシノウツロコ)』といっての、この世の空間には極めて強い重力を持つ点がある。この点は極々微細にして、どこにでも存在しており、どれとどれもが繋(つな)がっておるのじゃ。その点と点に『天細狐雷(アマノココラ)』で引力と斥力(せきりょく)を与えて繋げて筒にし、『物化霧(モノノケム)』で微細にした我が身を少しずつ通すのじゃ。筒の先には『虚(ウツロ)』という空間があり、そこはここでもある。そこに置いた物質と、童女の姿に化(ば)けた儂を入れ替えたのが――その毬じゃ。この手順は全(すべ)て『印(イン)』――一つ念じる事で、マバタキする程の間に実行されるようにしてある」
「すまん、全く理解できなかった」
「お主らの言葉で言えば、ワームホールの利用じゃよ」
「……それも分からん」
「勉強が足りぬぞ、パンツは知らんくせにワームホールは知ってるのかよ。して、その毬が壊されると儂はここにおるが、ここにはおらぬ。遠山(とおやま)の。つまり今の儂は『芥子虚粉(ケシノウツロコ)』を見失い――『虚(ウツロ)』から還(かえ)ってこれなくなる。なので、その毬が今の儂じゃ。ゆめゆめ、丁寧に扱うのじゃぞ」
要するに、化けた……ってことでいいか。もう。
（しかし、凄(すご)いな。ヒルダの技といい、コイツの技といい……）
コイツら人外の種族は大昔からいたくせに、その技術は最先端の科学をも超えている。

詳しくはないが、ワームホールなんか人類はまだその『存在の可能性』を提示できたに過ぎない。ヒルダの荷電粒子だって、科学者たちがウンウン唸りながら研究所で実験してるところだ。それを、もう実用してるってのか。

俺がこれから戦う『眷属』共が、そんなバケモノだらけだとしたら、そんなの、１０年先の未来人と戦うようなものだぞ。

（だが……）

と、俺は授業では習った話を思い出す。

――戦闘。

この一点に於いては、人類は英知の粋を集めて能力を突出させてきた。人間は戦争ばかりしてきたからな。

自慢じゃないが、他の技術よりずっと先を行ってるのだ。

その技術の進歩は、他の技術よりずっと先を行ってるのだ。

アリアのガバメントだって、１９１１年――約１００年前に出来ている。

抜本的な改良を加える事なく今なお使っている。

つまり人類は、１００年先にも通じる戦闘技術を日々作り続けている。

俺のヒステリアモードが、何年先の相手にまで通じるか――

やらざるを得ない今、試してやるさ。

玉藻が「白雪の所へ連れていけ」と言うので電話してみたところ……
白雪は変装食堂の仕事が終わってから、超能力捜査研究科・略称SSRに移動していた。
どうやら自習していたらしい。さすが優等生だよ。
「……ニガテなんだよな、ここ……」
SSR棟に着いた俺は、その外観にもうゲンナリしてくる。
まず、門には朱色の鳥居。それがビルの入口までトンネルみたいに連なってる。
入口付近を見回すと、右は狛犬だが左は小さなスフィンクス。
その周囲にはトーテムポールや地蔵、モアイや燈籠なんかが所狭しと置いてある。
頭上には注連縄が掛かってるが、手前に吊されてるのは大鈴じゃなくてチャペルにあるようなベル……
――『無用の者立ち入りを禁ず　超能力捜査研究科』――
という立て看板があるが、用があっても来たくなかったぜ。こんなところは超能力捜査研究科の巣窟。俺の一番ニガテな世界だからな。
「何をしかめっ面してる。良い雰囲気ではないか」
玉藻ボールが言ってくるので、
「神様同士ケンカし出しそうだろ、これ見たら。お前も神の一種だろ？　冒涜だとか思わないのか」

「そんな時代でもない。どの神も真に目指すところは同じじゃ。それに人に説いておいて神同士ケンカしておっては、示しがつかんしな」

「そういうもんか……？」

まあ、本人（カミサマ）がそう言ってるんだからいいか。

と、俺（おれ）はステンドグラスが填（は）められたドアを開け、ＳＳＲに入る。

このロビーがまた、冷や汗を誘う。

生徒達がお祈りできるようになっている広いホールにはイスやザブトンが点在しており、周囲の壁はドーム型の天井に至るまで占今東西の宗教画で埋め尽くされている。

やっぱり……俺には分からん世界だ。

どういう神経してんだ、ＳＳＲの連中は。パイプオルガンの上に木魚置いてあるし。

アステカの暦石（カレンダー）の横に張られた『ケンカしたら射殺　教務科（マスターズ）より』のポスターだけが、俺に理解できる唯一のオブジェクトだよ。

「……だからロズウェル事件がね……」

「……類感魔術で神秘的な関連性を……」

「……おいしいなー、からあげクンＲｅｄ……」

などと、ホールの一角で語り合う生徒たちの声が聞こえてきた。

そいつらの服もバラバラ。天狗（てんぐ）みたいな格好で、銃のかわりに弓と破魔矢を背負ってる

女子。ターバンをかぶり、知恵の輪みたいなヨガのポーズのまま話すのは、留学生だろう。経文を手に唐揚げを食ってるヤツは、袈裟を着込んでいる。

「ほれ見い。みな仲良くしてるではないか」

玉藻毬（たまもまり）は表面からシッポの先端をちょっと出して、生徒たちを示す。

溜息（ためいき）をつくしかない俺は、そんな玉藻を手にトボトボ階段を上がっていくのだった。

SSRの生徒は人数も少ないので、2階以上にそれぞれの個室がある。

その5階、『星伽白雪（ほとぎしらゆき）』という絵馬型のプレートが掛かった部屋をノックすると……

「は、はーい！」

白雪の声に続き、とたとた、と足音がして……ドアのロックが解錠される。

ドアを開けた先には、五芒星（ごぼうせい）に陣笠（じんがさ）――星伽の本家（ほんけ）の家紋が描かれたフスマがあった。

それを更（さら）に開けると――

「ようこそおいで下さいました。キンちゃん……」

巫女装束（みこしょうぞく）の白雪が、折り目正しく三つ指をついて出迎えてくれた。

奥にある三面鏡が微妙に半開きになってるが、今の今まで化粧直ししてたのか。

（別に、俺なんかを迎えるのに準備しなくてもいいのに……）

俺がちょっと渋い顔をすると、

「あっ……巫女の服、キンちゃん……あんまり好きじゃなかったよね。この服だから、私、白雪はすぐ涙目になって、フスマを閉めようとする。

「いいから。ちょっと待ってください……！　すぐ着替えるからね。ちょっと待ってください」

と、俺はフスマを押さえつつ靴を脱いで——部屋は十畳敷の和室で、漆塗りの棚にはダルマが6つ並べられた竹筒には、妹たちが作ったらしい大和撫子の部屋というカンジの室内に上がる。

「星伽の白雪。大きくなったの」

俺が持ってきた毬が、手から床に逃げ出し……ぽんっ。

「きゃっ！」

白煙を上げて、もの1秒で玉藻の姿に戻った。

短い声を上げて驚いた白雪は、ニコニコ顔の玉藻を見て——

「た、たま、たまたま、玉藻様！」

びょん！

畳の上で飛び上がりつつ、着地と同時に土下座した。

巫女服の裾を広げ、ばふぅー。

「ご無沙汰しております！　いらっしゃるとは露知らず、何の準備もせず……！　申し訳御座いませんっ！」

上司が抜き打ち訪問してきたヒラ社員みたいに焦りまくる白雪に……

風車を一つ取った玉藻が、歩み寄る。

「謝り癖は変わっておらんのう。ほれ、面を上げい」

玉藻は白雪の膝と胸の間に潜り込むようにして、上半身を上げさせたぞ。エロギツネめ。

あ。今、思いっきり両胸を掴んで持ち上げたぞ。エロギツネめ。

そして……玉藻は後ろから抱っこされるような姿勢になって、膝の上に座る。

「玉藻様も、昔とお変わりなく……」

「共学でもなんとか通えてるようじゃのう、白雪。琴は上達したか？」

ようになったか？」

「そ……そんな。子供の頃の話をされないで下さい……」

などとお互いほんわか笑顔で話し出した所を見ると……

やっぱり、元から知り合いだったらしいな。この2人。

と、俺は座卓のそばにあぐらをかき……白雪が用意していた緑茶を飲む。

「それにしても佳い事じゃの、遠山侍と星伽巫女が同い年とは」

と、玉藻は俺を指し――

「どうじゃ白雪。もうこいつの子供を産んだか？」

ぶっ！

俺は茶を思いっきり吹いてしまう。

『昨日の晩飯なんだった？』ぐらいの気軽さで言われた白雪は、へにゃへにゃ、とタコみたいに軟体化しつつ……

「そ、そんな、わ、私は、いつでも、どうぞ……」

と、玉藻の耳の間から……

なぜか俺の方に言ってくる。

言葉に詰まった俺と目が合った白雪は、ばふ、と玉藻の頭に顔を埋めて

「……どうしようあなた。娘が、弟か妹が欲しいって……きゃあ……」

などと畳に指で『の』の字を書きながらボソボソ呟いてる。

俺も……これにはさすがに赤くなりつつ、

「し、白雪。ほらチンチンカンな話に一々反応すんな」

「はっはい！　パパ、がんばってね！　何人にしましょうか！」

「ち、血走った目を向けるな。ていうか誰がいえ、何十人にしましょうか！」

「うむ」

俺がイラッとして言うと、しっぽを立てた玉藻はハイハイして座卓の上に来た。

白雪は思いっきり俺の隣に正座してきて、避けてもついてくるので俺も諦め、2人して玉藻に対面する形になる。

それから玉藻は……

まず、白雪に『極東戦役』が始まった話をした。

そして俺がバスカービルのリーダーとして、それに巻き込まれた事も。

さらにヒルダとの戦いもあり、それに勝利した話もしているが……

白雪はさすが武装巫女だけあって、全てを落ち着いた表情で聞いてるな。

所々俺には分からない専門用語も出るが、それも全て理解できてるみたいだ。

「……鬼払結界は都の湾岸、ほぼ全域に張ったでの。鬼の類が中に入れば式神が儂に報せ、儂の印一つで攻めることができる」

「となると、次は打って出る道も考えられますね」

などと、参戦前提で前向きな話までするので……

「おい白雪、お前……怖くないのか。こんな戦いに巻き込まれて」

「ううん。『戦役』の事は星伽で聞いたことがあったし、本当は……数年内にそれが来ることも占いで分かってたから」

「随分前向きだな。ヒルダとの戦いで分かったが、この戦いは厳しそうだぞ」

覚悟を問うように言うと、白雪は――

……微笑んだ。

とても穏やかな、いつもの白雪の笑顔で。

「星伽の巫女は、守護り巫女。私たちはずっと、何かを守って戦ってきたの。戦争、それと何度かあった『戦役』からも、ずっと、ずっと……それを私たちもするだけの事だから。それに――」

そこで勇ましい表情になった白雪は……

一瞬、既に決まっていた覚悟を改めて決めるように言いよどんでから――

「キンちゃんに降りかかる火の粉は、私が焼き尽くす。たとえそれが、誰であっても」

腰に差したイロカネアヤメの朱鞘に、そっと触れた。

火の粉を焼き尽くす、ってのが、イマイチ矛盾してるが……

まあ……いつも通り、味方してくれるんだな。白雪は。

「ところで玉藻、この際だから聞くが……戦役ってのは、そもそも何を目的にした戦いなんだ。ジャンヌは、『求め、奪い合う』とか言ってたが……」

俺が水を向けると、玉藻は両手で持っていた茶碗を茶請けに置き、

「その言葉の通りじゃ。求める物の奪い合い、力の再分配。それが戦役の本義じゃよ」

「……何を奪い合ってるんだ、お前たちは」

「それは表の戦と同じで、時代によって異なる。古くは宝剣や聖杯などを取り合ったもの

じゃが、今代では色金――これが一番の宝物じゃな。今まではさほど重視されておらんかったが、希代の天才・シャーロックによって、力の使い方が次々に解明されたでの」

シャーロックはイ・ウーで、イロカネや眷属はこぞって欲しがってたな。

そういえばアイツはイ・ウーで、イロカネや眷属はこぞって欲しがってたな。

それを、師団は時代によって異なる、か……（奪い合うものは時代によって異なるのか。

それは何となく分かるな。

たとえば表の世界でも、ウラン鉱山なんかは昔は誰も目を付けなかったって、みんながそれを欲しがるようになって……

利用法が分かるようになって……

それで、戦争だろう。

「宝物だけではない。優秀な兵も奪い合いの対象じゃ。よって、戦役ってワケか。

兵を自軍に入れた者も、殺されないために敵方に寝返って良いことになっておる。負けた者は敵の配下にはOKとなってたし、ワトソンも『負けるとか言ってた。

「ああ……」

そうやって考えると、割とシステムがしっかりしてるな。『戦役』は。

ジャンヌが言っていたルールでも『裏切り』

「じゃあ……どうなったら終了するんだ。戦役は」
「全滅か、降伏じゃ。師団か眷属のどちらかで兵が尽きれば全滅。兵が降伏する道もある。条件付きの降伏も認められるぞ」
その辺は……表世界の戦争と一緒だな。
チラ、と白雪を見ると、その辺は既に知っていたような顔をしている。
「それとな白雪、ちと問題が起きておる」
正座を少し直しつつ、玉藻が白雪に向き直り――
「――アリアの『緋殻七星』が破られ、殻金を眷属に取られた」
「……！」
この話で――
初めて、白雪が驚いた顔になった。
「さっきワトソンと会うた時、和合の証も兼ねてこれを貰ったがの。師団側にある殻金は、これを入れて3つだけじゃ」
と、玉藻が懐からルビーのような宝石――緋弾に被されていた殻金の一つが結晶化した物だ――を出して示す。
すると白雪は正座したまま少し後ろに下がり、深々と土下座した。
「――お詫び申し上げます。かつての星伽巫女が、殻金をもっと固めておけば……」

「星伽のせいではない。お前たちは少ない人数でよくやっておるよ」

「しかし、先般は私と一心同体であるべき――この色金殺女を、パトラにせいで、緋弾の……」

白雪がそこまで話したところで、

――ぎろり――

と、玉藻が今までにない厳しい目をした。

「言うでない、白雪。ここには遠山もおる。星伽と遠山は、御役を分掌せよ」

「……な、何だよお前ら。イロカネアヤメが何なんだ」

俺が割り込むと、玉藻は俺にもそのツリ目を向けてくる。

「知るな――緋緋色金は、人の心に関わる。それも、恋心――極めて御しがたい部分にな。何もかもを知ってしまえば、お前も心を乱されるであろう。人は、心を、御せんのだ」

「……？」

「古くより色金に関わる星伽巫女と……遠山侍が関係してきたのは、遠山家が心を以て戦う一族だからじゃ。その意味を考えろ。お主も、星伽に話したくない事はあろう？」

玉藻は、今一つ――

緋緋色金は『恋』と『戦争』を好むハズなのに、恋心の方しか言わなかった。

（星伽に話したくない事……）

ヒステリアモードの事を示唆してるな。これは多分。
遠山家に代々伝わるこの力のことを、コイツは知ってるらしい。
（確かにヒステリアモードも一応……異性への感情絡みの能力だ。だいうんだ？）
……なんだか、少し怪しい空気が流れているものの……
超常現象＋恋愛話となると、俺が最もニガテとする分野の2枚重ねでおくか。
ここで玉藻にヒステリアモードの話をされても困るし、まあ、黙っ
「――この一件を収めるには、遠山と星伽の結びつきが大切じゃ。2人とも、仲良くするのじゃぞ」
ずず、と茶を飲んだ玉藻は――「はい！」と大声で応える白雪に満足げな顔をし……
「そして、怖れるでない。何が起きようと儂がついておる」
ニッコリと、少し固い笑顔を俺たちに向けるのだった。
（ついておる、って……）
玉藻お前、俺たちがヒルダと戦った時、いなかったろうが。
まあ結界を広げる仕事で忙しかったのはあるんだろうけどさ。
「アリアには近く、儂が会って話す。殻金も戻さねばならんしな。その折には緋緋神化のため診断しておこう」

「……アリアは大丈夫なのか？」

少し心配になった俺が聞くと――

「しばらくは大丈夫と言ったじゃろう。案ずるでない。眷属を討ち、殻金を皆取り返せばそう返されてできない状態だ。

まあ……俺としては専門家に口出しや」

大丈夫かどうかも分からないのに、やきもきするのも良くないか。

見た所アリア自身は元気そうだから、心配するだけ杞憂なのかもしれない。

「……」

ふと気づくと、アリアの話をする俺と玉藻に――

白雪は、意図的に口を挟まないでいるような気配があった。

玉藻もなぜか、白雪と目を合わせない。

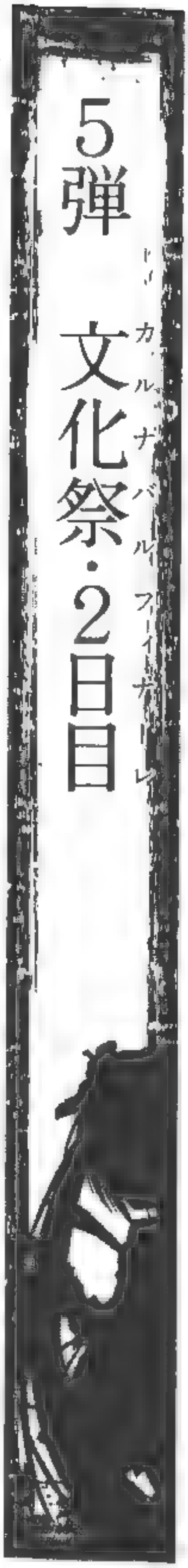
2人は何か予感していて、それを言わずにいるようなムードだ。

それに眉を寄せた俺の脳裏を――

かつて玉藻が語った昔話が、なぜか、よぎるのだった。

――七百年ほどの昔、緋緋神なった人間もおる。

その者は妖怪変化となり、戦を起こし……
ついには、遠山侍と星伽巫女に打ち殺されたのじゃ――



5弾 文化祭・2日目

玉藻と白雪をSSRに置いて、寮の自室に帰ると――クチナシの匂いがしていた。

アリアがいるんだな。

廊下を渡っていくと……アリアはバスルームの脱衣所のカーテンを閉じ、ドライヤーの音を鳴らしていた。

どうやら帰ってきてから、シャワーを浴びたらしい。

「帰ったぞ」

もうアリアがここに住み着いているのは既成事実なので、そう言うと……

「えっ、あ、キンジ？　ちょ、ちょっと。そこ開けたら射殺するわよッ。あたし今、バスタオルだからっ」

……言わなくていいって。

誰が開けるかよ。そんな裸の女子と武器が詰まったパンドラの筐なんか。

だが……こういう状況で俺が帰ってきた場合、今までのアリアはいきなり威嚇射撃からの入るところだ。今は、言葉だけだったな。

（やっぱり……なんか少し、アリアの俺に対する態度が軟化してないか？　最近）

いやまあ、それで有難い事なんだが。
「キンジ」
「なんだよ」
「今日は疲れたから休むとして……あんた、明日どうするの。もう仕事ないでしょ」
「別に。文化祭を適当に見て回るよ」
「あたしも明日は、仕事ない時間帯があるのよね。午前中一」
「じゃあ文化祭でも見て回れよ」
「……」
……あれ？
なんか、黙っちまったな。アリア。
「……なぜ黙る」
「えっ、だから……あたしもヒマなの。午前中。午後からは用事があるけど」
今度は、同じことを二度言った。
「……どうしようかなあ、明日の午前中」
わざとらしく考えるような声を出しつつ、
そして、シャッ。服を着てるらしい。
「どう、しよう、かしら？」

やばい……ちょっと、イラッとした声になった。
ここは、何か提案してやらんと撃たれるぞ。
アリアはカーテン越しにでも弾を命中させてくるからな。
「――見たい所を見て回れよ。武藤の妹がタコ焼き屋やってて、超売れてるらしいぞ」
と、オススメスポットまで丁寧に教えてやったのに……
「……アンタって……ほんと、小学生レベルの会話能力しかないのねッ」
しゃー、とカーテンを開けて出て来たセーラー服のアリアは、こっちを睨み上げてる。
「な、何が言いたいんだよ」
自分だって小学生レベルだろ。身長とか。
「だからぁ、あんた文化祭を見て回るんでしょ？　偶然、たまたま、図らずも、あたしも明日の午前中はフリーだから……一緒に回ってあげてもいいわよ？　ってことッ！」
最近ようやくアリア語の文法が分かってきた俺の翻訳によると――
これは、「一緒に回りなさい」という意味だな。
要するにオトモが欲しいって話ですか。はいはいやりますよ。ドレイですし。
「じゃあ……お願いする。一緒に見て回ってくれ」
ここも言い方が大事である。
アリア様に対しては『こっちからお願いする』形で言うのが生存のコツだ。

チラッとスカートの裾に見えたが、帯銃してるし。いつも通り。
「そう。そう。じゃあ、一緒に回ってあげるわ。しょうがないわねえ」
というアリアの声は、急に明るい。
表情も、ニヘラっとなった。発砲の気配も消散。
お見事。俺のアリア・コントロール。見事すぎて自分で自分を褒めたし。
「キンジは放っておくとすぐ問題を起こすし、迷子になったら大変。あげるから、感謝しなさい？　明日、朝9時から文化祭を見学。はいもくなるね。
入れちゃうからね」
……迷子って。
（自分の学校で迷子になるワケねーだろ。それに保護者は見た目的にもこっちの方だぜ）
などなど、色々言いたい事はあったが……
新調したパールピンクの携帯にスケジュールを入れるアリアは、実に楽しそうだ。
何やら「チャスキタキター」ってカンジのテキパキっぷりなのが引っかかるが……
アリアは普段、過酷な運命に苛まれているからな。その小さな体で。
こういう束の間の自由ぐらい、お供の者として付き合ってやろう。
その日は部屋に来ず、俺とアリアはテレビを見たりバスカービルの他のメンツ

をしたりしつつ……久々に、ノンビリと晩飯を食うことができた。

その夕食後、夜も更けた10時頃――

部屋の固定電話が鳴った。

出ると、玉藻だ。

アリアに代われというので……

俺はアリアを電話の前まで呼び出し、この電話に関係してる」

「アリア。先に言っておくが……俺は、マジメな目を向けた。

「……？」

「本当はもっと早く、お前に伝えるべき事だった。だがこの件に関して……正しく伝える事ができなさそうだった。だから専門家が話す」

「……専門家？」

「白雪やジャンヌの関係者だ。お前にとって重要な話もされるだろう。冷静に聞けよ」

と、受話器を渡すと――

アリアは「神崎アリアよ」と名乗ってから、話を聞き始めた。

黙ってそれを見ていると……アリアは少し驚いたような表情を何度かしたが、終始冷静で……通話は案外短く終わってしまった。

「……」

受話器を置いたアリアは……
赤紫色（カメリア）の目を閉じて、少し、考えるような仕草をしている。
「アリア……」
「――いいのよキンジ。キンジの判断は正しかったわ。これは――確かに分野じゃない」
首を小さく横に振ったアリアは、とこ、玄関の方へ向かうとこ。
「でも、何となく感付いてたことよ。ココなにか裏があるとは思ってたし」
「どこへ行くんだ」
「これから、玉藻っ子と2人で話すことになったわ。夜祭やってる体育館の上で会う。これからのこと」
キンジ……あたしたちは、明日話しましょ」
「あ、ああ」
玉藻は恐らく、一通り話すのだろう。極東戦役（Ｅ Ｗ）の事、殻金（カラガネ）の事、緋緋神（ヒヒガミ）とやらの事――
気をしっかり持てよ、アリア。
翌朝、8時半――

俺は昨日アリアと待ち合わせしていた、屋外プールに着いた。
『混雑を防ぐため、すぐ思いつきそうな待ち合わせ場所は使用不可』というわけでドレイの俺は、第2コースの飛び込み台に腰掛けて……
があったから、こんな所を待ち合わせ場所にしているんだが……
アリアは、まだ来てないな。
そもそも待ち合わせ時刻、9時だしな。
しかし夏休みに上野のお祭りへ行った際、アリアは俺に待ち合わせの30分前に来る事を厳命している。待たせたら風穴大火山だったかの風穴活火山だったか刑だ。
秋の青空の下、空っぽのプールを眺めて、アリアを待つ。
結局、昨日の夜アリアは帰って来なかったが……
夜中に電話したところ、玉藻と話してから裏取りのために白雪と会い——さらに別件で後輩の女子にも何か手伝わせる事があったらしく、女子寮の自室で寝ると言っていた。
——声は、いつものアリアだった。
いろいろ聞いたハズだが、特に混乱した様子もなかったな。
いや、本人が言っていた通り——ある程度は、予測できていたのかもな。直感で。
「キンジ」
思ったより随分と早く——アリアが現れた。

秋の日差しの下、とてとて歩いたアリアは……俺のそば、第1コースの上に座る。
「……？　いつものセーラー服が、新品みたいにパリッとしてるな。アイロンでも掛けたのか？　服」
「え。あ、うん」
「よく出来たな。お前昔、俺の部屋でアイロン使ってボヤ起こしたろ」
「……自分では出来なかったから、間宮にやってもらったの」
ああ、戦妹の間宮にやってもらったのか。上級生が下級生を一対一で育成する徒友という制度になるような事で、その関係を男子の場合は戦兄弟、女子の場合は戦姉妹と呼ぶ。これをまとめて徒友というからやこしい。
――武偵高には
これはつまりお互いが合意に基づいて師弟
「――でもキンジ。なんでこんなに早く来てたのよ」
「なんでこんなに……そのっ。き、聞いてるのか。お前も早いじゃねーか。9時からだぞ、文化祭」
「えっ、それは……赤くなって聞いてくるが……昔、脅されたからだ』とか言うと、機嫌を損ねそうだしなー。
アリアはなぜか『お前にパリッとしてるな。
ここで『お前に
「俺は……たまたま早く来ただけだ。他意はない」
「あ、あたしだってたまたまよ。他意はないわ。ほんとに他意はないから。別にキンジと

2人でだから早く来たとかそういうんじゃないからね。カンチガイしないでよ」

無い胸を張って言うアリアだが――前半、ほとんど俺の回答のマネっこじゃねーか。

と、口をへの字にしつつ腕時計を見ると……8時45分だ。

まだ少し時間があるな。

「ついでだから聞いておくが……お前、会ったんだよな」

「――玉藻？」

流し目するように、アリアが俺を見る。

「……ああ。どうだった」

「どうってことないわ。むしろ色々分かってスッキリした」

さら、とツインテールの片方を風に流しつつ言うアリアは――確かに、平然としてる。

いつものアリアだ。

大したもんだよ。俺なんか、宣戦会議であんなにテンパっちまったのに。

「何を話された」

「えっと。極東戦役と、バスカービルの参戦。師団と眷属。あたしは宣戦会議でヒルダにそしてそこで、殻金というものを取られた事――ちょっと突拍子もない印象はあったけど、実際、その1個を左胸に戻されたから……信憑性もあったわ。今、あたしの胸の緋弾には

その殻金が3枚しか付いてなくて――放って
「その、危険ってのは……」
「詳しく教えてくれなかったけど。あんた知ってるの？」
俺は……うなずくしかない。昨日、白雪も教えてくれなかったし。
「……聞きたいか？」
「言わなくていいわ。その顔でなんとなく分かる。それに準ずる問題が起きるのね。それと……ただ、命に関わるというよりは――たぶん、数年単位ね」
猶予がかなりあるホームズ譲りのカンの鋭さとなく分かった。たぶん、
シャーロック・の症状についてほぼ正確に
アリアは、自分で――
「……冷静だな。重大な話を聞いたのに」
「見くびらないで。武偵は常在戦場。負傷や殉職を怖れてたら仕事にならないのと、緒よ。
それとも――あんた狼狽えるの？」
アリアはツリ目を向けてくる。
俺が首を横に振ると、アリアは第1コースの上に仁王立ちする。
ママの裁判が最高4人の眷属。パトラ、諸葛、カツェ＝グラッセ、ハビ。でもねキンジ、パトラの率いるイ・ウー主戦派は逮捕する

必要があったのよ。諸葛静幻の属する組織・藍幇は元々イ・ウーと通商が1人もそこ出身だわ」

指をおりおり、アリアが敵の素性を語る。

「カツェ＝グラッセって女はイ・ウーのOBで、彼女のいる魔女連隊は札テロリスト組織。リビア、イラン、北朝鮮なんかに高給で雇われてる女たち付きのスパイ・子はよく分からないけど……眷属とつるんでるなら、いっぺん締め上げる必要があるわ」

「……つまり、元々お前が倒すべき相手だったってワケか」

「そ。だから期限があってもなくても同じよ。むしろ、そんなに長くはかけない。ママの最高裁――来年3月までには、なんとかするわ」

いつもの猪突猛進なカンジで言ったアリアは――くるっ。

ピンクのツインテールを揺らして、こっちに振り向いた。

「キンジ、あんたはどうするの」

「どう、って」

「白雪は玉藻との同盟があって、レキは藍幇と因縁がある。理子も戦う気でね、あたしやキンジを他の敵に殺されたくないんだって。でも考えてみたら……キンジだけで、戦う義理は無いわ」

真剣に問われて、俺は――巻き込まれた

「……これも、武偵憲章8条だな」
すでに理解していた自分の状況を、確認するように語ることにした。
「任務は、その裏まで完遂すべし――イ・ウーをやったら、その裏もこの一件は。自分で蒔いたタネは自分で刈り取るのがそういう事だろ、武偵の原則だよな。
それ以前に、人としての道としての原則だよな。
火事に喩えれば……イ・ウーの火が、俺の消火活動のせいで飛び火したようなもんだ。
その消火自体、不十分だったしな。
「それにお前の言う通り、義理は無いが……恨みは買ってる。ジャンヌパトラたちには首を狙われてイ・ウーを壊滅させた張本人は俺だしな。仲間にいつ襲われるとも限らん」
そう、まだ火は消えてない――残党がいるんだ。イ・ウーには。
そいつらが眷属という燃料を得て、火勢を盛り返そうとしている。
となると俺はまた狙われて、平凡な日常には、そういう奴らの存在はジャマなんだよ。
「俺は、ただの高校生だ。それを現実にするには、そういう奴らの存在はジャマなんだよ。
全部返り討ちにしてから転校しないと、一般校に迷惑をかける怖れもあるしな」
そこまで一気に言うと――

「キンジ……」

アリアは頼もしい味方を得たような、嬉しそうな表情をしていた。

別に頼もしくなんかないだろうに。本来Eランク武偵の俺なんか。

（あと、これはアリアは言いづらいけどな……）

俺は、アリアのイ・ウー絡みの時にもだが、理子の一件で思い知った。

――放っておけねえよ。これはさすがに。

あんな、怪人・超人・化け物どもと戦おうっていう……しかも、女子たちを。

守ってやらなきゃダメだろう。俺も一応、男だし。

別にそれで好かれたいとか何かお礼をして欲しいとかそういうのは微塵も無いが、まあ、公衆道徳みたいなもんだ。男が女を守る、ってのは。

……まったく、損な性別に生まれたもんだよ。

ただし――

「期限は、来年3月……かなえさんの最高裁までに、片付ける。そういうことでいいな」

「う、うん」

鋭い視線を送る俺に、アリアは頷いた。

「4月から俺は一般校に通う。だから極東戦役が――俺の引退戦だ。武偵としてのな」

そう宣言されたアリアは……今度は、頷かない。

ただ、何か言いたげに視線を逸らしただけだった。
「俺はな、アリアの武偵高を辞めたがっているが……」
「お前に会った頃から言っていたという話を念押ししようとしたら、ばっ。
ちっこい手を広げて、話を制してきた。
「分かってるわ。分かってるから」
「……本当に分かってるのか？」
怪訝そうに言う俺に、アリアは腕組みして眉を吊り上げる。
「納得はしてないけどね。あんたは、イザとなった時には世界レベルの才能があるのに辞める……そのプラチナチケットよ。それに納得できないってだけ。キンジ。才能ってのはね、人生を自分から捨てるなんてのは、イザとなった時には世界レベルの紙キレだ」
「どんなにいいチケットでも、要らなきゃただ」
「でも……」
「この際だから、もう一度しっかり話すか。お前には俺の意思が正しく伝わってないみたいだからな」
第2コースに俺が座り直すと、アリアは――小さくスカートを翻らせて、第1コースを降りた。
「あら、残念だったわね。もう時間切れよ」

アリアが指した時計台を見ると――9時だ。
「いいから聞け。俺はだな……」
「――今からは文化祭。お祭りの時間よ。今日は休日でしょ、あたしたち」
「まあ、休日は休日だが……」
「休む時は、ちゃんと気持ちを切り替えて休む。それができないと常に張り詰めちゃって、いずれは神経をすり減らすわ。そうなったら人間、正しい判断ができなくなるものよ」
俺の転校という、アリアが話したくないテーマを避ける逃げ口上にも聞こえるが……
まあ、言わんとしてる事は分からんでもない。
「つまり武偵にとっては、適度な休息も仕事のうちなのよ。話すのは後にして、今からは休まなきゃダメ。あたしにも気分転換が必要だし、好きな人とデートの前にケンカなんて良くないわ」
……？
アリアお前……何か、いま……
みょ、妙な事言わなかったか？
いや、いくらなんでもこれは俺の聞き間違いだとは思うが……
「……デ、デート……？」
一応、そのアリアのエラー球を一球拾ってみせたところ――

アリアも無意識に言ってしまった事なのか
「えっ、あ、あ、俺に言い直されてキョトン
と、口をわぐわたし……そんなこと、言っちゃって……た？」
向き合った俺のさせつつ赤面していくアリアと――
その赤と対照的に、頭の中は真っ白だ。
なんか『デートの顔も、ちくしょう、絶対赤くなっちまってるぞ。
規模が大きすぎたの前にも特大エラー単語があったような気がするが
しかし質問へのか記憶が飛んでしまった。
混乱したまま反応が遅れるとお互い余計恥ずかしくなり、今日これ
「――ち、ちがうが、うなずこう。ここは。
がうがうがうー！　ち、が、う！　ちがう！　ちがうっ！
アリアは犬歯まる見せで、ムチャな否定モードに入った。
ぶんぶんっ！　両腕も車輪に見えるぐらい振り回してる。
ぶんぶん、ぶんぶんっ！　両腕も車輪に見えるぐらい振り回してる。
「――今日はこれは休日！　休日は休日はたの休日！」
なんか言葉がおかしいが、もう一度うなずいておこう。
「そ、そうだな。休日は休日だッ」
「そう、そう、そうよ。休日は休日ッ」

2人で「休日は休日！」とハモる形で宣言し直しつつ、プールを後にするアリアめ。何いきなり、初っぱなから大エラーかましてくれてんだよ。俺（おれ）の脳内に――野球場でアリアが凡フライを捕りそこねて真後ろに転びそこにあった落とし穴に落っこちる映像が浮かぶ。消える魔球ならぬ、消えるアリアだ。

俺とアリアは、しばらくギクシャクしつつ歩いたが……

俺に講釈を垂れるだけあって、さすがにアリアは気持ちの切り替えが早く内に、すぐワクワクした顔になっていく。

学園島を少し歩くどうやら日本の学園祭を見たことがないらしいアリアは、

「キンジ、あれは何？　これは？　あの女の子たちの行列は何かしら？」

などと、見るもの全（すべ）てに興味津々である。

オトモの俺はそれをいちいち「あれは薬莢（やっきょう）ストラップ屋。武偵高（こ）じゃゴミだが、外部の人間には売れるんだ」「これはリラックマのニセモノだ」「イケメンコンテスト。不知火（しらぬい）が駆り出されてたぞ」などと解説しなきゃならんから、骨が折れる。

しかもアリアは東西南北をランダムに歩くので、

「お前、どっか行くあてあるのか？」

と聞くと、

「ないわよ」
と答えてくる。
行くあてもないのに、楽しそうなのはなんでだろう。
何が楽しいんだ。ただ俺と2人で歩き回ってるだけなのに。
（……俺はいいかげん、どれかのイベントに入っておきたいんだが……）
などと思っていたら、おあつらえ向きのがあったぞ。
救護科（アンビュラス）＆鑑識科（レピア）主催の、『ホラーハウス
武偵高（ぶていこう）には死体安置所のなかまたち』。
などなど、ツッコミ所は満載なのだが……
（――これからは不謹慎だろう、というか仲間で死体安置所があるのに戦うんだしな）
これは、バケモノに慣れる精神修養になるかもしれない。
と、俺はこのイベントの存在を不自然ほどスルーして立ち去ろうとしたアリアを引き止める。
「おいアリア」
「……な、なに」
「これ。入るぞ」
俺がバイオハザードのトレースっぽい『ホラーハウス』の看板を指さすと……

「あ、あんたバカなの!?　こ、ここ、こんな子供っぽいのに入りたいわけ!?」
アリアは下から睨み上げてくるが、思いっきり腰が引けてるな。
「お前、怖いのか？」
「ここここ怖いわけないでしょ！」
「よし。じゃあ入るぞ」
「えっ、えっ」
「怖いわけないんだろ？」
「――こっ、怖くないわよ！」
と言いつつ逃げ腰のアリアにこそ、この訓練は必要そうだ。
コイツは横浜の紅鳴館でも、外観だけでビってたしな。
武偵はそもそも、猟奇的なモノに強くなければならないんだ。アリア、覚悟しろ。
チケットを2枚買って、暗幕をかけられた鑑識科1階・大講義ルームに入ると……
おうおう。真っ暗だな。入口で貸し出されたペンライトを付けるか。
パッ、と光を灯すと、あっ。足もとにベッタリと血のりが付けてあるな。
「ひぁあ！」
……アリアが、いきなり泣きそうな声を出す。

「く、くっつくなよ。血なんか本物を見慣れてるだろ」
「そ、それは自分なりの理屈をキレつつ言ったアリアは……ズン、ズン、ズンズンこうやって脅かそうとしてわざと荒らされた戸棚や壊れた手術台を見ようともせず、順路を早足で進んでいく。
「おいアリア。速いぞ。歩くの」
「時間のムダだからよ、こんなのッ！　ほら早く行く！　早く出る！」
どうも……アリアは怒りの感情を敢えて高めることで、恐怖感を紛わそうとしているらしい。
（……別の意味で怖くなってきたな……）
などと思っていると、ぴた。
唐突に、アリアの足が止まった。
「そりゃいるだろうな。驚かす係が」
追いつくと、ペンライトで前方の様子を探ってる。必死な形相で。
「誰かいる」
「あんた先に行きなさいよ」
「はいはい」
俺が踏み出すと――ビビィーッ――ベルの音がして、ぱっ！

赤色灯が灯(とも)った。
「ひぁ！　うぁ！」
アリアがいっぺん横に逃げようとして、壁に跳ね返って、俺(おれ)の所に戻ってくる。
何やってんだ。慌(あわ)てすぎだろ。
見れば前方には、そこに死体袋が乗っかってるストレッチャーが置いてあった。
袋は、中身入りだ。
「……あ、あれ、フクロ。フクロ。死体置いてるわ」
「アホか。1年が入ってんだよ。袋から出て脅(おど)かす係だ」
「じゃあ生きてるのね？」
「死んでたら脅かせないだろ。あ、おい。銃を出すな。ホントに死体になっちまうだろ」
「何がどう万一なんだ。ほら、銃をよこせ」
「いやいやいやっ！　アイツが本物のオバケだったらどうするのよ！」
「なわけねーだろ。ほら、俺がついてるから。銃を渡せ」
「……う、うぅ……」
アリアは涙目のまま、一応、俺に銃を渡してくる。
そして、ぐい。俺の背を押して、死体袋の方に向けさせた。

おいおい。俺を盾にすんなよ。泣く子も黙る鬼武偵（おにぶてい）、双剣双銃（カドラ）のアリアのくせに。

などと思っていると……

「グァァ……」

案の定だー。

死体袋から、ゾンビの特殊メイクをした1年が出てきたよ。

おうおう。お疲れさま。

「ほらな」

と、背中の方に隠れていたアリアに苦笑いすると……

「――うっきゃあああああああああ！」

アリアは俺の陰からゾンビを見て、ツインテールを逆立（さかだ）ててる。

そして、どんだけー！

俺を突き飛ばして、順路を先へと駆け抜けて行ってしまう。

こけっ、「わきゃー！」……って。

自分で段差につまずいて、大声あげてるし。

アリア……ど、どんだけニガテなんだよ。バケモノ関係が。

ていうかお前、こないだ本物（ヒルダ）と戦ったばっかだろうに。

古今東西、オバケ屋敷の演出には共通したパターンがある。
しばらく何も起きない通路を歩かせて安心させてから、いきなり音や光で脅かすのだ。
アリアはそれに一々引っかかって「な、な、何よ。全然怖くないじゃない。ふふん」→
「みきゃあああ！」
そんなこんなでを繰り返す。
「も、もうすぐ終わりかしらね」
1階を抜けた俺たちは、病棟っぽく演出された教室の並ぶ2階を歩く。
「いやー……まだ3分の1ぐらいじゃないか？」
「長い！　なんとかしなさいよ！」
「俺に言われても……」
ツインテールをギザギザと毛羽立たせているアリアを宥めつつ、病室ゾーンに入ろうとすると……
「こ、これはダメ。ここはダメ。あんた、ちゃんとエスコートしなさいよっ」
……オバケ屋敷で、『エスコート』って。
前代未聞のシチュエーションだぞ。
――ドアについた血の手形に「！」と赤紫色の目を見開いたアリアは、俺の腕にしがみついてくる。そして目をつむって、何も見ませんよモードだ。
（仕方ないなぁ……）

これじゃあ俺、盲導犬みたいにアリアを引っ張っていくしかないじゃんか。

と、中に入り、机に伏せていたゾンビ・ナース役の1年がこっちをチラッと見た時……

「……？」

今来た通路の奥、順路でない方から……何か、聞こえたぞ。

俺が立ち止まると、連動してアリアがびくうと震える。

「なに。なによ。なになにキンジ。なに！」

「いや、何か聞こえたんだが……ヘンな、泣き声みたいなのが……」

「な、ななななな何であんたまで裏切るのよ！」

「裏切るって何だよ……」

「怖いこと！　言わないで！　ってことよ！」

やっぱり怖いんじゃねーか。

「えっと――子供の声っぽかった。アリア、ちょっとここで待ってろ。

録音したような声でもなかったので、気になるな。

「――ちょっと！　一人にするんじゃないわよ！」

「しょうがないだろ。迷子がいるかもしれないんだぞ」

俺がアリアを置いて廊下に戻ると、がらりら。

ドアを閉める係がいたらしく、アリアは病室に取り残される形になった。

「ひあああああ！　開けて！　開いて！　開いてぇー！　ひらけごま！　ひらけごま！」

アニメ声丸出しで喚きつつ、ガンガンとドアを叩くアリアだが……

お前、その部屋で少し1年に対ホラー訓練をしてもらえ。

そして、普段お前に『訓練』と称して踏まれたり蹴られたり馬乗りにされたりしてるこの俺の気持ちを、少しは味わってこいってんだ。

――と、かもしれない、じゃなくて本当に迷子がいた。6歳ぐらいの女の子だ。

廊下の先には母親とはぐれたらしい。

「お母さんが、」

と言うので、どうやら順路を間違えて歩いてしまい、これはさすがに可哀想だし、病室のドアを低空頭突きで破り這い出て泣きながら殴る蹴るの暴行を加え始めたのやむなく訓練は中断し、アリアと女の子と俺の3人は非常口から外に出ることにした。

で、受付の1年に事情を説明しているとすぐさま、その子の母親が現れた。

こっちはもう娘が出たものと思って、鑑識科付近の外を捜していたらしい。

「おかーさーん！」

と抱きついた女の子は、母親に促されて俺たちにペコリと頭を下げると……

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがとうございましたっ」
「良かったわね。もうママからはぐれちゃダメよ？」
しゃがんだアリアは、お姉ちゃん顔で女の子をよしよししてあげている。
「うん。ねえねえ、お姉ちゃんの醜態はもう無かったことになってるらしい。アリアの中では。
「なぁに？」
「お姉ちゃんは、お兄ちゃんの事が好きなんだね」
と、女の子が俺を指しながら言うと……ぴき。
アリアが硬直した。
「な、な、なんで」
「だって好きな男の子って、イジメたくなるじゃーん」
「え、あ、あたしはッ……このバカキンジがバカキンジすぎるから、教育的指導を……」
マゴマゴするアリアの肩を、女の子はパンと叩き——
「がんばってね！」
などと、上から目線で言い残していった。
ポカーン、と少女を見送るアリアは……赤くなって、石化してるな。
子供の戯言に、アリアが何を思ってそうなったのかはともかく……さっきまでの俺への

一連の暴行は、終了してくれそうな流れだ。
それはそれでGJだ。子供。
おかげで『死体安置所のなかまたち』に仲間入りせずに済んだよ。あ
その後、アリア様は「あんたのせいでお腹減った」などとおっしゃりがとう。
俺も少しつまむ程度には何か食べたかったので……
やたら売上がいいという噂の、車輌科近くのタコ焼き屋に向かう。
「美味しい美味しいタコ焼きだよー！　寄ってみて、食べてみてー！」
……聞き覚えのある、関西弁のアクセントが混ざった標準語が聞こえてきたぞ。
声の発生源は、駐車場にある屋台――『クィーンたこ焼き』。これだ。
バイクの車輪がタコ焼きになっている、おかしな絵の暖簾をくぐると
「あ、遠山キンジ」
「お前、先輩は『さん』をつけろよ」
武藤貴希。
車輌科の1年で、ブレーキ音みたいな名前のくせに命知らずのスピード狂が――
武藤の妹とは思えないシャープな美人顔で、こっちを見上げてきた。
（唯一、武藤と似てるのは……背が高いことぐらいだよな）

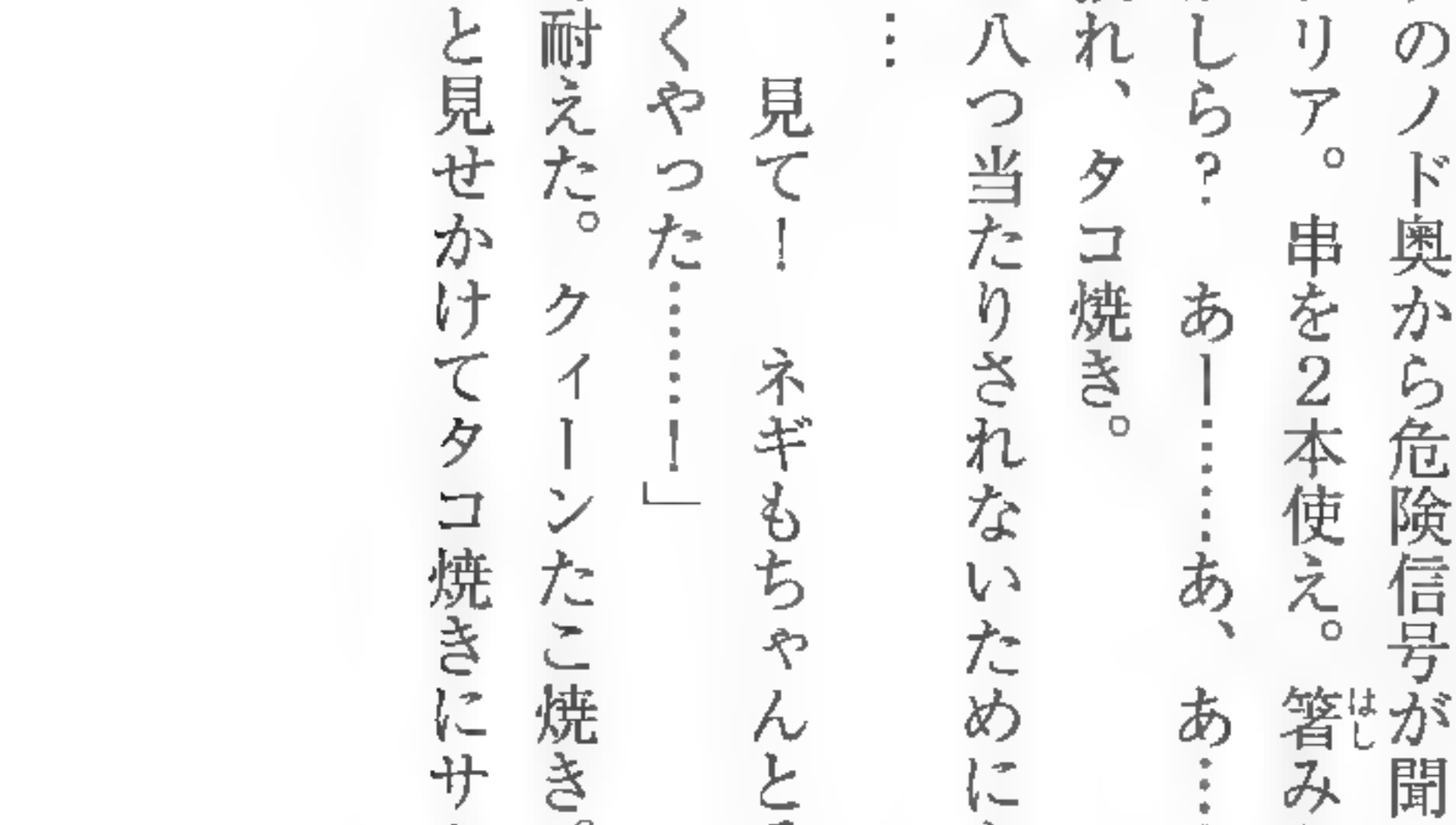
キキは高1のくせに、170㎝近くある。
レースクィーンのバイトもしてて、鈴鹿サーキットや富士スピードウェイではちょっとした有名人だとか。
「キンジ、なにこれ」
こちらは決してレースクィーンになれないアリアが、台から顔を上半分だけ出させて（身長の都合上、頭が半分しか出ない）屋台の様子を窺いに来た。
「何って、タコ焼きだ」
「ボールみたいな物を焼いてるじゃない。これはボール焼きと言うべきだわ」
趣味のミニ四駆を作っていた武藤（妹）は、「ボール焼き知らないの？　いいから、俺に任せろ」
だから東京モンは……轢いちゃうぞ？」などとボヤきつつ立ち上がる。
「で、何個買ってくれんの？　女連れなんだし、キップのいいとこ見せてよォ」
そしてほとんど金髪と言える茶髪のポニーテールを揺らし、乗り出してきた。
ちなみに武藤兄妹は『轢いてやる』『轢いちゃうぞ』と、口癖もカブっている。
キキのヤツ……客、それも先輩にタメ口ききやがって。
武藤も、ちゃんと妹を教育しろよ。
お前ら兄妹、乗り物オタク同士で仲いいんだから。

「じゃあ8個だ」
「え――――？」
キキはキレイに整えた眉を寄せ、腰をかがめて俺を見上げるような仕草をする。
「……1ダース買ってやるから」
「ええええ――――？　轢いちゃうぞ――――？」
そこから、ずずいっ。ニヤニヤしつつ、詰め寄ってくる。
お、おい。美人がそんなに顔を近づけるなよ。これじゃあ男は逆らえなくなるだろ。
ていうか万一、武藤の妹でヒスったりしたら――拳銃自殺モンだ。
「わ、分かった。早くしろッ」
「まいど！　さすが遠山先輩だ！　お兄ちゃんにもこの大物っぷりを伝えとこー！」
プロっぽいウィンク&投げキッスをしてきたキキは、キリを手際よく使って紙箱にタコ焼きを入れていく。
なるほど……キキはこの手で売上を伸ばしていたわけか。
名付けて『美人すぎるタコ焼き屋』商法。商売上手なヤツだ。
ていうか、どうする。20個も買っちまったよ。食いだおれになるぞ。
近くのベンチで食べる事にすると、アリアはどこからかペリエを2本買ってきた。

時々思うんだが……なんでアリアは時々、ただの炭酸水を飲むんだ？
本人は「ヨーロッパでは油モノを食べる時の常識よ」と言うが、俺は炭酸水なんか違和感しか感じん。
だがまあ、2人掛かりとはいえ20個ものタコ焼きを退治するには水分が不可欠だしな。
と、俺はペリエのビンを開けつつ……
「ノルマは10個だぞ。男女平等だ」
そう言うと、アリアは開けた紙箱を覗き込みつつ、ふんふんニオイを嗅ぎ
ちなみにキミの地元ではそうなのか、味は生地に溶いて付けてあるのでその代わり刻みネギが大量に乗っていて、からしマヨネーズがかかってるな。
「それはいいけど、そもそもこれはどういう食べ物なのよ」
「だからタコ焼きだって」
「タコでは、あ・り・ま・せ・んっ」
すぐムキになるし……
「中に入ってんだよ。タコの切り身が」
ここまで説明せんとならんのか。
（そういえば……アリアは、この歳になるまで綿アメも知らなかったんだよな）

ほんと、国際結婚とかする人は大したもんだよ。
俺は楊枝の代わりに何本か添えられていた串を1本取り、アリアに差し出すと……
「ほら、食ってみろよ。論より証拠だ」
がぶ。
割と躊躇無く食いついてきた。
なんか……ネコ科動物に餌付けしてるような光景だな。
もぐ、もぐ……
「……あら。おいしし」
良かった。
もしお気に召さなかったら、残り19個は俺がやらねばならん所だったな。
アリアは自分でも串を取り、引っかけて持ち上げるが……べちゃ。
柔らかめの『クィーンたこ焼き』は、すぐ千切れて箱に出戻りした。
「……取れないわ」
「中のタコを刺せよ」
「バカなの？　あたしは超能力者じゃないわよ。どこにタコが入ってるかなんて見えない」
「それはそうだがカンで刺せよ」

と言うと、アリアは、ぐさ。
別の玉を刺すがべちゃ。また落ちた。
……ガルルルル……
マズい。アリア。串を2本使え。箸(はし)
「お、落ち着けアリア。串を2本使え。箸(はし)
「うー……こうかしら？　あー……あ、あ……
頑張れ……頑張れ、タコ焼き。
崩れるな。俺が八つ当たりされないために
す……すすす……
「――取れたわ！　見て！　ネギもちゃんとこえてきた。
「よし、よし、よし、たいにして、すくって取れ
崩れずに、よくやった……！」
俺はアリアに、
「じゃあ、はい」
「？」
「セイ・アー」
「……？」



「Say, ah」

発音を正式なものにされて、ようやく分かった。

これ、英語版・『アーンして（Say, ah）』か。

……って。

な、なんでそんな事させたがるんだよ。白雪や理子じゃあるまいし。

気恥ずかしそうにする俺をよそに、アリアは叮愛すぎる笑顔でタコ焼きを差し出してる。

（……さっき、俺が食わせてやったからか？　だとしたら自業自得か……）

俺は一応、周囲に見知った顔がいない事を確認してから――

さっ。

アリアの串から、疾風のようにタコ焼きを食べた。

うまい。確かにうまいんだが……アリアにどこか上滑りしていく。

焼きのうまささえと、最近ヘンだよな。アリアは。

なんか……ほんと、

「じゃあ次はあんたの番よ」

「アーンして」をやられた。

と言われて、なぜか知らんがお互い食わせ合うルールになってしまった。

アリアはお遊戯ノリで、俺の与えるタコ焼きをパクパク食べていく。

俺もアリアから食べさせられるのでそのたび緊張してしまい、満腹感を感じるヒマもなく……気がつけば、大量にあったタコ焼きを2人で完食してしまっていた。

「おいしかったわ。誉めてあげる」

ペリエで口をすすいだアリアは、スカートのポケットから口紅みたいなものを出す。

そして、ちょっと俺に背を向けて、ぬり。塗ってるぞ。

アリアがベンチに置いたキャップをつまんで見ると……ディオール、と書いてある。

「何塗ってるんだ？」

「リップよ。ルージュはしないの。ジャンヌはするみたいだけどね」

リップ？　ルージュ？

まずその区別から分からん。

お前も……化粧品とか買いに行ったりするのか？」

ちびっこ武偵が拳銃さげて、コスメショップでウロウロですか。

想像すると、笑っちまいそうだな。

「行かないわ。専属のスタイリストとメイクアップ・アーティストをこの会社で雇って、オーダーメイドで作らせてるの」

本人にとっては大した事じゃないのか、サラッと言いやがるが……すごいところはリアル貴族様だよ。

そして……やっぱり、一応、アリアも女なんだな。
身だしなみには、いくらかかるんだよ」
「1本作らせるのに、いけっこう気を遣ってるってわけか。
「聞いたら心臓に悪いわよ」
と、アリアがキャップをしたリップをポケットに収めて振り返る。
その唇は……言われたから意識して見てしまうが、うるうるしてるな。
なるほど。どうやらリップとは、口紅とはちょっと違うアイテムらしくて、アリアの口を見ていると……
俺がしばらく黙ってると……
「な、なによ。べっ別に、なにかを期待して付けたわけじゃないからね。日本の秋は乾燥するからしてるだけっ。ヘンな期待とか、してないからっ」
アリアは、ぷいっ。腕組みしてソッポを向く。
そして唐突に――
「き……今日、面白かった？　キンジは」
チラッ、とこっちを見てきつつ……ちょっと赤くなって聞いてきた。
「ん？　ああ、文化祭は面白がらせるためにやってるもんだしな」
「そうじゃなくて、その、『あたしと一緒で』ってこと」
……また、妙な聞き方をしてきやがるな。

でもまあ、ぶっちゃけ楽しいは楽しかったよ。
アリアといるのは、男友達と一緒にいるのとあまり変わらないからな。
時々ドキッとさせられる事もあるが、基本的には女っぽくないし、
してるから妹（俺にはいないが）か何かを連れてるような雰囲気で気楽なんだ。
「――まあな。お前は一緒に居ても疲れないからな」
身の危険はあるけどな。
という部分を飲み込みつつ、その辺の感情を短くまとめて答えると――アリアは……
……にやぁーデレした笑い方をした。
なんか、デレ
「あ、あたしもね、楽しかったわ。ホラーハウス以外は。あんた、なかなかやるわね」
「何を誉められてるのか分からんのだが……」
「だから今日のこれは評価してあげる。そうねえ……ドレイから、召使いぐらいに格上げしてあげるわ。これからは」
奴隷と召使いに如何ほどの違いがあるのか、お教えいただきたい。
しかし……妙な感じだよ。アリアに誉められるなんて。
普段の俺はアリア用サンドバッグだから、気持ち悪くて蕁麻疹が出そうだぜ。
「お前、なんか最近……前とちょっと変わったな」

気恥ずかしかったので、少し俺も視線を逸らしつつツッコむ。
するとアリアは少し黙り、スカートの上で手もみするような仕草をし
チラッと見ると、左手の薬指を自分で触ってるな。
「……変わるわよ……ゆび……」
「？」
それは。あんたが、あんな……ヘンなんだもん」
「あんたがヘンなんだもん」
ふにゃ、と、アリアが顔を俯かせてしまうので……
俺も、黙るしかない。
そうしていると、チラッ、とアリアは上目遣いの横目で俺を見てくる
「じゃあ、どっちでもいいの？　キンジは。前のあたしと、今のあたしと」
「……どっちでもいいよ。お前はお前だろ」
そう答えて、頭の後ろで腕組みし――
引き続き、黙って2人並んでベンチに座り続ける。
会話が途切れてしまったので、秋晴れの空を眺め、爽やかな風に吹かれていると……
……リン、ゴーン……リン……ゴーン……
台場の方から、鐘の音が微かに聞こえてきた。
あれはホテル日航のチャペルだ。

風向きによっては、学園島まで聞こえてくるんだよな。

「お、結婚式だな」

俺（おれ）が何の気なしに言うと、

「――うっぷ！」

アリアは飲みかけていたペリエが変な所に入ったのか、「ふぇーけほけほけほっ！」と激しくむせた。

そして、わたわたわたた。

ペリエのビンをお手玉してから、自分の髪を触りまくった。

これは落ち着かない時の仕草だな。

「そういえばアリア。お前、午後はどうするんだ」

「え、ごご？　午後、午後は強襲科（アサルト）で後輩のイベントを確認し、不備があれば指示するように』って通達が聞いた瞬間、誰（だれ）がやるかって思ったね。フケちまえよ」

後輩のイベントを確認し、不備があれば指示するように』って通達があったでしょ」

「面倒見いいなー、あれは任意だぞ？　俺は聞いた瞬間、誰がやるかって思ったね。フケちまえよ」

「い、いいの。今日はこれぐらいで。『あまり束縛すると嫌われる』って教務科（マスターズ）から『先輩は書いてあったし」

アリアはヘンな事を言いつつ、そそくさと立ち上がり――ビンをゴミ箱に捨てる。

（束縛……俺をかっ？）

お前こないだ、ももまんを勝手に食った俺をワイヤーで束縛して海に突き落としたろ。

しかも散々銃撃した挙げ句。

「じゃ、じゃあねキンジ。夜の打ち上げでまた会いましょ。来なかったら風穴よ」

物騒な事を言いつつも、アリアは良い子チャン顔で立ち去っていく。

その際、「あっ」と、スカートを整えてレッグホルスターを隠した。

これも……初めて見たな。アイツが銃チラを恥ずかしがるなんて。

その後、俺は武藤（兄）と合流し、美男子コンテストで準優勝してきた3人で文化祭を見て回った。

去年は仕事ばかりだったが、今年は1日かけてイベントを楽しむ事ができた。

CVRのダンスショーなど女っけのあるモノは武藤と不知火だけに行かせて、その間、ノンビリすることもできた。

ここ最近でまず無かった、いい1日だったと言えよう。ここまでは。

そして文化祭も無事終了した夜7時、今日は夜祭も無いので――

――ここからが恐怖の『打ち上げ』タイムだ。

文化祭終了日、武偵高ではチームごとに集まって『武偵鍋』なる鍋を囲む慣習がある。

そのために夜は体育館が開放されるので、俺たちバスカービルもそこに集合することにしてあった。

その際、各自が食材を持ち寄るのだが……

その食材は『アタリ』と『ハズレ』の担当をチーム内で分けるのが習わしだ。

アミダで決めたところ俺はアタリ担当だったので、鍋奉行の白雪に普通の豚肉を渡してある。

ちなみに白雪はもう1人のアタリ担当。ここの安心感は揺るぎない。

しかし……ハズレ担当はアリアとレキ。

ハズレ担当は、あの2人……）

（……大丈夫かな、『通常の鍋には入れない具材』を幹事に渡すのが武偵鍋のルールである。

鍋という日本文化に疎いアリアと、そもそも文化的な生活をしていないレキ。

このツートップの発想から何が飛び出すか、考えただけで腹痛が始まるぜ。

なお、奇数人数のチームでは1人が『調味料』担当になるのだが、これは理子だ。

ここはラッキーだったな。あのファンタジスタがハズレ食材担当になってたら、ネタでシュールストレミングスの缶詰とかを持ってきていたかもしれないからな。

（『水投げ』とか……こういう悪習、誰得だよ……）

と、重い足取りで入った体育館は——もう騒がしかった。

各チームが武偵鍋をスタートさせており、ゴザに座る生徒達の周囲で倒れてるのもいるな。それを、救急箱を持った衛生科（メディカ）の生徒が診（み）て回ってる。ほんと、何のためにあるんだこのイベント。

「キーくん、こっちこっちー！」

ピクニックシートに人魚姫座りした理子が、満面の笑みで俺を呼んでる。こういうバカバカしいイベントが好きな理子（バカ）は、鍋を箸（はし）でチャカチャカ叩（たた）いて自作の『早く煮えろ音頭』を歌ってる。

ちなみに、鍋は〝武偵鍋専用鍋〟。

これは先輩たちから代々受け継がれてきた負の遺産で、基本は上鍋でだが、そのフタはシルクハットのような形状をしている。

シルクハットの天井部分には開閉可能の小窓があり……この小窓を開見ることなく具を取り出せる構造になっているのだ。

つまり明るいところでも闇鍋（やみなべ）ができる、魔のアイテムなのである。

理子だけでなく――ピクニックシートにはアリアがあぐらをかき、レおり、ハイマキもお座り中。そして、

「ちょうどいま具を煮てるところなの。キンちゃんも、お肉をありがと1人だけキレイに正座した幹事の白雪が、カセットコンロの火を調節していた。

制服エプロン姿の白雪が自分の横にスペースを作ったので、俺がそこに座った時――

「たーかーのー、つーめー！」

唐突に、ひみつ道具を出すドラえもんみたいな声を上げた理子が、ざらざら！

――小窓から、赤唐辛子の実を何本もブチ込みやがった！

「ひぁ！」「きゃ！」「……」

アリアと白雪が目を丸くし、レキは無言で鍋を見続ける。

「お、お前……！　何入れてんだよっ！　これじゃあ火鍋になるだろ！」

更に唐辛子を入れようとする理子に、俺が叫ぶ。

「えーだって理子、辛いの好きなんだもーん」

アヒル口で、ざらざら。

さらに、い、入れやがった――！

鷹の爪とは、要は赤唐辛子の実。

1本でも鍋全体が十分辛くなるのに、もう20本以上入ったぞ。殺す気か。

「……キンちゃん、調味料係は何を入れてもいい規則なの。でも、死ぬときは一緒だよ」

撫子柄ハンカチで涙を拭いつつ、白雪がさめざめ言う。

「そんな規則はどうでもいい！　理子ッ……あと1本でも入れたら撃つからな。アリア、レキ、安全装置を外せッ！」

チームリーダーとして、これ以上の暴挙は許せん。
俺たちが揃って武装を解禁すると、
「ぶー、じゃあちょっと甘くしたげる」
と、理子はクマさん形リュックから出した袋を開け、鍋に、ざざあああー。
……パ、パルスイート……！
を、500gぐらい入れやがった。
それは確か、砂糖の4倍の甘さを誇る強力な人工甘味料。
単純計算で、砂糖が2kg入ったのと同じ味付けになったワケだぞ。
（まだ鍋の中に何が入っているのか、知らんけど）
調味料だけでここまで不安になる鍋なんか、生まれて初めてだ。
……グツグツグツグツ……
うう、変なニオイが立ちこめてきた。ていうかなんで紫色の湯気が出てんだ、この鍋。
「くししし。おいしそーだねー。ほんじゃ、隠し味にもう一品……」
理子がポシェットから青汁を取り出そうとしたので、
「白雪、もういいか。もういいだろ」
俺はマバタンキング信号で『早くしろ』と伝えつつ、白雪を促す。
「う、うん。大丈夫だと思うよ。いつがいいのか、もう私にも分からないけど……」

「よし。では――今回は無事、1人の死者も出さず文化祭も終わり……
　応チームリーダーの俺が、急いで打ち上げ開始の挨拶をしようとすると――
「いよーし！　じゃあアリア、食べてみよー！」
「し、白雪、幹事が最初に食べなさいよ」
「えーっと……レキちゃん、食べてみたら……？」
「理子さんから食べるべきです」
女子一同は、俺の挨拶を全スルーで押し付け合いを始めたぞ。
俺の存在……軽っ……！
「じゃあキーくんから行ってみよー！」
「そうね。ここはリーダーらしく行きなさい！」
「キンちゃんゴメンね、でも、でも、ちゃんと普通の具も入ってるから……！」
「キンジさん、頑張ってください」
て、てめえら……！
しかし、4対1では手も足も出ん。みんな行くしかない……！
――やむをえん。
「……散る桜、残った桜も、散る桜……ッ！」

俺は『俺は死ぬが、どうせお前たちも死ぬんだからな』的な辞世の句を遺し、おたまを取る。
皿を構え、震える手で……具を、掬い上げると……べちゃあ……
……も、も……ッ!?
……ももまんが出てきたぞ。
ゾンビ化した前の仕業だな……！
アリア！　お好きなのかもしれんが、溶け出した餡のせいで味がどうでも考えたのか。
お前はこれが『みんなの事を考えて行動しましょう』って、小学校で習わなかったのかよこの小学生は。
しかも……ももまんの上に、何だ……これ？
半分ほど溶けた、元々直方体だったと思われるベージュ色の物体が乗ってるぞ。
（な、なんだこれ……？　麩、か……？）
それらを取り皿に移した俺は、イ・ウーを強襲したとき以上に緊張しながら箸でつまむ。
「……」「……」「……」「……」
ハイマキも含めて全員の視線が集まる中、その麩らしき『何か』を口に入れると……
「うッ……くッ……！」

——レキめ！
お前、鍋にカ・ロ・リ・メ・イ・トなんか入れやがって……！
しかもチーズ味じゃねーかッ。
濃厚なチーズの香りが昆布出汁のスープに絡んで、えも言われぬ味になってるぞ。
だが……不幸中の幸いで、赤唐辛子の辛さはパルスイートによって中和されたらしい。
奇跡だ。具材はともかく、スープは致死性のものじゃないぞ。
俺はスープをたっぷり吸ったももまんを、根性で食いきり——任務完了。
なお、最低でも1人1すくいずつは闇鍋段階で食べなければならないルールによって次々と鍋に特攻をかけていく。
どももジャンケンに規則なので、女子
まず、アリア。
「……ぐえ……」
これは何やらドス黒いツブツブをいっぱい引き当てた。グロすぎる。
「レキー！　これ、あんたでしょ！」
と言うアリアに馬乗りになられたレキの自白によれば、それは狙撃科の庭で視力向上のために栽培されているブルーベリーらしかった。それで紫色の湯気が出てたのか。
アリアはそれをヤケクソ気味に頬張り、両手持ちしたマグカップのミルクで流し込む。
「うう……かしこみかしこみ……うう……」

などと祈りながらの白雪は、普段の行いが良いせいか煮卵を引き当てた。
その場に伏せて嬉し泣きする白雪の横で、理子が引き上げたものは……
「おおー、キレートを吸着して輝いてるぞ！」
白滝……が、飽和して結晶化したパルスイート！」
どうしてそうなった……と俺が愕然としていると、理子はパル白滝を平らげてしまう。おかしいだろ。その白滝もお前の味覚も。
理子に続くのは、レキだ。
レキは相変わらずの無表情でおたまを上下させ――ひょい。
「……！」
見ているこっちが息を呑むような量の、赤唐辛子の群れを掬い上げた。
「……」
取り皿にそれを移したレキは……
ぱちん。割り箸を割り――ピカッ、と目を光らせてから――
ひょい。
もぐ、もぐ。
食べた。唐辛子を。
例の動きの少ない食べ方で、そのまま。
「おいしー！」と。

ひょい。ぱく。もぐもぐ……ひょい。ぱく。もぐもぐ……

続けて何本も、フライドポテトでもつまむ様に食べてるぞ。

「……だ、大丈夫なのか……？」

さすがに心配になった俺が聞くと、こくりうなずきやがった。

目線もいつも通り虚空を見たまま、動揺のカケラも無い。

（……あ、ありえん……）

……その後……

悪しき伝統のノルマも終わったので、鍋からは魔の具材が全て取り出され、スタッフがおいしくいただく事となった。

ペットは飼い主に似るというヤツで、ハイマキは何だか分からんものでも喜んで食べる。

動物虐待には当たらないだろう。

――そこで白雪が、

「じゃ、じゃあ灰汁を取りますね」

という名目でスープを入れ替え……

釧路昆布による鍋の再生治療が行われ、そこからは普通の鍋料理が始まった。一安心だ。

「白雪、具は残ってるよな」

「うん。キンちゃんのくれた豚肉と……白菜と水菜、大根と人参、えのきと椎茸、ネギと

マロニーと……あっ、それと薄切りの米沢牛(よねざわぎゅう)を持ってきたよ」
「よしッ……いいぞ」
「なんとかなりそうね」
武装確認をするようなノリで俺とアリアがGOサインを出し、白雪による調理が続く。
というわけで、バスカービルは鍋をつつき始めたのだが、ここでまた理子(りこ)が……
改めて、バスカービルは鍋をつつき始めたのだが、ここでまた理子が……
「――それ理子の世話肉だよ！」
ビシッ！
俺の目をチョキで突き、俺が取った牛肉を鍋上空でかっさらいやがった。
「痛(いて)っ……！　俺、まだ肉食ってないんだぞ！」
「ここからここは理子の陣地！　キーくん入るべからず！」
などと、ネギで勝手に境界線まで作ってるぞ。
しかもその境界線を自分で食いやがるから、どうすりゃいいのか分からん。
もりもりと肉を食い荒らしていく理子に焦(あせ)りを覚え、俺も白雪から肉をパスしてもらいつつ煮て……周囲に目を光らせつつ一切れ持ち上げると、
「グルオッ――」
「うおっ!?」

今度は横から、伏兵のハイマキに肉を取られた。
て、てめえ……！
いつも何でも食うくせに、なんでよりによってお前、こないだなんか、池のザリガニ食ってたろ！
「返せ！」
「グルオンッ」
キレた俺はハイマキの口を開けさせて動物レベルの奪い合いをするが勝てず、手を噛まれただけに終わる。
レキもボーっとしてないで、なんとかしろよこれを！　飼い主だろ！
と振り返ると、俺がハイマキと取っ組み合ってた隙に――
「やっぱり、和牛は世界一おいしいわ」
「……」
アリアやレキも、米沢牛を優先的に食べてやがる。
猫舌アリアは何度も肉をフーフーしてから食べるのでスローペースだ。
レキが例の『無間断食い（ノー・ウェイト・イート）』を発動させてるぞ。なぜ今なんだ。やめろ……やめないかッ！
「キ、キンちゃんしっかり！　お肉、まだあるよ！」
白雪が茹でた肉を持ち上げるが、

「それは理子の陣地で育った牛です！　くふっ！」
理子が鋭く箸を突き出し、肉を取りにかかる。
「こら！　お行儀が悪いッ！　これはそもそもキンちゃんのために持ってきたの！」
白雪が鍋のフタを盾にして必死の防御を試みるものの――
理子は近接拳銃戦の要領で箸を両手持ちし、肉をさらってしまう。
「きゃあ！　お、お肉が！」
「ほわぁーおいしー！　ゆきちゃんありがとー！」
り、理子め……！
ついに……米沢牛が、全滅した……ッ。
だが……まだだ。まだ豚がある。
「お前ら――これは俺が持ち込んだモノだからな！　少しは食わせろッ」
普段出さない本気をここで出しつつ、俺はD　Eを抜いて一同を威嚇する。
相変わらず金欠の俺は……ワトソンのステーキ以降、肉をロクに食べてないのだ。肉という物質を。
ここで食わないと、次いつ食えるか分からないなり――白雪が理子に対抗して水菜で作ったサラダを取ってくれる。
という俺の必死感に女子たちが引き気味に。
陣地を構え、そこを俺の租界として豚を茹でてくれる。
その助けもあって……ついに、俺もなんとか肉を口にする事ができそうだ。豚だけどな。

「よかった、キンちゃんがキンちゃんのお肉を食べれるね」
「気持ち悪い言い方するなよ……」
「はい、どうぞ」
肉をくれる白雪(しらゆき)に、皿を差し出すと……
「……ふぅ。お鍋(なべ)で、ちょっと暑くなっちゃった」
なぜかそのタイミングで、白雪は自分の胸元を反対の手でパタパタし始めた。
「……ッ……！」
肉の受け取り時に、白雪のエプロンの下、セーラー服の胸元に……
（く、黒……ッ……！）
チラッと見えちまったぞ。
例の『勝負』の方の下着をつけてやがるのが。
「……！」
ヒステリア性の血流を感じた俺(おれ)は、肉を入れた取り皿ごと白雪に背を向ける。
座り直した俺の背後から、「チッ」という舌打ちっぽい音が微妙に聞こえたような気がした時……
どかっ、どかっ、とコンバットブーツがシートの横に投げ捨てられ——ぐいっ。
「うッ……？」

俺が、浮いた。
誰かに襟首をネコ掴みされて、持ち上げられたのだ。
60kg以上ある俺を片手で投げ捨て、開いた空間に「はーどっこらせ」と座ったのは……
「ら、蘭豹……ッ先生」
――変装食堂、客の評判良かったで。売上も去年以上やったし、よーやったなお前ら」
俺の皿を強奪した蘭豹が、割り箸を勝手に取って食いながら話し始める。
（お、俺の肉が尽きた……一口も食べてないのに……）
これが、現実……
仔ライオン・猛牛・山猫・タカ・銀狼に加えて雌豹まで食いに来たら、非力な人間ことを、俺は手も足も出ないのだ。
ていうか野生の王国かよ。武偵高は。
「――あとレキ。お前が描いた文化祭ポスター、コンテストの投票で1位になっとったで。賞状やるから、後で教務科に取りに来いや」
……え？
バスカービルの全員の視線が集まる中……
無言で、うなずいた。
「レキ、お前……絵なんか描いたのか？」
レキは蘭豹に、こくり。

尋ねた俺にも、こくり。
レキは首を縦に振る。
「ポスターの応募テーマにエアブラシで描いたっつうから、流用することになった」
こないだ『夢』をが足りんかったから、美術レキ、あんた何描いたのよ」
「ゆ、夢……？」
滅多な事には驚かないアリアも、これには目を丸くしてる。
「――故郷で語り継がれている、夢魔を描きました」
抑揚無く言ったレキの頭をわしゃわしゃ撫でた蘭豹は、
「上手いでー、レキは。ほれ」
携帯で撮ったレキの絵をバスカービルの皆に見せて……女子・同が、
車座からつまみ出されていて最初見れなかった俺も、蘭豹の携帯を覗くと……
「うぉ……」
――H・R・ギョッとしてる。
ーガーが描いたような、とんでもなくリアルなタッチ
なんか動物や鳥の骨が組み合わさったような不気味な絵だが……う、
こんな気色悪いモノは実在しないだろうが、まるで写真と見紛うよう
「す、凄いな……これ、ホントにお前が描いたのか？」
尋ねると、レキは、こくり。

……ガチらしいな。
バスカービルでは――白雪も墨絵が上手いし、理子も美少女マンガみたいなイラストが描ける。
だが、レキのこれは次元が違う。
プロとしてやっていけるんじゃないか？
銃を極めて繊細に扱い、精緻な調整を厭わず、ターゲットを待つ間ずっと集中力を持続させ続ける狙撃手には――絵画の才能もあるってレベルだ。
と、噂には聞いていたが……本当だったんだな。レキの場合は。
「……」
レキ本人は特段受賞のコメントもないらしいし、お前……狙撃手やめて、画家になったらどうだ？
いや、これは割と本気でそう思う。
そっちの方がよっぽど世の中の役に立つ仕事だしな。
――転職だよ。転職。
（俺が……一般校へ転校するのと同じように、な）
そう思いつつ、実は、俺は……俺は輪になって座るアリアたちがレキを誉めるのを傍観していた。

今夜、武偵高から一般校への転出申請書を教務科に提出するつもりでいる。

来年4月に転出したい場合、その申請の〆切は10月31日。今夜0時までなのだ。

もしかしたら自分の意思が変わるかもしれないと思い、期限延長申請までして待ったが――

やはり、俺の気持ちは変わらなかった。

こんな生活をしていたら、いずれ本当に破滅の時が来るだろうしな。

（だから――あと約半年だ。半年したら俺は今みたいに……この輪から、外れるんだな。

その時こそ本当に……俺は今までの外側から仲間たちを見ていると……）

そう思いつつ、輪の外側から仲間たちを見ていると……俺は今までの

今のレキの事のように、皆の新しい一面を沢山見つけてきたのだと気

時には戦いの中で。時には、こういった日常の中で。

そういうのを見つけたのは、バスカービルの仲間だけじゃない。

ジャンヌやワトソン、そして――自分自身についてもだ。

（撃ち合ったり斬り合ったりはともかく、そういうのは……悪くなかったな。武偵高も）

女子はニガテだから、苦労もしたが……そういう時間を長く一緒に過ごしたおかげで、

今や、みんなとは本当の仲間って感じがするようになった。

あと半年しか居られないにせよ、それまでは――チーム・バスカービルは、俺にとって

いい居場所になってくれるんだと思う。協力してくれる仲間たちも含めてな。

――だから、俺が武偵である残り半年は、全力で守り続けよう。

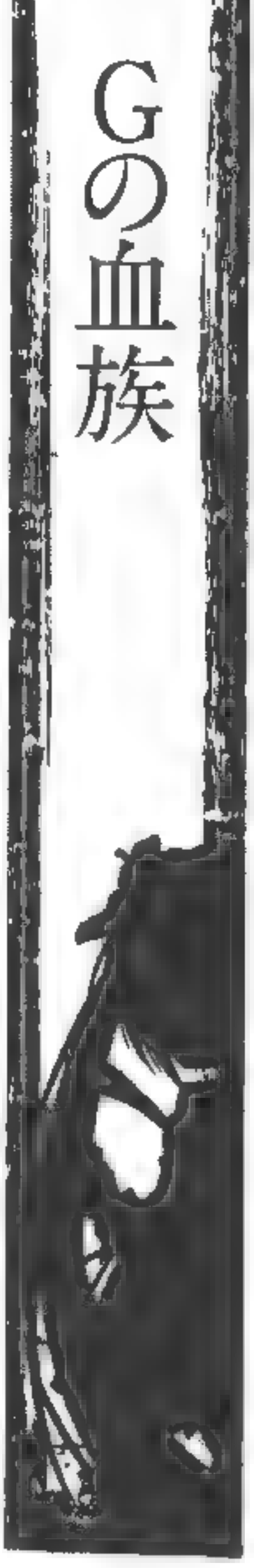
いま目の前にある自分の居場所、目の前にいる仲間たちを。

（一応、俺はバスカービルのリーダーって事になってるんだしな）

そう思いつつ、俺は喋り続けるアリア・白雪・理子・レキを静かに眺めるのだった。

Go For The NEXT!　Gの血族

10月31日の深夜、無事、転出届を教務科（マスターズ）に提出し終えると……翌日は日曜日だった。
文化祭の片付けは1年の仕事なので、俺は情報科（インフォルマ）のPCルームで民間の依頼（クエスト）を物色して時を過ごす。
目下の問題、俺自身の財政難を解決するためである。
『オロチ』の左手分として平賀（ひらが）さんに払う代金ぐらいは、早急に何とかしないといけない。
そう思って検索をするが……いまいち、いい仕事はない。
短期で高報酬を稼げるものは、どれも危険そうな仕事ばかりだ。
1件、ただのボディーガードで高額のがあったが……これはダメだ。どこぞの大企業のお嬢様を身辺警護する仕事だぞ。これ以上お嬢様と出会ってたまるか。
ほぼ丸一日誰（だれ）とも喋（しゃべ）ってない状態のまま、夜、などと仕事を選（え）り好みしていたら、夕方までかかってもメドが付かず……
見つける事ができた。
詳細が印刷された藁半紙（わらばんし）を手に、男子寮へ帰ると――
「……？」



廊下に、点々と血の汚れが続いていた。
それ自体は、武偵高では珍しい事ではないのだが、汚れは俺の部屋の方に続いている。
不安になって部屋のドアまで急ぐと――
「……！」
ドアの前に、銀狼ハイマキがうずくまっていた。
「どうしたんだ……！」
ひどく負傷している。銀色の毛が血まみれだ。
慌てた俺がそばに片膝をつくと、ハイマキはくわえていた携帯を震えながら渡してきた。
その目は、誰か信頼できる相手に、何か重大な事を伝えようとしているかのようだ。
見れば携帯は――レキのものだった。黄緑色の防水携帯が、血に濡れている。
人の携帯とはいえ、事態が事態だったので開くと――
「……！」
初めは何か分からなかったが、携帯は写真を撮った直後の状態になっていた。
画面下に『保存しますか？』のポップアップがあり――
そこに映っていた写真は――
（……な、何だ、これは……！）
白銀と漆黒の、ガバメント。

抜き身の日本刀――イロカネアヤメ。
マットシルバーの、レミントン・ダブル・デリンジャー。
そして――ドラグノフ狙撃銃。
アリア、白雪、理子、レキの武器が、無造作に積み上げられている……！
その写真に愕然としていると、
――ピピピピピピ――
着信音が鳴った。レキの携帯から。
画面は『番号非通知　テレビ電話着信中』の表示に切り替わっている。
震える指で、通話ボタンを押すと――
『――ようやく出やがったか。遅えぜ』
低い声が聞こえ、一瞬、男の顔が映った。
どこかの原住民がやる戦化粧のようなフェイスペインティングをした顔が。
（……コイツは……！）
見覚えがある。
たしか先月、空き地島での宣戦会議にいた――ジーサード。そう呼ばれていた大使達を罵倒し、強者を連れてこいと息巻いていた……最も好戦的だった男だ。

――テレビ電話の画面が揺れる。

「お、おい！」

電話を切るのかと思った俺が叫ぶと――

『フォース、見ろ。コイツが遠山キンジだ』

ジーサードの声が画面外から聞こえ、画面には携帯を渡されたと思われる人物が映った。

「……？」

その顔に――

俺は、息を呑む。

鋭めの目付きをした、美少女だ。歳は俺より少し下。赤いサングラスかゴーグルの様なHUD（ヘッドアップディスプレイ）を付けており、両耳には後ろへ伸びるセンサーのような機械を付けている。

やや細めの体はマットブラックのプロテクターで部分的に装甲し、その各所に現代的なタクティカルナイフを収めている。さらに背や腰にも何本もの刀剣類を差しているようだ。

だが、驚くべきはそれらの機械的・攻撃的な装備についてではない。

初めて見たにもかかわらず――

俺は、この子を知っている。

知っている……知識としてではなく、血が知っている。そんな感じがする。

近い――この子と俺は、近い。

そんな言いようのない感覚が、全身を駆け抜けたのだ。たった一目、見ただけで。

何だ……何なんだ、コイツは……！

『――うわ。うわ。好み。写真より動画のがずっといい感じ！』

嬉しそうに画面に寄った少女は、艶やかな栗色の髪――ボブカットの髪を跳ねさせて、興奮丸出しの声を上げた。

「だ、誰だ――お前たちは！」

レキの携帯に叫ぶと――

『あたしは、GⅣ――製品番号で呼ばれてる。名前は無いよ』

黒い目を細めて、少女が答えてくる。

ジーフォース……？

「さっきの写真は何だッ……！　アリアたちに何をした！」

『――どれがお兄ちゃんのカノジョか分かんないから、みんなやっちゃった』

……？

お、お兄ちゃん……？

誰の事だ。

『お兄ちゃんに近づく女は――全殺しだよ。他にも女がいるんなら、そいつらも全殺しね。お兄ちゃんはこれから、あたしでHSになればいいの――って、うわー言っちゃった。

背徳う……！

きゃはは！

何だ、何だ、何なんだ。

何の話をしてるんだ。お前は。

話の流れを察するに、どうやらコイツは俺の事を『兄』と呼んでるようだが——

いないんだ。俺には。妹なんか。

俺たち遠山兄弟は、兄さんと俺の……2人だけなんだよ！

「お前ら……何者だ……！」

そう言うのが精一杯だ。

画面の中がまた動き、ジーサードが再び出てきて——俺を見て、舌打ちする。

『何度見ても信じられねぇな。これがシャーロックをやりやがったのかお前たちは……イ・ウーの残党か!?　答えろ！　何者なんだッ！』

「——おい！」

『黙れ。来い。戦え』

その3つだけ答えたジーサードは——

ぐるっ、と、テレビ電話のインカメラの向きを変えた。

どうやら劇場らしいその場の無人の客席が映り、さっき喋っていたジーフォースという少女のウインクが映り——

次に映った、ライトに照らされた舞台に
そこに、映っていたものは……！
「……!!」
俺と一緒に行った文化祭で、楽しそうにはしゃいでいた――アリア。
武偵鍋のイベントで、せっせと鍋奉行をやってくれていた――白雪。
ヒルダとの戦いから生還し、ようやく自由になれたハズの――理子。
絵画の意外な才能を見出され、教務科から表彰されていた――レキ。
バスカービルの4人が、血まみれになり武器のピクリとも動かない状態で倒れ、さっきの――

あとがき

みなさん！　長らくお待たせいたしました！
いよいよ4月から、『緋弾（ひだん）のアリア』のアニメが放送されますよ！
今すぐ携帯のスケジューラーにアラーム予約をしちゃいましょう！
――武偵（ぶてい）憲章5条！　行動に疾（と）くあれ、でございます！
放送局はTBSさん、BS-TBSさんで、制作スタジオは元気いっぱいのJ.C.STAFFさん。まさにSランク武偵たちによる大作戦ですね。
信頼と実績のシナリオ会議には赤松（あかまつ）もほぼ毎回参加させていただき、アリアたちの魅力を力いっぱいアピールしてきました！　ファンレターはもちろん、文庫本の奥付にあるQRコードから皆さんが送ってくださった熱いメッセージもバッチリお伝えして参りましたよっ！

そしてアニメの他にも、アリア・ワールドは元気いっぱいに拡大中です。
武偵高の生徒になって遊ぶゲーム『大バトル！　探偵スクール～緋弾のアリア～』は、携帯からお楽しみいただけます。拳銃（けんじゅう）のように携帯を抜き、今すぐ参戦しましょう！
Flying DOGさんのホームページでは、アリア・白雪（しらゆき）の声優さん達によるウェブラジオ

が放送中です。こちらもアクセスすれば、今すぐ楽しめるのが、インターネットのいいところですね。現代に生きてよかった！

一方、古代からの歴史を持つ「紙」―だってアリアで大賑（おおにぎ）わいです。

私が原作を書いた『緋弾のアリアＡＡ（ダブルエー）』１巻も、ヤングガンガンコミックスより発売中です。こちらはアリアたちと後輩の女の子たちが織り成す、女子同上の友情と勝負の物語。超能力控（ステルス）え目・実在武器多めでお届けしております！

月刊コミックアライブではコミック版『緋弾のアリア』に加え、４コママンガ『緋弾のアリアちゃん』も連載中です。こちらでは一層ちっこかわいくなったアリアたちが、ゆるふわな日常（!?）を明るく楽しく転（ころ）げ回ってます。

あれもこれも、このあとがきの後にある告知ページからコレクションできます。

それもこれも、この本をご購読下さったあなたのおかげで生まれたのです。

そしてそれは続きます。皆さんの応援がある限り、アリアは次へ、次へ、次（Next）へ、次（Next）へ――それでは今回は、あの言葉でお別れしましょう。

――Go For The NEXT!!!――

２０１１年３月吉日　赤松中学（ちゅうがく）

■今回の表紙は1巻ぶりのアリアということで
気合入れました!!
刀バージョンはコミック版では出てましたが
私は描くのは初めてなので
いつもと勝手が違う感じではありましたが
楽しかったです。

さて次はいよいよ10巻ですね!
今回もラストが「ええっ!」というヒキでしたので
次巻が楽しみです。

6巻発売&アニメ開始おめでとうございます

ついにお茶の間で
あらぶるツインテールが
拝めるかと思うと
胸熱です

漫画の方も
よろしくね～！

文庫9巻発売
&
TVアニメスタート
おめでとう
ございます

緋弾の
アリア
ちゃんも
よろしく
です

“アリア”のスピンオフ4コマはじまるよー！

緋弾のアリアちゃん

原作 赤松中学
キャラクターデザイン こぶいち
作画 武シノブ

3月26日発売の
コミックアライブ5月号より連載開始！

コミックアライブ公式サイト
http://www.mediafactory.co.jp/comic-alive/

緋弾のアリアA

Aria the Scarlet Ammo Double A

原作：赤松中学　キャラクターデザイン：こぶいち　漫画：橘書画子
ヤングガンガン（スクウェア・エニックス）にて好評連載中!

MF文庫
J

緋弾のアリアIX
スパーク・アウト
蒼き閃光

発行　2011年3月31日　初版第一刷発行

著者　赤松中学

発行人　三坂泰二

発行所　株式会社 メディアファクトリー
〒104-0061 東京都中央区銀座 8-4-17

印刷・製本　株式会社廣済堂

©2011 Chugaku Akamatsu
Printed in Japan　ISBN 978-4-8401-3859-8 C0193

※本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、固くお断りいたします。
※定価はカバーに表示してあります。
※乱丁本・落丁本はお取替えいたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。
※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。
メディアファクトリー　カスタマーサポートセンター
電話:0570-002-001
受付時間:10:00～18:00(土日、祝日除く)

※この小説はフィクションであり、実在の人物・団体・地名等とは一切関係ありません

【 ファンレター、作品のご感想をお待ちしています 】

あて先:〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト　株式会社メディアファクトリー
MF文庫J編集部気付　「赤松中学先生」係　「こぶいち先生」係

左記より本書に関するアンケートにご協力ください。

★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料待ち受けプレゼント!　★サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。　★中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから回答してください。